

# 慶應義塾大学教養研究センター外部評価 活動報告会

「みいだす・つなげる・ひろげる」

—教養研究センターの過去・現在・未来—

---



慶應義塾大学教養研究センター  
Keio Research Center for the Liberal Arts

# 慶應義塾大学教養研究センター外部評価 活動報告会

「みいだす・つなげる・ひろげる」——教養研究センターの過去・現在・未来——

2008年3月8日(土) 14:00～17:30  
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 大会議室にて

## Program

- |        |   |                   |
|--------|---|-------------------|
| 14:00～ | あいさつ  | 横山千晶 (所長 法学部教授)   |
| 14:05～ | 慶應義塾大学教養研究センターの活動を振り返って<br>—みいだす・つなげる・ひろげる— | 横山千晶              |
| 14:20～ | 「みいだす」                                      | 佐藤 望 (副所長 商学部教授)  |
| 14:40～ | 「つなげる」                                      | 萩原眞一 (副所長 理工学部教授) |
| 15:00～ | 「ひろげる」                                      | 中島陽子 (副所長 文学部教授)  |
| 15:20～ | まとめ —教養研究センターのこれから—<br>10年目に向けて             | 横山千晶              |
| 15:40～ | 質疑応答&ディスカッション                               |                   |
| 16:40～ | 外部評価委員からのコメント・アドバイス                         | (17:30 まで)        |

## 外部評価委員

役職は報告会当時のもの

- 金子 郁容 (慶應義塾大学 政策・メディア研究科 委員長)  
川島 啓二 (文部科学省国立教育政策研究所 高等教育研究部総括研究官)  
菊池 重雄 (玉川大学コア・FYE 教育センター センター長)  
榊原 一 (NHK 放送文化研究所 所長)  
菅原 幸子 (財団法人横浜市芸術文化振興財団 支援協働グループ グループ長)  
日比谷潤子 (国際基督教大学 教学改革本部長)

# ごあいさつ

大学教養研究センター所長 横山千晶

慶應義塾大学教養研究センターが開所してから5年8カ月になります。開所当時から5年後には外部評価を受けるということを決めていました。5年経った時点で、自分たちがいま行っていることに満足をしていない、まだまだ現在進行形の状態にあるので、まだ早いという思いがどこにあるのは事実です。しかし、当初外部評価をやろうと決意したことには意味があります。つまり、一回立ち止まって振り返らないと、自分たちがどこをどう歩いてきたのかまったくわからないということです。私どもは2月5日に今日に先駆けまして内部評価を行いました。そしてそれを行う前には、所長・副所長ほかが集まりどのような形で内部評価を行っていくかということを話し合いました。これは大変自虐的なものでした。つまり、反省点ばかりが出てくるのです。そのまま内部評価に挑んだところ、実際に活動に参加してくださっている方たちやそれ以外の方たちも大勢集まってくださいましたが、そこで「どうしてそんなに自虐的にならなくちゃいけないの。こういうよい点もあるじゃないか」とかえって指導していただいたことで、自分たちがやってきたことの意味はこうだったのかというのも見えてきました。これらを経て今日はこの外部評価に臨んでおります。ごあいさつが遅くなりましたが、私、この教養研究センターの所長をしております横山千晶と申します。今日は一日よろしく願いいたします。

後ほど改めてセンターの組織を紹介させていただきますが、教養研究センターは所長1名のほか副所長が3名おります。私の左手に座っていらっしゃる3名が副所長の先生方です。紹介させていただきます。佐藤望副所長。萩原眞一副所長。中島陽子副所長です。最初に私がいままでの5年8カ月の活動を総括させていただきます。そのなかでこの活動を「みいだす」「つなげる」「ひろげる」という3つのキーワードに分けた理由も含めてご紹介したいと思います。そのあとで、佐藤、萩原、中島の順で「みいだす」「つなげる」「ひろげる」の各論を報告していただき、最後に私がもう



一回この5年を経て私どもが変わった点をご紹介させていただき、これからどこへ行こうとしているのかということについて総括をさせていただきます。そこで約10分間の休憩をとらせていただき質疑応答、ディスカッションで1時間、その後、これからご紹介いたします外部評価の先生方からコメントをいただきたいと思えます。

内部評価では自分たちの活動の意義が改めてわかりました。しかし、外から見たらそれがどう見えるかということ、それがもっとも大切です。そこで本来ならば内と外の仲介役としての学生さんにも評価委員に入ってもらったのですが、今日はオーディエンスに入ってくださいたいと思います。とにかく外からの目というのが大変重要です。さて、今回は外部評価委員の先生方6名にご協力を願いましたが、次の観点から評価者の皆さんを選ばせていただきました。ひとつは内側の目で物事が見られる方、しかも批判的に見てくださる方ということです。あともうひとつは私ども教養研究センターと同じような活動を展開し、そしてこの教養研究センターとも関わりのある方。そしてもう少し広い意味で日本の高等教育全般を考えている方。そして、社会とのつながりからこの教養研

究センターを審査できる、社会の目をお持ちの方。あ  
とこの教養研究センターのある日吉キャンパスの位置  
を考えて、社会とすぐに連携できるところといます  
と横浜市があります。地域連携の点からの目をお持ち  
の方です。こういった点から外部評価委員の先生方を  
選ばせていただきました。では外部評価委員の先生方  
をご紹介しますと思います。

まずは慶應義塾大学の大学院政策メディア研究科の  
委員長でもいらっしゃる金子郁容先生です。金子先生  
はボランティアのあり方とそのネットワークの分野で  
もとても広い視点をお持ちですので、その点からも教  
養研究センターの活動を精査していただけたらと思っ  
ております。

川島啓二先生は文部科学省国立教育政策研究所高等  
教育研究部の総括研究官でいらっしゃいます。日本の  
高等教育の専門家でいらっしゃいます。また、この3  
月11日に発足します初年次教育学会の理事のおひと  
りとして、大変お忙しい最中にお時間を割いていただ  
きました。日本の高等教育のあり方を踏まえながら私  
どもの活動を見ていただきたいと思っております。

あと、私ども教養研究センターが目指す分野で活動  
し、なおかつ私どものセンターの先輩でもいらっしゃる  
玉川大学コア・FYE教育センター所長の菊池重雄先  
生。菊池先生の所属しておりますコア・FYE教育セン  
ターのFYEはFirst Year Experienceの略です。まさに  
初年次教育ということですが、日本のなかでは初年次  
教育の草分け的存在が玉川大学です。私どもの先輩と  
して厳しいご批判をいただきたいと思っております。

社会人の目としましては、NHK放送文化研究所所  
長の榊原一さんにいらしていただいております。榊原  
さんは私ども慶應義塾大学の社中でもございまして、  
大先輩でもあります。また、メディア教育の分野では、  
私どもがまさにいろいろとご意見をお聞きしたい第一  
人者でもあると思います。

横浜市からは、横浜市芸術文化振興財団の菅原幸子  
さんに来ていただきました。横浜市はもちろん教育の  
分野でもさまざまな活動を行っております。また、地  
域との連携を考えると、やはり横浜市のご意見は  
ぜひとも必要だと思ひまして、今回外部評価をお願い

しました。明日はまた別のシンポジウムを企画なさっ  
ているということで、お忙しい中お越し下さり恐縮で  
すが、どうぞよろしくお願いいたします。

そして最後になりますが、国際基督教大学の教学改  
革本部長の日比谷潤子先生です。日比谷先生は実は、  
以前慶應義塾大学にいらっしゃいました。慶應、そ  
して国際基督教大学双方の目から私どもの活動を見て  
いただけたらと思っております。

みなさまどうぞよろしくお願いいたします。

## 第1部

# 教養研究センターの活動を振り返って ——みいだす・つなげる・ひろげる——

横山 今日の活動報告についても一度簡単にご説明申し上げます。まず私、横山がこの5年8カ月の活動を振り返る作業を最初の15分で行わせていただきます。そのなかで「みいだす」「つなげる」「ひろげる」という3つのキーワードについても簡単に紹介します。各内容につきましては、佐藤望副所長に「みいだす」という点から、萩原真一副所長に「つなげる」という点から、そして中島陽子副所長に「ひろげる」という点からそれぞれ20分で発表させていただきます。最後に、私がまとめとして「この先10年目に向けて」ということで、これからのロードマップを示させていただきます。おそらく10年目にはまた外部評価を受けることになるでしょうから、それまでに私たちがどう変わっていったらいいのかという理想像です。

### 慶應義塾大学教養研究センターの活動を振り返って

横山 それでは私から発表をさせていただきたいと思えます。まず慶應義塾大学教養研究センターの活動を振り返る際に、「みいだす」「つなげる」「ひろげる」の3つの言葉をキーワードにした意味について説明させていただきます。続いて過去5年間の取り組み、いままでの活動についてお話しします。そしてそれらの活動報告を各論へとつないでいくこととなります。なお、ひとつ付け加えさせていただきますと、この場では所長・副所長が中心になって報告を行わせていただきますが、今回の報告会のプレゼンテーションに関しましては、各事業に関わってくださった先生方のご意見をまとめる形で外部評

価に臨んでおります。つまりこの4人の発表するものはこの教養研究センターに関わってくださった方々の意見であると思っただけであれば幸いです。

#### 1. 慶應義塾大学教養研究センターとは？

一体、慶應義塾大学の教養研究センターとは何なのか。これは「教養を研究する」とは一体どういうことなのかということでもあります。それにはどういう経緯をもってこのセンターの設立にいたったのかということから考えてみる必要があると思えます。おそらく教養という言葉が、今ほど使われていて、なおかつ今ほど意味がはっきりしない、という時代はないと思えます。たとえば20世紀初頭の教養という用語とエリート教養主義を指していたといえます。もちろん今でも教養というと、エリートを養成するという、つまりリーダーシップをとる人間を養成することであると思われている方は多くいらっしゃるのではないかと思います。ただし戦後のいわゆる教育の大衆化に伴いまして教養の意味も大きく変わってきましたし、高等教育の意味や役割も大きく変わってきました。教養という言葉を巡ってさまざまな価値観のぶつかり合うこの時代に、もう一度教養の意義を問い直すということを私たちは迫られていると考えています。もちろん、今からほぼ20年前になりますが、大綱化がひとつの大きなメルクマールでした。同時に教養というのが、教え、養うものだとすれば、その意味での新たな「知」をどうやって発見するか、あるいは発掘するか、そしてそれをどうやって伝えるかという手法についても、私たちは考えていかなければいけません。その場として、このセンター設立が促されたといえます。

1990年代の大綱化以来、慶應義塾大学でもさまざまな試みが行われてきました。しかし、のちほどの各論で

## 慶應義塾大学教養研究センター 活動報告会

みいだす・つなげる・ひろげる  
—教養研究センターの過去・現在・未来—

2008年3月8日



慶應義塾大学教養研究センターの  
活動を振り返って

—みいだす・つなげる・ひろげるの意味—

横山千晶

## アウトライン



1. 慶應義塾大学教養研究センターとは？
2. 5年間の取り組み
3. 「みいだす」「つなげる」「ひろげる」の意味



1.

## 慶應義塾大学教養研究センターとは？



## 設立の目的



- この時代の教養の意義を問い直す
- 新たな「知」を発見し、どのように伝えるかを検討する
- 大綱化以来の各学部の試みを検討する
- 学部と分野を超えた話し合いの場を構築する
- 共有される問題をともに解決する場を構築する

## 教養研究センターのミッション



「知」を統合、継承、再構築し、新たな  
「知」を創造する  
→慶應がめざす「教養」の構築

も何度も出ますように、私たちにはひとつの大きな問題がありました。それはこの慶應義塾大学のあり方そのものです。つまり学部分断、あるいは分野、教室、研究所によって組織が分断されてしまっているという実情です。大綱化以来、各分野で行われてきた試みというのはその狭い範囲のなかにとどまっていた、慶應義塾全体に影響を及ぼす改革とはなっていないという現実があります。そこで学部と分野を超えた話し合いの場としてこの教養研究センターが作られる必要があったということがいえるでしょう。また、さまざまな試みを行っていくうえで見えてきたことは、抱えている問題点が往々にして各組織ともに共通しているということです。そして問題点を共有し、ともに解決し、成功例を他の分野でも生かしていく場として、この教養研究センターの設立が促されたのです。

それでは教養とは、何を養って、何を伝えていくかということ、新たな「知」というのは一体何なのかということなどを次に考えてみたいと思います。センターのパンフレットを開きますと、「オーガナイゼーション」のところに説明があります。「ミッション」としてあげられている部分をご覧ください。そこには「知」を統合、継承、再構築し、新たな「知」を創造する、と出ております。つまり、複雑な知というものを統合し、関係づけていく。また、「知」というものは過去から脈々と伝えられ、積み上げられてきたものです。それを継承し、この時代の知を付け加えることで再構築して、新たな「知」として創造し、伝えていく。この一環の作業が「知」を巡るひとつの大きな営みだと思えます。それがまさに慶應義塾の目指す「教養」の構築の土台となっているわけです。

では、一体慶應義塾が考える、あるいは教養研究センターが考える教養とはどのようなものなのかということに関しては、私たちは先ほどから何度も出ている「知」の分析から入らなくてはなりません。お手元の資料を見ていただきたいのですが、私たち教養研究センターがはじめに考えたのは、まず中心は「ヒト」であるということです。この「ヒト」は身体を持ち、言葉を使って生きています。それを大前提に据え、そのなかで知というものを考えてみました。分野で考えると、たとえば「文化知」「科学知」「社会知」というものがありますが、当然

我々はこの3つの知をばらばらに考えることはできません。この3つを、身体と言葉を使ってつなげていき、ひろげていき、伝えていくことになります。そのうえで「身体知」と「言語知」も必要になってくるでしょう。そしてこのすべてを統括するものとして、「複合知」というものを考えていかななくてはなりません。これらはばらばらに存在するものではないわけです。そして知の構成をこういった6つから考えた場合、考える人として、あるいは動物として生きていくヒトとして共によりよく生きていくための知の連関が教養の神髄となるのではないのでしょうか。このようにまず教養というものが、ヒトとして共によりよく生きるための術である、そこから教養を考えようというところから私たちは出発しました。

教養研究センターの現所員は200名です。そして後ほど組織図のなかで紹介しますが、21名のコーディネーターを中心にしてこの200名がつながりながら活動を展開しております。ただし、これはよくもあり悪くもあるのですが、教養研究センターでは、専門の研究者がおりません。つまり所員はすべて各学部あるいは諸研究所に所属しながら活動を展開しております。簡単に言ってしまうとボランティアなのです。学部の仕事をすべてこなしながらこの教養研究センターの活動も同時に行っています。これには体力が必要となります。そして良心が必要となります。センターに関わって教養というものを考えていこうという意気込みがないと、この教養研究センターは成り立たないということになります。あともうひとつ、後ほど実験授業の紹介が出てきますが、研究したことを実践していくうえで何が必要になるかといいますと、当然学生が必要になります。それと運営していくうえで職員の協力が必要になります。ということで、各プロジェクトは教員・職員・学生が平等に関わって、平等に意見を言い合って運営されています。最後に挙げさせていただきます特色としましては、この教養研究センターは教員・職員・学生の三者が学部や役割を超えて平等に共働の環境で研究し、実践し、成果を大学の全体、広くは社会へと反映させていく「知の共有地」であるということです。

さて、2002年開所当時のあり方をご紹介します。パンフレットのほうもご参照いただければと思います。4

時代が必要とする「教養」とは？  
「知」の「つながり」と「ひろがり」



人として「ヒト」として共によりよく生きるための知の連関



慶應義塾大学教養研究センターの特色



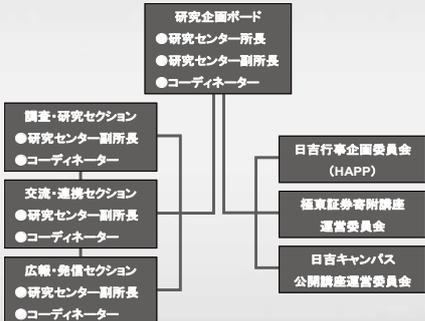
- ・ 2002年7月開所  
現在所員は200名
- ・ 教養研究センターの特色  
所員は各学部・諸研究所に所属しながら活動を展開  
教員・職員・学生がともに活動に参加

→教員・職員・学生の3者が学部や役割を超えた共同のもとで研究し、実践し、成果を大学のシステムに反映させていく「知の共有地」

開所当時の組織



コーディネート・オフィス



資金



(慶應義塾内)

- ・ 塾内経常費
- ・ 塾内調整費
- ・ 創立150年記念事業未来先導基金

(慶應義塾外)

- ・ 学術フロンティア(文部科学省)
- ・ 寄付金

2. 5年間の取り組み



- (1) 研究
- (2) 実践
- (3) フィードバック

※資料1を参照

ページの右下に出ています組織図をこちらに拡大させていただきます。まずは運営組織としてトップに立つ研究企画ボードがあります。左側が各セクション、あと右側がそれぞれの活動に特化した委員会になっております。まず左側のセクションを見ていただきたいと思います。先ほどもご紹介しましたように所長ひとりと、副所長が3人という構成をとっておりまして、それぞれのセクションを各副所長が担当するという形になっております。

まずは新たな知を創造するために必要な教養研究あるいは教養教育に関する国内外の調査を行い、独自の研究を推進するという調査・研究セクションです。また同時に塾内外との交流を図りながらその研究をより活性化するための交流・連携セクションがあります。そしてそれらの実践した活動を発信していく広報・発信セクションという3つのセクションにわかれております。そしてこれものちほどご紹介すると思っておりますけれども、日吉行事企画委員会、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会は、それぞれ委員会についている名前の活動を個別に推進していくための委員会です。

次に資金ですが、塾内部と外部にわかれます。慶應義塾内では塾内の経常費と現在のところでは塾内の調整費を使わせていただいて活動しております。それと2008年度は創立150年を迎えるのを記念事業未来先導基金を受けております。また、慶應義塾外では、これは塾とのマッチングファンドになりますが、文部科学省から出ております学術フロンティアの資金があります。それと、先ほどの組織図でも紹介させていただきました極東証券寄附講座に代表されるような外からの寄付金を受けての活動も展開されています。

こういった組織をもとにして、この5年8カ月の取り組みを次に見ていきたいと思っております。活動は非常に多岐にわたりますが、研究、実践、フィードバックの3つからご紹介させていただきたいと思います。

## 2. 5年間の取り組み

横山 みなさんのお手元に資料の1から4が配布されていると思います。資料の1に関しましては後ほどゆっくりご覧になっていただきたいと思います。私どもの活動を表にまとめたものです。こちらを参考にしながら聞いていただきたいと思います。

研究したことを実践し、その成果をフィードバックするという3点は強く連携しあっているわけですが、まず研究というものはもちろん個人の研究、そして慶應義塾の現状の研究、そしてもう少し広い意味で高等教育のあり方そのものの研究という3分野にわかれています。当然、個人の研究とは慶應義塾大学の研究の基礎になるわけですが、これにはあとでご紹介します、一般研究の支援と同時に研究成果を学生と社会人に向けて読みやすい形で紹介する選書の刊行がござります。いままでのところ4冊が出版されております。次は慶應内部を中心にして教養のあり方を分析し、モデルを提示したり、カリキュラム改革の提案を行っていくのが基盤研究です。現在のところふたつの基盤研究が行われておりますが、これについても後ほど詳しい説明をさせていただきます。

そしてこういった一般研究や基盤研究に加えて、これは教養研究センターでは最大の規模と資金で運営されている特定研究として学術フロンティアがあります。慶應を中心としてより広い高等教育のモデルを提示することがその使命です。このように研究も「個」から「世界」へと広がっています。

当然、研究したことを実践する場が必要となってきます。その場となるのが実験授業です。続いて成果の上がった実験授業を正規科目化していくことを目指します。設置科目として実験授業が根づけば、次に新たな実験授業を展開していくことになります。こういった3段階が実践活動の中にあるわけです。極東証券株式会社からの寄付を受けて開講されている「アカデミック・スキルズ」と「生命の教養学」、あと基盤研究の「身体知プロジェクト」のなかでやはり身体を通しての理解を促すいくつかの実験授業が行われております。これに関しても後ほどご説明を申し上げたいと思っております。それから日吉行事企画委員会（HAPP）。これは Hi-yoshi Art and

### (1) 研究→「個」から「世界」へ



- 一般研究の支援  
教養研究センター選書の刊行
- 基盤研究  
「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」  
「身体知プロジェクト」
- 特定研究  
2000年～2007年  
学術フロンティア  
「超表象デジタル研究センター  
ー表象文化に関する融合研究ー」

### (2) 実践→研究成果を試す



- 設置科目および実験授業
  - ・極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」
  - ・極東証券寄附講座「生命の教養学」
  - ・基盤研究「身体知プロジェクト」実験授業  
「体をひらく、心をひらく」、「声プロジェクト」
- HAPP(日吉行事企画委員会)関連行事
- 日吉キャンパス公開講座
- 交流・連携セクション「開かれゆくキャンパス」

### (3) 成果をひろげ、フィードバックする



- 実験授業の正規授業化  
「アカデミック・スキルズ」、「生命の教養学」
- 成果のさまざまな発信→広報・発信セクション
- 学生のサポート、教員のサポート  
「学生フォーラム」の開催  
調査・研究セクション連続セミナー「FDを考える」、  
「FDワークショップ」

### 実践から見えてきたことの例



#### 「FD」とは何なのか:新しいFDを考える

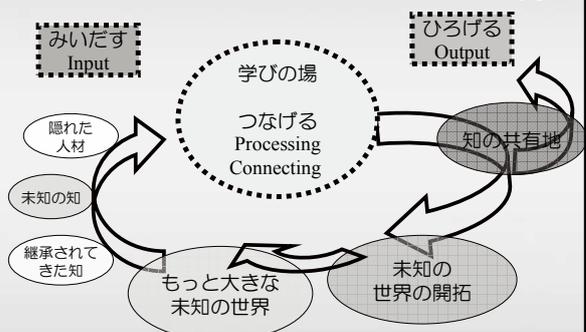
- 学生の学びの状況を知ること  
→今の学生にとって「情報源」とは何なのか
- 学生の学習環境を学ぶこと  
→学生を取り巻く環境と躰きを知ること
- 研究と教育のバランスをとれるようにすること  
→教員の環境を整えること

### 3.

#### 「みいだす」「つなげる」「ひろげる」 の意味



### 2. 「みいだす」「つなげる」「ひろげる」 の意味



Performance Project の略ですが、Art と Performance という言葉に代表されるように、芸術を通して感性に訴えるような経験を学生に与えようという経験型の行事を春学期に行っております。そして秋には実際にそういったイベントを学生が企画運営し、それを発表するところまで、教員がサポートをしながら行っていくというシステムをとります。これもひとつ実践の例だと思います。

そしてあともうひとつ、これは交流・連携セクションが中心となって行った「開かれゆくキャンパス」です。これは他者との交流を目指します。たとえば慶應のなかには留学生という、ある意味では外部からの人々がいます。そういった人々の意見を大いに聞いて、それを私たちの教育のなかにあるいは研究のなかで反映させていくということもありますし、あとは塾内の他キャンパスや一貫校とつながっていくという試みもあります。そしてあとは先ほど横浜市との連携ということを行いましたけれども、日吉駅をはさんで向こう側は商店街になっております。そういった商店街と連携していくという、商店街プロジェクトもあります。これらを「開かれゆくキャンパス」のイベントとして、研究として、あるいは実践授業として展開してきました。

今までの活動を概観してきましたが、このように私たちが行ってきた活動は大変多岐にわたっております。どのようにしてその成果をフィードバックしていくか、これが次の問題です。先ほどもいいましたように実験授業を経て正規授業化したコンテンツもあります。「アカデミック・スキルズ」と「生命の教養学」です。あと、成果はさまざまな形で発信されていきます。これが広報・発信セクションの役割です。そういった過程で学生と教員をどのような形でサポートするかも大きなテーマとして浮かび上がってきました。そのために学生が他大学の学生と意見交換を行い、慶應のカリキュラムに対して提案を行う「学生フォーラム」を開催したり、あるいは、これは開所から大きなテーマだったのですが、FD を考えるいくつかのセミナーとワークショップを開催してきました。これについては、後ほどまた各論のなかでご説明いたします。

当然この研究、実践、フィードバックを経ながら、私たち関わっている者も学んでいきます。たとえばそのな

かのひとつの例が、最後に挙げたFD です。FD というのはただの授業評価だけではありません。学生の学びの状況はそれこそ年単位でどんどん変わってきています。たとえば「調べる」ということひとつとっても、図書館で本を調べるということだけではないという今の状況をまず教員が知る必要があります。あと学習環境がどんどん複雑化することで、教員側もそうですが、学生もつまづく点がとても多くなってきます。そういった学生をとりまく環境の複雑さと学生がどういうところでつまづくかということを知ることも私たち教育に関わる者の使命でしょう。そして最後、研究者でもある教員が研究と教育のバランスをどのようにとっていくか、という問題があります。変化する大学の環境の中で私たちひとりひとりがアドミニストレーションにも参加していく情勢を考えると、ただの研究、教育のサイクルだけではすまない状況のなかで大学はおかれているわけです。そういった環境をよりよい状態に整えないと研究と教育は行えないだろうという具合に私たちは考えました。

### 3. 「みいだす」「つなげる」「ひろげる」の意味

以上をふまえたうえで、今回私たちの活動を振り返るのに「みいだす」「つなげる」「ひろげる」という3つのキーワードを使わせていただくわけですが、あらためてこの3つの意味を考えてみたいと思います。まず、私たちは当然「知」自体と、それに関わる人材を発掘しなくてははいけません。あるいはその知の伝達法のアイデアを見いだしていかなくてははいけません。そしてそれをつなげていくわけです。たとえば、さまざまな「知」があり、さまざまな人材がおり、それらが言葉は悪いですがタコソボの中に入っている状況が現在です。それぞれをそのなかから出してきてつなげていく作業が必要となります。そして最終的には関わってきた人間が互いにつながるだけでなく、その外にいる人々、つまり学生であったり直接活動に関わっていない人々とどうやってつながって「共有知」を作っていくかということが一番重要な知のあり方になっていくと思います。「知」の連関に対して私たちはこういったプロセスを考えなくてははいけません。そして当然これで終わりというわけではありません。新たな未知の世界がこの連関のなかで見えてくる

でしょう。そしてひとつの未知の世界があると、もっと大きな未知の世界がその裏に隠れているわけで、そのたびに私たちは新たな知と新たな人材を見つけていかなくはいけないということです。この円環はぐるぐる回っているのではなく螺旋となってどんどん広がっていくと考えていただければよいのです。以上のコンセプトからこの3つのキーワードを据えさせていただきます。では、さっそく各論へ移りたいと思います。最初の「みいだす」の部分を佐藤望副所長をお願いします。

## 「みいだす」

佐藤望 ただいまご紹介にあずかりました佐藤望です。よろしくお願いたします。教養センターの活動のなかで「みいだす」「つなげる」「ひろげる」という分類をしたのですが、教養研究センターの活動ひとつひとつを取り上げて説明していくと非常に冗長になってしまうと思い、この3つの切り口を所長中心に考えました。そして、私はその「みいだす」という部分を担当することになりました。

「みいだす」という活動はどういうことかということ、を、教養研究センターの設立の経緯と合わせて考えてみたいと思います。というのは、我々教員はそれぞれある種のプライドを持っていると思います。それは、どんなに小さいことであれ、ここでは世界で一番だというもの、を何かしら大学の教員は持っているということからくるプライドだと思います。20世紀の学問というのはどんどん専門化が進んでいって、いろいろな新たな発見というのをやっていったわけです。ところがそれぞれの分野はどんどん狭くなっているような気がします。私は音楽の分野、音楽学という学問をやっているのですが、この音楽学も見てみると、時代研究が、作曲家研究へ、それが個々の作品研究へ、またさらには、作品のなかのさらに一部といったように、どんどん細分化してきているように見えます。そしてここ日吉キャンパスは非常に大きなところでして、いろいろな研究をしている人がいます。私は、ここにやって来た当初本当にびっくりしました。毎日細胞をすりつぶして顕微鏡で見ている先生とか、休みになるといろいろなところに出かけていって土を掘っ

ている先生とかいろいろな人がいるわけです。そういう研究自体はすごくおもしろいものなのですが、ともすればそれが学生の立場からしてみるとなんだかよくわからないものがタコツボのなかに入っているということにもなりかねません。

今、それをどうやって引き出して、新しい「知」の連関のなかにつなげていくかということが大切になっていくと思います。そしてキャンパスのなかにはそういう点ではものすごい人たちがいるんだということがわかりつつも、それが細分化して分断化されていってわけがわからなくなって、そこから出てこれなくなっている状況のなかで、ある種学問が閉塞している、教育が閉塞しているところから新しい「知」をつなげて生み出していく。つまり、教養というのは専門の準備としてあるものではなくて、教養があって専門があって、さらにその専門をやった人たちがさらに奥を広げていくことによって、専門の向こうにさらにまたより深く広い教養があるという考え方でこのセンターを立ち上げたとは私は認識しています。

これは、教養というキーワードによって「知」が縮小再生産ではなくて、拡大再生産されなければいけない、そしてそれは我々が研究のために研究をやるというのではなくて、我々の研究は社会と結びつき、学生と結びついてやっていかなくはいけないという認識です。おそらくあらゆる学問分野でそういうことが言われてきたのだと思います。

こういうことを考えているのは我々だけではありません。いろいろなキャンパスで知識を統合化するためのいろいろな活動が行われてきています。そうしたことも含めて、教養研究センターは、新しい人を発掘し、それをつなげて新しいアイデアを次々出していくことを目指してきました。

キャンパスのなかのさまざまな人とさまざまなアイデアを発掘すること、これが私は「みいだす」ということではないかと考えてみました。ここでは新しいアプローチを見いだしたり、新しい課題を見いだす、あるいは新しいアイデアを発掘するという3つにわけて考え、後ほどこの3つにわけてひとつひとつの活動を振り返ってみたいと思いますが、その前に総合的な観点か



らの自己評価をしてみたいと思います。私は設立のときからこのセンターに関わってきましたが、この5年間を「みいだす」という観点から私なりに振り返ってみると、多くの課題を残しながらも前進した5年間だったかなと思っています。というのは日吉キャンパスというのは非常に人材が多様で豊富なのですが、慶應義塾というのは非常に古い伝統のある学校でもありますから、これまでの組織というのがいろいろな形で存在しているわけです。つまり旧来の学部、私は商学部なのですが、なぜ音楽の先生で商学部なのかはわからないのですが、たまたまご縁があって商学部に雇っていただいて商学部に所属しています。キャンパス全体の中では人文部門会という学部横断の部会に属しているわけです。そしてさらには音楽学研究室という、私一人しかいませんが、そこにも所属しています。そこで日吉キャンパスの全学部の音楽教育を私があずかっています。それぞれの組織にはそれぞれの歴史があるし、しがらみとってしまえばネガティブな表現になってしまいますが、そういったものもあります。ですから、教養研究センターができたからといって、そういった旧来的な意識を根本的に変えるところまではおそらくっていないというのが私の総合的な評価だと思います。ただし今まで分断された各組織のなかにあったものが、横につながって、しかも良心やボランティア精神でもってつながっていき、総合していこ

うということで、一石を投じるぐらいはできているかなというふうには考えています。

#### ①新しいアプローチを見いだす

次に先ほど申し上げた3つの観点から活動を見ていきたいと思います。まずは「新しいアプローチ」を見いだすということを考えてみたいと思います。学術フロンティア「超表象デジタル研究」ですが、これは予算的にも規模的にも教養研究センターでは非常に大きなプロジェクトです。これは端的に言えば、新しい教養知——さきほど私が申し上げたような意味での専門性をさらに深めた向こうにある教養的知の——の開拓とバリアフリー・キャンパスのモデルをつくりあげていくことを目指す研究です。ここでバリアフリーというのはつまりあちこちにスロープを付けたり、階段をフラットにしたらバリアフリーというのではなくて、そういう意味ももちろん含んだうえで、それだけではなく社会とのバリアをどうやってなくすか、学生と教員というバリア、あるいはアカデミックのバリアというものをどういうふうになくくして、先ほどいったようなつなげる「知」を作り上げていくかというのだと私は理解しております。詳しく話すと時間がかかりすぎてしまうので、簡単にお話ししますが、詳しくはホームページや報告書をごらんいただければと思います。成果としましてはさまざまな実験的な授業のあり方、歴史的教育の新しいメソッド、あるいは自分を見直すという意味での新しい研究が挙げられます。また21世紀のデジタル技術を取り入れたキャンパスというのはどういうふうにあるべきか、つまりフェイス・トゥー・フェイスの教育とデジタル教育というのをどのように組み合わせるか、これらのさまざまな現代的な課題についてのひとつの解決法とモデルを提示して実験するといったことを行ってきました。さらに、そのなかでこれまでなかった情報共有システムを作ったり、あるいは情報発信のための3CDGの開発などを行ってきました。これは非常に教養研究センターの理念を体現したプロジェクトだったといえることができると思います。

それから、教養研究センターは当初、教員同士が教えあうという場を持つために授業を公開するプロジェクト



それぞれの報告へ

「みいだす」

「つなげる」

「ひろげる」



教養研究センターの活動を振り返って

みいだす

佐藤 望

教養研究センターの経緯と  
「みいだす」活動



- ・ 教員・学生・職員をタコツボから引き出す
  - ・ キャンパスには隠れたすごい人があるという確信
  - ・ それを掘り起し、つなげ、ひろげる
- (専門を超えたその向こうにある「教養」)



知の縮小再生産から拡大再生産へ

「みいだす」の概念



- ・ さまざまな人とさまざまなアイデアを発掘すること
- ・ ここでは
  - ① 新しいアプローチを見いだす
  - ② 新しい課題を見いだす
  - ③ 新しいアイデアを発掘する

総合的観点から



- ・ 多くの課題を残しながら前進した5年間
  - 日吉キャンパスの人材は多様・豊富
  - それぞれ旧来の学部、部会、教室等のシガラミがある
  - 意識を根本的に変えるところまでは行っていない
  - 一石くらいは投じるくらいか



- ① 新しいアプローチを見いだす
- ② 新しい課題を見いだす
- ③ 新しいアイデアを発掘する

を始めました。概要は2005年から2006年にかけて授業を公開しました。公開する授業は公募をして、13名28コマの授業が参加しました。これは日吉キャンパスの規模からすると非常に少ないものです。その点からもあまり当初期待した成果は達成されませんでした。こういった授業公開といった相互フィードバックのシステムというのは、教養研究センターのように人々のボランティア精神によって集まっている組織のなかではかなり限界がある活動だということが明らかになってしまいました。

もうひとつは一般研究というものがあります。これはさまざまな研究を教養研究センターのなかに入ってきてやっていただくという活動です。これも開所当初から行っておりました。公募して採用された研究に研究スペースを供与して、その研究を報告して発表していただくというものです。部屋が使えるというインセンティブと、教養研究センターが考えてきたような基本的な姿勢ややミスマッチしたところがありまして、こういった研究が教養研究センターの中心に入っていく新しいプロジェクトが生まれていくところまではまだ進んでいないという状況です。これは2008年度に大きく見直しをして別の形での方法というものを始めています。

## ②新しい課題を見いだす

次に新しい課題を見いだすという2番目のテーマにいきます。教養研究センターは開設当初からFD、ファカルティ・ディベロップメントのプロジェクトに非常に力を入れました。教員はFDといっても「フロッピー・ディスクですか?」というような人がまだいるぐらいの認知しかありませんでした。私もその一人でしたが、ですからまずはFDとは何かということを知り、社会のなかで教員が責任を持って学生と接していけるように、自分たちの資質を高めていこうと啓発を図ることを進めました。連続セミナー5回とFDワークショップを3回やりました。FDという言葉は、世の中でやがて管理主義的なイメージで捉えられ、強制的意識ではFDというのは成功しないということがわかってきたというのがこれらの成果ではないかといえると思います。そしてFDとは何かということ新たに認識して、それが先ほど横山所長が説明したような内容につながり、またあとで説明

する教員サポートというプログラムに変わっていききました。これは非常に成功したプロジェクトに変わっていききました。

ほかに基盤研究として「大学のカリキュラム研究」というものをやりました。これは大学のカリキュラムの全体像を把握して現在の問題点を提起しながら新しい提案をしていくというものでした。この内容面に関しては萩原副所長のプレゼンで詳しく述べますので、ここでは簡単にお話しします。これは教員の良心を刺激するところがありました。つまり、自分の足元での具体的な教育改善について、いろいろな人がものすごく考えているのです。それが、声を出せる場、もしくは改善・実践できる場が見つかったときに、教員たちは動き出すということがわかってきました。このプロジェクトにはたくさんの教員が労をいとわず参加をしてくださって、これは新しい人材を見いだすという点では非常に成功したプロジェクトだったということができると思います。

## ③新しいアイデアを発掘する

これまで教養研究センターは設置以来いろいろな試行錯誤をやってきました、韓国の大学との交流をやったり、「身体知プロジェクト」というものもやり、今日お配りしたプリントにもあるように、あらゆる講演会や行事というのをやってきました。そのときに大事にしてきたのは、決してやっただけで放置はしない、その成果をきちんと発信していくということをやリ、たくさんのパンフレットを作ったりホームページで公表したりすることに非常に力を入れることでした。ただ、それはそれとして成果だと言えらると思いますが、その結果としてできた学生、教員、学外の人とのネットワークをさらに拡大していくスパイラルにのせるところまではいかず、成果報告書を出したというところまでで終わっているというのが現状かなと考えております。

全体的にいえば教養研究センターに関わる人数というのは設立当初から確実に増えて、現在は200名を数え、学部を越えて教員を活性化するところまできているということを自負しております。そして教養研究センターの認知というのは学内でもだんだん拡大して行って、大学や学部のなかでの一定の寄与をできるようになったと



## ① 新しいアプローチを見いだす



### 学術フロンティア 「超表象デジタル研究」

－教養研究センター最大のプロジェクト

☆目的

- \* 新しい教養知の開拓とバリアフリー・キャンパスの構築

☆成果

- \* 新しい教養教育(コンテンツ・学習環境)のモデル構築
- \* 情報共有CMS (hydi)、情報発信のための3DCGの開発など



### 授業公開

☆目的

- \* 教員同士が教え方を学びあい自己啓発する

☆概要

- \* 2005～2006年 公開授業を公募
- \* 13名28コマが公開に参加

☆成果

- \* 当初期待した成果は必ずしも達成されず
- \* ある程度の強制力をもってしか可能でない。教養研究センターの限界でもある



### 一般研究

☆目的

- \* さまざまな研究を教養研究センターの基幹の活動に生かす

☆概要

- \* 公募した研究に研究スペースを供与
- \* 報告と発表

☆成果

- \* インセンティブ(部屋の利用)と教養研究センターの基本姿勢とミスマッチ ⇒ 2009年度より



## ② 新しい課題を見いだす



### FD 関連のプロジェクト

☆目的

- \* FDとは何かを知り教員の啓発を図る

☆概要:

- \* 連続セミナー5回 (2003～2004年度)
- \* FDワークショップ3回(2005年度)

☆成果:

- \* 強制の意識ではFDは成功しないという認識
- \* FDとは何かという新たな認識

→ 教員サポートへの転換 (2007年度) (^^;)

思います。慶應大学は学部縦割りの強い組織なのですが、その組織のなかで多少の楔を打つぐらいの活動が教養研究センターはできたのかなと考えております。こうしてつながりができたところの課題として、所員、教職員、学生を結びつけて、組織のバリアというのをこれからさらに克服していくためには、もっとシニアの学生に来ていただいて活躍していただくとか、若いスタッフの方々を引き込んでいくということが必要になってくるのではないかと考えています。また、教育と研究の活性化を、いかにつなげて両方をプラスに持っていくか、研究だけ、教育だけということではなくて、両方をプラスに回していくためにどうするかということこれから考えていく必要があります。もうひとつは教養研究センターは問題をストレートに解決する組織ではありません。外から見ていると教養研究センターというのは大学を代表して当局と直結して何かを改革していつているように見られがちですが、むしろ逆のところがあって、われわれが新しい考え方を示して、実験をしてモデルを作り、こういうやり方がありますということを上の大学のほうに持っていくという組織であるべきだと思いますし、これまでもそのようにやってきたと思っています。そういったことに徹するということがこれからの教養研究センターの役割であるし、役割であり続けるのではないかと考えております。私のプレゼンテーションは以上です。

**横山** ありがとうございます。続きまして萩原真一副所長から「つなげる」項目についてお話ししたいと思っています。

## 「つなげる」

**萩原真一** ただいまご紹介にあずかりました萩原と申します。私は理工学部にも所属しておりますが、専門は自然科学ではなくて主に英語を担当しております。

それでは「つなげる」という観点から教養研究センターの活動を振り返ってみたいと思います。このチャートをご覧くださいますとわかりますように、「つなげる」という行為は「みいだす」という行為の次の段階に位置づけられています。慶應義塾の隠れた人材や継承されてき

た知を見いだし、掘り起こした後、それらをつなげる、コネクトすることです。

### なぜ、つなげるのか？

それにしてもなぜつなげることが重要なのでしょうか。この設問に答えるためには慶應義塾大学、とりわけ日吉キャンパスにおける組織形態が背景にあることを念頭におかなければなりません。これは先ほどから何回も指摘されていることですが、まずは教員組織の閉鎖性、複雑さを挙げることができます。先ほどいいましたように、教員は各学部、各研究所に分属されています。また同時に各部会、部門といった横断的な組織が縦割り的な組織に複雑に絡んでいる状況です。それから職員組織も非常に縦割りに構成されております。このように分断されたばらばらのタコツボ状態を克服するためには、人と人あるいは組織と組織、それからいわゆる文系と理系、そして大学と社会の間をつなぐ技術、つなぐ場を構築していくことが重要なわけです。

### どの事業がつなげているか？

教養研究センターは設立から5年8カ月経っているわけですが、その間数多くの事業、プロジェクトを展開してきました。「つなげる」という観点から次の3つのプロジェクトを取り上げたいと思います。

第1は大学カリキュラム研究と身体知プロジェクトを核とする基盤研究です。第2はアカデミック・スキルズや生命の教養学といった講義、授業を中心とする極東証券寄附講座です。それから3番目は今年度から展開し始めました教員サポートプロジェクトです。この3つのプロジェクトに絞ってお話をさせていただきたいと思います。

### 基盤研究

まず基盤研究の大学カリキュラム研究です。日吉のカリキュラムの全体像を把握してさまざまな提言を行っていくということを目的としています。日吉キャンパスでは、各学部が外国語科目や総合教育科目を独自に設置運営すると共に、学部共通の総合教育科目も設置運営されております。前者は学部という責任母体をはっきりしていますので、あまり問題は表面化しておりませんが、後

## FD 関連のプロジェクト



### ☆目的

- \* FDとは何かを知り教員の啓発を図る

### ☆概要

- \* 連続セミナー5回 (2003~2004年度)
- \* FDワークショップ3回(2005年度)

### ☆成果

- \* 強迫の意識ではFDは成功しないという認識
- \* FDとは何かという新たな認識

## 基盤研究「大学カリキュラム研究」



### ☆目的

- \* カリキュラム全体像の把握と提案

### ☆概要 (「つなげる」のプレゼンで詳述)

- \* 日吉学部共通総合教育科目の全体像の把握(第1期 2003/04)
- \* 成績評価、学部カリキュラム比較、学生アンケート、海外事例調査などを広範に実施(第2期 2005/06)
- \* 4年間をみこした教養教育の研究(第3期 2007/08)

### ☆成果

- \* 各学部・各専門の教員の参画し非常に活発  
(足下の具体的な教育改善には多くの教員が意欲)

## ③ 新しいアイデアを発掘する



## アイデアをみいだす



### ☆韓国他海外の大学の調査、交流

- \* 学生Web会議(2004年)
- \* 韓国大学(ソウル国立大学他)相互訪問(2004~2005)

### ☆基盤研究「身体知プロジェクト」

- \* 実験授業・研究の発信

### ☆その他単発の講演会等

- \* 教員・学生のネットワークの拡大にいかに関与するかという課題

## おわりに



### ☆全体的成果

- \* 教養研究センターに日常的に関わる人数は増加している ⇒ 学部を超えて教員を活性化
- \* 教養研究センターの認知は増大している ⇒ 大学・学部の教育への一定の関与
- \* 縦割りの強い組織の中で多少の楔を打ってきた

## おわりに



### ☆課題

- \* 所員、教員間、学生、職員のバリアの克服  
⇒ シニア学生、若いスタッフの引き込み
- \* 教育と研究の活性化にいかに関与するか
- \* 問題をストレートに解決する機関ではなく、新しい考え方を示し、実験をし、規範を示すことに徹する

者は学部を越えて教育内容を検討する機関や場が存在せず、長年改善を求められてきております。そこで学部共通の総合教育科目の現状を洗いざらい点検・検討し、問題点を指摘して到達可能な提言を行うことを目指した検討会が立ち上がりました。成果としましては2004年度と2006年度に2つの報告書を刊行して提言を行いました。現在3期目が進行中で、 Semester制の実施状況、副専攻の実現可能性などを扱って精力的な研究を継続しております。第2の成果は学部共通カリキュラム検討委員会というものが、大学の評議会で検討され始めまして、やっと改善の兆しが見えてまいりました。

### 身体知プロジェクト

続いて身体知プロジェクトに触れたいと思います。身体知というのは聞きなれない言葉ですが、英語に翻訳しますと Understanding through Body となります。身体、身体性を通して理解・思考することを指し、論理的な思考力が感性や身体性と一体化して初めて真の知性になるという意味合いがこの身体知という言葉には込められております。これを研究することがひとつの目的です。2番目の目的としては、実験授業の展開です。この実験授業はどのようなものかという、たとえば呼吸、ダンス、瞑想といった表現を身体を通して行うことによって、心と身体を解きほぐすことを目指しています。この成果に



関しましては慶應内外のさまざまな研究者や実践者をつなげることができましたし、そうした方々とつながることができました。2番目の成果としては、研究会や実験授業に基づいて、ひとつの教育モデルを構築して出版できる目処がついてきた点です。

### アカデミック・スキルズ

次にアカデミック・スキルズに移ります。これは問題発見の方法や学問的スキルズの養成を目的としています。講義を聞き、自分のテーマを見つけ、情報収集をして、その成果をプレゼンテーションしたり、論文にまとめるときに必要となるさまざまなスキル、技法を学ぶわけです。授業は春学期と秋学期、半期プラス半期で展開されております。これも大きな特色ですが、ひとつのクラスを専門分野の異なる複数の教員が担当します。それから年度末に論文コンペ、公開プレゼンコンペを実施しまして、履修者の学習意欲を高めるような工夫をしています。成果としましては、みなさまのお手元にある資料の4-1をご覧くださいと思います。現在慶應義塾大学の7学部が卒業単位として認定するようになりました。資料の4-2もご覧くださいと思います。たくさん書いてあるのでなかなかわかりにくいかもしれませんが、あとでお読みいただきたいと思いますが、このアンケート結果を見ると履修者から概ね高い評価を受けているということがわかります。また、3番目の成果としましては『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』を慶應義塾大学出版会から刊行することができました。

### 「生命の教養学」

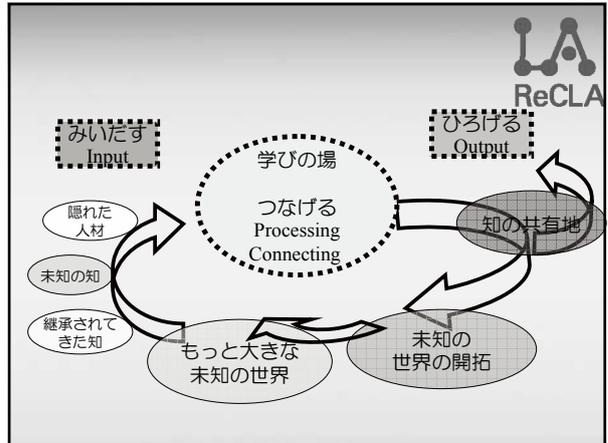
続きまして「生命の教養学」に移ります。これは21世紀にふさわしい生命を巡る最先端の知、最先端の研究を学生に伝えることを目的としております。最先端の研究者や多才な実践者が集うオムニバス形式の講座です。それからコーディネーター制を採用していて、毎年複数の教員がコーディネーターに選ばれて彼らが協議しながらテーマや講師を選び運営しております。その成果としましては、毎回授業後に行われるアンケートから講座や授業が好評を博していることがうかがい知れます。



教養研究センターの活動を振り返って

つなげる

萩原真一



### なぜ、つなげるのか？



☆教員組織の閉鎖性・複雑さ  
各学部・各研究所に所属  
部門・部会/教室(横割り組織)が絡む

☆縦割りの職員組織

☆人と人、組織と組織、理系と文系、大学と社会をつなげる  
ことの重要性

### どの事業がつなげているか？



☆基盤研究  
大学カリキュラム研究  
身体知プロジェクト

☆極東証券寄附講座  
「アカデミック・スキルズ」「生命の教養学」

☆教員サポート

### 基盤研究「大学カリキュラム研究」



☆目的:カリキュラム全体像の把握と提案

☆成果:

\* 2004年度と2006年度に2つの報告書を刊行し提言を  
行う。現在3期目が進行中

\* 「学部共通カリキュラム検討委員会」発足の方向  
→ 組織と組織のつながり

### 基盤研究報告書



これは昨年春学期に講師を担当してくださった日野原先生が朝日新聞のコラムにお書きになったものですが、そのコラムのなかで日野原先生は当日の学生との交流を印象深い出来事として言及されておられます。それからもうひとつの成果としましては、慶應義塾大学出版会から4冊の本を刊行することができました。

### 教員サポートプロジェクト

第3番目の教員サポートプロジェクトに移ります。これはよりよい教育とより適切な学生とのコミュニケーションを実現したり、教員に対する教育研究支援を目的としたプロジェクトです。近年カリキュラム改革がどこの大学でも進展し、従来とは異なる授業を担当する機会が増えて、必ずしも担当教員が自分の精通している研究分野や研究方法だけで指導することができない状況が生まれてきております。また、レポートが書けないとか時間を守れないとか、他者とうまくコミュニケーションがとれないといった、いわゆる“発達障害”を思わせる学生と接する機会がかなり増えてきています。こうした新しい事態、状況におかれた教員をサポートすることを目的としてこの教員サポートプロジェクトが展開されました。概要としては本年度に5つのワークショップをメディアセンター、SFCの教員の方、ITC、そして学生総合センターと共催の形で開くことができました。その成果としましては、これも毎回アンケートをとっているのですが、参加者からの好意的な反響と要望が寄せられております。2番目の成果としましては、これが一番重要なのですが、教養研究センターが中心となりまして日吉のほかの組織と共催する形をとることができたということです。単なる共催ではなくて、中身を伴う実質的な共催を実現することによって組織と組織のつながりを促進できた点です。これが一番大きな成果と言えるのではないかと思います。3番目の成果としましては、ただ単にワークショップを開催して終わらせるのではなくて、その活動をレポート2冊とアーカイブ2冊にまとめて活動を記録しました。

### おわりに

以上、「つなげる」という観点から3つの主なプロジェ

クトに焦点を当てて教養研究センターの活動を振り返ってみました。最後に4つほど課題を提示して発表を終わりたいと思います。第1はカリキュラムの漸進的な改革の実現を引き続き目指すべきだということです。大学の評議会で学部共通カリキュラム検討委員会が発足する方向性が見えてきたと申し上げましたけれども、これはあくまでも改革の序の口でありまして、今後さらにこの教養研究センターが旗振り役となって改革を推進していく必要があるのではないかと考えております。2番目は身体知に関わる点です。身体知はこれまで、どちらかというと人文科学系からのアプローチが主だったのですが、今後はそれだけではなくて自然科学的あるいは社会科学的方法のアプローチで身体に迫っていく必要があると考えております。3番目はアカデミック・スキルズと生命の教養学に関わりますが、もう少し厳密で、客観的な教育効果の測定を実施して、その結果を実際の授業にフィードバックすることによって授業を改善していく必要があると考えています。4番目は、今回は教養研究センターが学生総合センターやメディアセンターと共催して組織と組織の壁の撤廃に努力をしたわけですが、今度は教養研究センターが仲介役を果たし、異なる組織同士が連携していくことが大事ではないかと思っています。

以上、「つなげる」という観点から教養研究センターの活動を振り返ってみました。

横山 続きまして「ひろげる」につきまして中島陽子副所長から報告をお願いいたします。

## 「ひろげる」

中島陽子 文学部の中島でございます。「ひろげる」というテーマでお話をしたいと思います。先ほどから何回もでてきたこのスキーム(23ページ参照)を見ると、生物学を専門とする私はすぐに人の脳の働きとのアナロジーに思い至ります。私たちは今、目で見て、耳で聞いて情報が脳の視覚野、聴覚野というところへインプットされます。脳では入ってきた視覚、聴覚が独立に入力されてはきますが、そこでプロセシングがされて総合して、聞いている、見ているがひとつのイメージになるわ

## 基盤研究「身体知プロジェクト」



### ☆目的

- \* 身体知を理論的・学際的に考究する
- \* 実験授業の展開

### ☆成果

- \* 外部の研究者・実践者とつながる
- \* 理論に基づく教育モデルを作り出版する予定

## 「アカデミック・スキルズ」



### ☆目的

- \* 問題発見の方法や学問的スキルの養成

### ☆概要

- \* 半期＋半期の授業
- \* 異分野の複数教員が1クラスを担当
- \* 年度末に論文コンペと公開プレゼン・コンペを実施  
厳正な審査・表彰 ⇒ 動機付け

## 「アカデミック・スキルズ」



### ☆成果

- \* クラス開講 7学部が卒業単位に認定(資料4-1参照)
- \* アンケート結果(資料4-2参照)
- \* 『アカデミック・スキルズ  
—大学生のための知的技法入門』(慶應義塾大学  
出版会、2006年)



## 「生命の教養学」



### ☆目的

- \* 生命を巡る多彩な知の諸相を伝える

### ☆概要

- \* 春学期開講のオムニバス講座(資料3参照)
- \* 文理の対話
- \* 最先端の研究者と多彩な実践者
- \* コーディネーター制

## 「生命の教養学」



### ☆成果

- \* 授業後アンケートに見られる学生の反応  
講師と学生との交流  
[例] 朝日新聞日曜版コラム(2007年5月26日)
- \* 慶應義塾大学出版会より4冊の本を刊行



## 『生命の教養学』



## 教員サポート



### ☆目的

\* よりよい教育とより適切な学生とのコミュニケーションの実現

\* 研究支援

## 教員サポート



### ☆概要

- \* 5つのワークショップを開催
  - メディアセンター  
「少人数セミナー授業での実践的ワークショップ」  
「文献管理ソフトRefWorks利用法」
  - SFC(湘南藤沢キャンパス)の教員  
「社会調査法—最初の一步」
  - ITC (Information Technology Center)  
「Keio.jp利用法」
  - 学生総合センター  
「発達障害を抱える学生への関わり方」

## 教員サポート



### ☆成果

- \* アンケートに見られる参加者の反響や要望
- \* 組織と組織のつながりを促進した  
教養研究センターがメディアセンター、ITC、学生総合センターなどとワークショップを共催
- \* レポート2冊とアーカイブ2冊を刊行(予定)

## 教員サポート



3月末日刊行予定



アーカイブ

レポート

## おわりに



### ☆課題

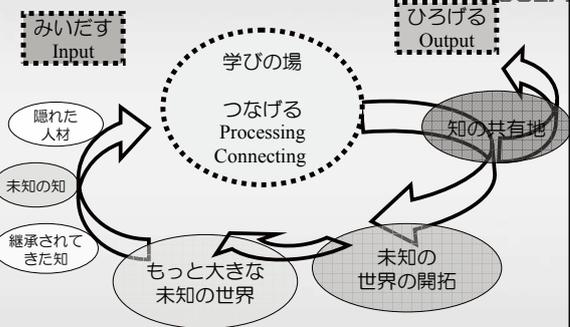
- \* カリキュラムの漸進的な改革の実現を引き続きめざす (基盤研究「カリキュラム研究」)
- \* 身体知への自然・社会科学的アプローチの必要性 (基盤研究「身体知プロジェクト」)
- \* 客観的な教育効果の測定を実施→フィードバック (「アカデミック・スキルズ」「生命の教養学」)
- \* 教養研究センターが仲介役を果たし、各組織間の連携をさらに促進する (教員サポート)

教養研究センターの活動を振り返って

ひろげる

中島陽子

教養研究の中で「みいだす・つなげる・ひろげる」はどう位置づけられるか



- 空間をひろげる
  - コンテンツを広く流布させる
  - システムをひろげる
- 時間を超えて広げる
  - 知の集積を伝える（未来に向けてひろげる）
  - 組織の継承
- 対象をひろげる
  - 研究センター所員へ
  - 学生へ
  - 慶應義塾の教職員へ
  - 一般社会人へ
  - 他大学研究所関係者へ
  - 子供たちへ
  - 世界へ

そして → 知の世界が新たに開拓されたか？

ひろげる

- ☆ 事業そのものが「ひろげる」という行為
- ☆ 事業活動の結果をひろげる・伝える

ひろげる(1)

☆事業そのものが「ひろげる」という行為

- 授業や一般に公開された講演会、講座
- セミナー、シンポジウム、ワークショップ
- HAPP (Hiyoshi Art & Performance Project) ・地域連携事業

(資料1)

☆成果

知を伝えるだけでなく、事業を実施することが新たな知を獲得する機会となる

【例】サイエンス・カフェ

世代を超えて  
キャンパスをこえて  
理科離れといわれる時代への働きかけ  
自然科学を専門家の世界から開放  
自分の研究をわかりやすく伝える工夫



けです。さらにそこでは過去のメモリーをリファレンスして、それらを総合して今のこの状況というのを判断するわけです。ですから、過去のメモリーが豊かであればそれだけ、作られるイメージは膨らんでくるわけです。この教養研究ということで考えてみれば、教養の質の豊かさ、奥深さというのはいかに積み重ねがあるかということになってくると思います。ここでできたイメージは私たちの脳では、最終の状況の判断に従ってアウトプットが行われます。ヒトの場合は実は、入力は今五感といたったようなたくさんの種類の情報が入力されますが、出力に関しては意外とシンプルで、究極は筋肉を縮めるか何かを分泌するかだけなのです。私が今このように話をしているのは、口の辺りの筋肉を収縮させているわけです。それからプレゼンテーションというこの現場で緊張して、たぶん私の副腎からはアドレナリンがたくさん分泌されているでしょう。そのようなシンプルなヒトの場合のアウトプットと違い、教養の場合には、いろいろな異なったレベルのアウトプット、異なった性格のアウトプットが考えられると思います。「ひろげる」という言葉からすぐに思いつくのが空間的に広げるということです。研究の成果、コンテンツを広く流布させるということがまず思いつきますが、教養研究センターという組織で考えたときには、そこで開発をしてきたシステムそ



のものを知ってもらおうということもあります。それから時間を越えて広げるということがあります。それは知の集積を次の世代に伝えるということで、これも教養研究センターという組織をどのように継承していくかという要素もあると思います。それから伝える、広げる対象も所員同士の研究会のようなものから、先ほどの例のように、大学内の組織あるいは他大学へ伝えていく、それから授業の場では学生へ伝えていく、公開授業では一般社会人、さらに時間を越えてということを考えて若い世代へ伝えていく、そして最終的には世界に伝えていって、新しい未知の世界を開拓していく、という知のサイクルを回していくということになるかと思えます。

そういう視点で「ひろげる」というのを見たときに、教養研究センターで行う事業そのものが実は「ひろげる」ということなのだということになると思います。それからもうひとつは非常に具体的に、さまざまな活動そのものを記録として残すことによって次の世代、あるいはより広い対象に伝えていくという、少しレベルの違う「ひろげる」というものを考えることができると思います。

### ひろげる (1)

最初に、事業そのものが「ひろげる」という行為、と申しましたが、これは講義や一般公開の講演会、講座というものもありますし、資料1にこの5年間の活動をまとめて一覧表にしたものがありますが、こういったさまざまな活動をしているということです。それらのうちH A P P (Hiyoshi Art & Performance Program) は、資料1の3ページ目にまとめてありますが、コンサートや能、学生の企画、キャンパスを塾長と歩くというようなバラエティに富んだことを公開でやっております、たとえば3ページ目のフランス音楽祭ではイベントテラスがいっぱいになるほど一般の方が参加してくださいました。こういった事業を行うということは、もちろん「ひろげる」ということで、人に伝えるということでもあるのですが、実はそれをやった本人が新しい知を獲得する機会となっているのです。だから人のために事業をするのではなく、自分のためにもなっているということなのです。

例としてサイエンス・カフェを挙げさせていただきたいと思います。これは極東証券の「生命の教養学」の

☆事業の広報 

- ホームページ
- ピラ(学生、教員へ個別配布)
- ポスター掲示  
日吉キャンパス、他キャンパス、日吉近隣地区
- E-mail
- 講義要綱・ガイダンス
- 塾生新聞、慶應義塾大学出版会
- 広報課
- 回覧板 (日吉近隣地区)  
事業の内容を勘案して広報先や方法を工夫している

☆広報の効果の検証

- 参加者数や当日のアンケートなど

ひろげる(2) 

☆活動の結果をひろげる・伝える

- ホームページ (日本語・英語)
- 書籍
- 報告書、報告会、アーカイブス、レポート、ニュースレターその他印刷物 (資料1、2参照)
- HRP (Hiyoshi Research Portfolio)
- 学会発表、学術誌投稿、講演、講義



☆課題 

- さまざまなレベルでの発信作業は、新たな知の世界の発見に有効につながりえているか  
⇒かかわった個人のレベルでは、それぞれに充実し得ているが、組織のレベルではどうか
- 理念を具現する組織は確実に継承できているか (継承できる機構になっているか)
- 印刷物は読まれているか

☆提案 

「大学を地域や社会が支える」という文化をそだてる、その実現を目指した地域への「ひろげる」の努力

 ReCLA

まとめ  
一教養研究センターのこれから—  
10年目に向けて

横山千晶

別枠として、今年から始めたもので、資料1に具体的に何をやったかをリストにまとめてあります。企画の趣旨としては先ほどからタコツボという表現が出てまいりましたが、研究者は自分がやっていることをおもしろいと思ってやっているわけですが、そのおもしろさを全然関係ない人に伝える機会を与えようというものです。集まってくれたのは幼稚園の子どもから70代後半の方まで非常に幅広い範囲の方々でした。それから話題提供者も当初は日吉の生物の方が中心だったのですが、キャンパスを越えて、矢上の理工学部の方も話してくださいました。実際にやってみると、みんなとても一生懸命聞いて質問も積極的にしてくれるということで、サイエンスのおもしろさを伝えることができたのではないかと思います。少なくとも集まって下さった方々には理科離れという心配はなさそうです。やっていて一番よかったと思うのはタコツボ研究者たちもが、自分のおもしろいと思っていることを何とか他人にもわかってもらおうと工夫して伝えるという、その努力によって新たな知を獲得しているということではないかと考えています。

少しレベルが違う話になるのですが、こういった事業をやるというときには、やるということを知らせなくてはなりません。これも非常に現実的な意味での「ひろげる」です。広報に関しましてはホームページやビラ、ポスターを作ったり、リピーターの方にはEメールでお知らせしたりしました。また、講義の場合には講義要綱を4月のガイダンスのときに学生さんに説明します。行事の内容によっては塾生新聞や大学出版会、大学の広報課にお伝えします。ローカルな地元の方に来ていただいたイベントの時には、回覧板というとても庶民的な方法も活用しています。事業の内容それぞれに応じた広報を行っております。教養研究センターは教員だけではなく職員の方も関わっておりますが、広報に関しては職員の方がどこにどのように広報をするかということ非常によく考えて、適切にアクティブにやっております。そういった広報にどのような効果があったのかという評価は、具体的にその行事にどれぐらいの人が集まったかということと関係しますので、多くの場合、当日にアンケートをお配りして、どのようなメディアを通してここへ集まっていたかなどを調査しております。

## ひろげる (2)

これもまたレベルの違う意味での「ひろげる」になりますが、研究の結果を広げる、伝えるということに関しましては、ホームページが用意されていて、日本語と英語でアクセスできます。さらに先ほど紹介いたしました、書籍等の出版、刊行物などは資料2にリストアップされています。これほどたくさんのもので出されたのかと、私自身もびっくりしました。それからHRP (Hiyoshi Research Portfolio) という日吉全体の研究活動を報告する企画があるのですが、それに参加してセンターとしての活動も報告しております。個人のレベルで成果を学会に発表したり、学術誌に論文を投稿したり、もちろん講義に反映させたり、それから講演依頼で広げるということを行っております。このように「ひろげる」ための印刷物は多岐にわたりますが、メインは資料2の2段目にあるような活動報告書というのを毎年1冊ずつ出して、そこにすべてがまとまるようなシステムになっています。

## 課題と提案

以上のような「ひろげる」ですが、こういったいろいろなレベル、メディアということが、先ほどの模式図で言った新しい知の発見に有効に関わっているかどうかということを検証しなければいけません。数値といったものではありませんが、少なくとも関わった個人のレベルでは非常に充実して、一生懸命にやっております。ただ、最初にメモリーが多くなればアウトプットは豊かになると申しましたが、個人で得た充実感というのが組織として有効に蓄積されているかということ、今後の5年間に期待する余地があるかと思えます。また、組織として、教養研究センターとして、蓄積した新たなさまざまな知を確実に継承できるような組織体系になっているかという視点からも反省をしていく必要があるかと思えます。これに関しましては、このあと組織の改変ということについて横山所長から話があるかと思えます。さらにレベルの違う話になりますが、このようにたくさんの印刷物を出しているわけですが、そういったものが有効に読まれているかという評価もしなければなりません。これは教養研究センターだけの問題ではなく、大学にいると毎

日印刷物が山のように届けられます。レポートですとか、SFCの印刷物や、150年記念のといったように、どんどん積みあがっていく膨大な印刷物の洪水というものをどういうふうに考えていくのか、大学全体の問題かと思っています。ともかく、教養研究センターでは行ったものは何かの形で必ず形に残すという原則の結果としてこれだけの印刷物となったかと思っています。

そういったことで「ひろげる」ということを考えてみますと、たとえばHAPPで、コンサートをするとか皆さんの地元の人、けっこう遠いところからも参加してくれます。そのように今のところ「ひろげる」といっても、大学から発信するという方向だけになっています。これからは大学が地域のなかで共に生きて、地域や社会が大学を支えていくというもう一つの方向も必要なのではないでしょうか。このようなカルチャーを日本のなかに育てていかなくはないかと思っています。今「開かれた大学」という言い方がされますが、大学が開くだけではなくて社会のなかで大学を支えていくというカルチャーが必要なのではないでしょうか。それを実現して、それを目指して地域の広がり、知を「ひろげる」という視点を育てていくといいのではないかというふうに考える次第です。以上です。

## まとめ—教養研究センターのこれから— 10年目に向けて

横山 それでは私のほうから、まとめと教養研究センターの未来像をお話しさせていただきます。次の5年、つまり10年目に向けてのロードマップはどのようなものでしょうか。

この5年間の活動を見てきますとやはり3つのキーワードがそのまま課題となるわけです。つまりどうみだしていか、どうつながるか、つなげるか、どうひろげるかというのは、活動のキーワードであると同時に開所からの問題点であり続けました。

ではその活動を見直すと同時に、問題点にどう取り組んでいくかということが次の5年の第一目標です。まず組織を見直す必要があるだろうと思います。どのような

事業を立ち上げていくか、慶應発の教養をどう作り上げていくのかという根本からの見直しの必要もでてくると思います。この3点に関してお話をさせていただきたいと思います。

### 1. 組織を見直す

開所当時の組織はスライド2(28ページ参照)で見るとような形で始まりましたが、時代はめまぐるしく変わってきています。この教養研究センターは時代の要請する、時代の必要とする知と教養を考える場所ですが、一体この組織は機能しているのかどうか。時代に対応するためには、やはり新しい組織作りが必要となってくるでしょう。つまり時代がめまぐるしく変わるのならその時代に即したフレキシブルな対応をとることが大切ですし、人材は随時掘り起こしていく必要があります。そしてやはり広く学生、教職員からの企画を吸い上げていく体制をつくる必要もあるでしょうし、当然その成果は、随時発信して批評してもらい、なるべくはやくそれをフィードバックへともっていけるような状態を整える必要があるでしょう。そこで私たちが考えたのは、短・中・長期にわたる未来を見据えた活動を随時展開していけるような事業プログラムを立ち上げていくシステムです。そこで、今までの2年1任期のセクション制度から、毎年あるいはその場その場で声が挙がってきたときに随時、事業、ここではプロジェクトと呼ばせていただきますが、プロジェクトを立ち上げて展開できるような組織にすることが2007年度の試みでした。もちろん、センターの活動の基軸は「研究」「実践」そして外との「交流」ですので、この基本に沿ったプロジェクトを採用していくことになります。今までの3つのセクションの機能を各プロジェクトが果たすことになるのです。つまり3つのセクションを横断する形でのプロジェクト展開になっていくわけです。

### 2. 新たな事業を考える

では実際どのようなプロジェクトが展開されていくのでしょうか。ひとつは先ほどの教員サポートワークショップがその例ですが、さまざまな組織がここで関わってくれたことをバネにして、各組織や人材が共同

## ふたたび課題へ



どうみいだすか  
どうつながるか・どうつなげるか  
どうひろげるか

## 課題とどう向き合うか



1. 組織の見直し
2. 新たな事業案
3. 慶應発の新たな教養の構築

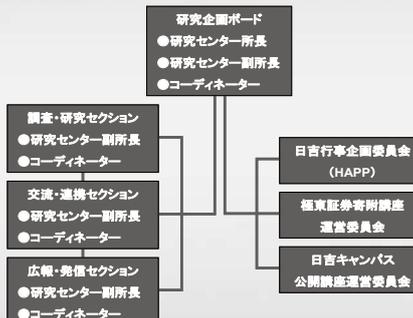
## 1. 組織を見直す



## 開所当時の組織



コーディネート・オフィス



## 新しい組織作りの必要性



- 時代に即したフレキシブルな対応を取る
- 慶應義塾大学にかかわる人材を随時ほりおこす
- 学生・教職員からの企画を吸い上げていく体制を整える
- 成果を発進して批評を受ける体制を整える  
→企画・研究・実践・批評までの責任を持つ

→短・中・長期にわたる未来を見据えた  
活動を展開する

## 教養研究センターの組織改革



「セクション」から各「事業(プロジェクト)」へ

1. 「研究」
2. 「実践」
3. 「交流・連携」



## 2. 新たな事業を考える



### 事業案 その1 内部をみいだす・つなげる・ひろげる

#### さまざまな組織をつなげた「学びの場」プロジェクト

- ・教員、学生、メディアセンター、学生総合センター・ITC・他キャンパス、および基盤研究・特定研究の研究者が協力して学びの場と生活の場としての大学環境を考える

- ・教員サポートプロジェクトと連携する



### 「FD」のさらなる意味

- ・研究者として充実した研究を行えること
- ・研究したことを次世代へ伝える効果的な方法を模索し、紹介すること
- ・さまざまな方法を実践してみるワークショップや実験授業を立ち上げてみること
- ・さまざまな学内の機関と協力すること  
→図書館、IT関係部署、学生相談室
- ・成果を発表し、意見交換できる機会を作ること  
→学会発表の奨励



### 事業案 その2 学びのコンテンツ

#### 新しいカリキュラムの実験とモデル提示

- ・時間をどうとらえるのか
- ・場所をどうとらえるのか
- ・学びあう仲間をどうとらえるのか  
→「学ぶこと」自体をどうとらえるのか

#### [実施予定事業]

未来先導基金採択事業 声プロジェクト「新しい文学教育」と身体知  
実験授業「現代の危機」—宗教と民族問題  
鶴岡タウンキャンパス[鶴岡セミナー]



## 3. 新たな教養を考える —慶應発の教養とは—



### 時代が必要とする「教養」とは？ 「知」の「つながり」と「ひろがり」

#### 人として「ヒト」として共によりよく生きるための知の連関



して広く学びの場を考えていくようなプロジェクトを立ち上げたいと思います。つまり、教員、学生、メディアセンター、学生総合センター、あと ITC (Information Technology Center) や他のキャンパス、それだけではなく一般研究を含めた基盤研究・特定研究の研究者が協力して、広く学びの場と生活の場としての大学環境を考えるというプロジェクトです。これはこれからも続けていく教員サポートプロジェクトと連携していくことになります。

そして再度 FD の意味を考えることも必要となってくるでしょう。ここでは次の点を強調したいと思います。まずは、関わる教員は研究者でもありますので、教育コンテンツを考える意味でも充実した研究を行えるということ。そしてその成果を次世代に伝える方法を考えるということ。そして当然そのためにはさまざまな実践を、実験授業やワークショップを通じて行ってみるということ。そしてその行う過程では、学内のさまざまな機関やときには外部の協力者を得ながら、サポートするということ。そしてその成果を単に自分の専門分野の学会だけでなく、たとえば3日後に立ち上がります初年次教育学会などの場で発表し、意見交換できるような機会を積極的に奨励すること。それらを教養研究センターが支援することが FD につながると考えています。

次に考えるべきなのがコンテンツです。ここでは学ぶこと自体をどう捉えるのかという新しいカリキュラムを提示し、実験し、それをモデルとして正規授業のなかに組み入れる努力をしていきたいと思っています。たとえば大学は通常4年間、1コマ90分から100分、1年は春と秋にわかれてそれ以外は休みということの基本ですが、この体制をどう捉え直すか。あるいはキャンパス、教室といったものは教育の場として固定したものでいいのかどうか。学びを共有するのは18歳から22歳の同じような歳の仲間がいいのかどうか。こういったことをもう一回考え直し、そこに風穴を開けることが必要となってくるでしょう。そのために2007年度にすでに行っている事業に加えて、以下のような実験授業を考えていきたいと思っています。ひとつは2007年度に始まったものですが、創立150周年記念事業未来先導基金を受けた「声プロジェクト」があります。2007年度は言語知

や座学中心の文学をダンサーや講師や朗読家とコラボレーションしながら、身体を通してもう一度解釈し直し、そして解釈したことを再び文字に直すという授業を D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』を題材に行いました。この授業は参加者から大変な反響を受けました。2008年度も同基金を受けることができましたので、音楽や体育教育を取り入れた形での文学教育の実験授業を開催します。次に今の社会が抱えている大きな問題が民族問題です。当事者を外から招いてきて、じっくり話を聞きディスカッションをする。これは高等教育の場でこそ真剣に取り組むべきテーマでしょう。また、慶應義塾大学にはさまざまなキャンパスがあります。そのひとつが山形県の鶴岡市にあります、生命科学を中心とした研究所ですが、同時に鶴岡のある庄内という場は宗教的にも民俗学的にも大変豊かな文化を持つところです。ここ日吉、三田、信濃町、SFC、矢上台という場から学生を引き離して、庄内へ連れて行き、地元の人々と交流をはかりながらまったく新しい教育の現場が創出できないか。これが2008年度9月に開催される鶴岡セミナーです。

### 3. 新たな教養を考えるー慶應発の教養とはー

さてこういったさまざまな試みを経て、私たちは再度、慶應発の教養を考える必要があるでしょう。もう1度初めに戻ると、人としてヒトとして共によりよく生きるための知の連環、ここから新たな教養を考える場合、次のことを考えざるを得ません。この時代に、よりよく生きるとはどういうことか。最近エコロジーとかエシカル・リビングという言葉に象徴されておりますが、私たちは地球市民として、こころとからだを持った生き物としてこの社会に生きています。その視点から昨今やたらといわれているエコロジーやエシカル・リビングという言葉をもっとクリティカルに見直す必要があります。そして自分自身もこころとからだを持った一個の存在として生きて、他人とつながっていくことを確認することが必要となるでしょう。

また、時代が要求するということでは情報化社会とグローバリゼーションというテーマも避けては通れません。この情報の渦のただ中で、メディアに左右されない自己を確立するためには新しいアカデミック・スキル

新たな教養を考える  
「他者とつながる・社会とつながる」



よりよく生き、社会とつながる「教養」を考える  
新たな「教養」をめざして

- よりよく生きるとは？  
    こころとからだ、ethical living  
    → 「地球市民」としてのアイデンティティの確立
- 情報化社会とグローバリゼーション  
    → メディアに左右されない自己の確立  
    → さまざまな既存の意見に自分の意見をつ  
    きつけ、対比することができるか



皆様方のご意見・ご参加をお待ちして  
います

慶應義塾大学教養研究センター  
lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp  
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

ズが必要になってくるかもしれません。さまざまな意見と自分の意見をおつくる過程で、自分の意見を確認していくことが実際にできるかどうかということは、今のこの時代だからこそもっとも必要なことになってくるのではないのでしょうか。こういった理念から新しい教養を考えていくことがこれからの教養研究センターのミッションだと思っています。ただしそのためにはさまざまな方のご意見や参加が必要です。これから先は広く外とつながっていくということが大切になってきますので、ぜひとも皆様方のご意見やご参加をお待ち申し上げます。

以上で報告を終わらせていただきます。その後ディスカッションと質疑応答に入りたいと思います。

## 第2部 質疑応答&ディスカッション

横山 ただいまから質疑応答およびディスカッションに移りたいと思います。いろいろと質問していただくと同時に、今回はフロアに各プロジェクトのコーディネーターの先生方もいらっしゃるのでそちらの方からもご意見をいただければと思います。あとは実際にセンターの活動に参加してくれた学生さんたちが来ておりますので、随時先生方のほうからあるいは外部評価委員のみなさま方から学生さんにもご質問していただければと思います。それではよろしく願いいたします。

とはいえ、いきなりご質問、ご意見が出てくるかわかりませんので、まず私どものほうから声をかけさせていただきます。先ほどもいいましたが、私は二代目の所長です。実はこの教養研究センターが立ち上がる以前は、何年間にもわたって高等教育における教養のあり方を考え、慶應を横断的につなげていく場をどうやって設けるかということに関して議論がなされてきました。

その積み上げの成果として教養研究センターができました。初めのころの大変な時期を乗り越えてきた初代所長の羽田功先生がいらっしゃっておりますので、まずは羽田先生からご意見をいただければと思います。

羽田功 ご紹介にあずかりました慶應義塾大学の羽田と申します。ある面ではこの研究センターのなかにべったりとくっついてきた人間が、こういう場で最初に発言するのがいいのかわかりませんが、今日の報告を聞いておまして、感慨深いというのが正直な気持ちです。外部評価をお願いしている先生方には参考になるかなと思いますので、若干のお時間をいただいて、少し補足的なお話をしたいと思います。

このセンターができて5年8カ月経ったわけですが、それ以前まで遡ると、報告にもありましたが、センター設立の一番のきっかけになったのは大学設置基準の大綱化の問題であったと思います。学部の分属等、慶應の縦割り社会の根深さというのが何度も指摘されましたが、

これは今年創立150年を迎えるということからも想像できるように、150年間営々と築き上げられ、慶應を支えてきた組織ですので、非常に根強く慶應全体にしみこんでいるもので、そのことは私自身も何度も実感してきました。おそらく、ある部分ではいい面もいまだに持っているのだと思います。しかし、このセンターの拠点になっている日吉キャンパスという学びの場を考えた場合、いくつかの矛盾した問題が長年縦割りのなかで放置されてきたといわざるを得ないと思います。慶應義塾の教養教育の大半は日吉キャンパスで展開されてきました。ということは、入ってきた学生から見れば日吉のカリキュラム、日吉で学ぶ機会というのは学部を越えたところから始まっています。それがたとえば文系でいえば、2年したら三田キャンパスに移ることで専門の学びに入っていくわけです。そういった点では、日吉では学部の色彩はある意味で薄い部分があったと思います。ところが、実際そのカリキュラムとシステムを支えているのは、基本的には学部であり、その周りにいくつかの研究所等があるという状況です。ですから、カリキュラム全体の責



任をどこが負っていくのかということに関しては、日吉キャンパスの場合は、その所在を明確にしにくい体制にあったのではないかと気がしています。

おそらく大学設置基準の大綱化のとき、専門と教養の壁を取り払うことの波及効果は、慶應の場合であれば、学部の壁を低くすることにつながり得たのだと思います。ところが、学部の壁に関しては思うように進みませんでした。とりあえずは学部のなかでの縦割りをどう考えるかということに各学部が邁進していった結果、大綱化以降のカリキュラムはかえってより混沌とした状態になってしまいました。コマ数もあつという間に増えてしまいましたし、学部間の教室の奪い合いといった事態をも招いてしまいました。そういった意味では、混沌の度合いは深まったといえます。それを少しでもいい方向に是正するには、これは前々から議論があったところですが、横串をさせるような組織を作る以外にありません。部分的にせよ、この教養研究センターにはそうした役割が期待されていたと思います。最初に横山先生もおっしゃった通り、このセンターはボランティアでやっていますので、自由裁量的な部分というのが大きくあります。それをよく生かせば自由で活発な議論ができる。そういった点でいえば、このセンターは基本的には実験的な側面を強く持っていることに存在意義を持つ組織です。つまり、このセンターは絶えずペダルをこいで、慶應のなかで絶えず一歩か二歩先を走り続けていく必要があると思っています。それだけに、ボランティアベースでやっていくというのはとても大変なことです。ただ、横山所長以下、所員の皆さんの努力の積み重ねもあって、いま、共通カリキュラムを考えていく、学部やキャンパスを横につなげた組織がようやく立ち上がってきているわけです。これはちょっと手前味噌になってしまいますが、教養研究センターの存在がなければ、おそらく、全塾的にそういったものが必要であるという認識には至らなかったに違いないと思っています。これは確信をもって言えることです。その点ではこのセンターは、組織の改変も含めて、そうした方向に焦点を絞って活動してきたと私は思っています。今後の課題としては、慶應特有の事情を克服しつつ、社会・世界にこれまで以上に大きな目を向けた活動を展開していくことだと思います。この5年

8カ月でそれがより鮮明になってきたのではないのでしょうか。ぜひ、そういった点を踏まえて今日の報告を改めて振り返っていただければと思っています。

**横山** ありがとうございます。補足のさまざまなインフォメーションをいただけたことでより深く、今回の報告をわかっていただけたのではないかと思います。では続きましてみなさま方からいろいろな質問およびアドヴァイスをいただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

**武藤浩史** ちょっと補足させてください。「生命の教養学」と「身体知」のプロジェクトの趣旨についてです。私はこの「生命の教養学」と「身体知」プロジェクトに関わっている法学部の武藤と申します。「生命の教養学」の趣旨というのは、21世紀は生命の時代であるということから始まっています。生命の時代というのはどうということかという、ひとつは生命科学の時代ということでもあります。もうひとつは人が生き難い時代でもあるということもあるわけです。そこで最先端の科学と生き難いという素朴な実感、特に若い人が考えているような素朴な実感を何とかつなげる授業をしたいということで、単に生命科学の授業ではなくて、「生命の教養学」という形で教養研究センターの趣旨とも合うような、領域横断的なことをやっております。それが「生命の教養学」の趣旨となります。

もうひとつ「身体知」のほうなのですが、先ほど Understand through Body とありましたが、問題意識の出発点というのは、座学、学生が受身で講義を受けるという状況だけでは不十分なものがあるのではないかと、ということです。そこで座学的授業に何か身体的なワークショップを加えるということをやっています。それは必ずしも講義をないがしろにするのではなくて、講義と身体的なワークショップをうまく連携させていくというのが大切だと私は理解しております。去年やった文学の実験授業では、きちんと本を読むということと、身体的なワークショップ、たとえば、作品の朗読を加え、またそれに創作というような他の作業もいろいろ組み合わせ、つまり従来の講義系のものとは体験系のをうまく組み合わせよう



とすること、それが「身体知」プロジェクトの目的です。そうご理解いただくと幸いです。

**横山** ありがとうございます。ただいま補足をしていただきました武藤先生は、極東証券寄附講座運営委員会の委員長を務めてくださっていると同時に、基盤研究「身体知プロジェクト」のコーディネーターのおひとりです。最後に私が事業案その2で学びのコンテンツとして挙げた声プロジェクトの中の「新しい文学教育」を開催して下さった担当者も武藤先生です。どうもありがとうございました。

**菊池重雄** 今日お伺いして、全体像はすごくよく見えました。最後に長く話させていただく時間があるので、全体的なことはそちらで話させていただくとして、部分的なこと、少し質問があります。佐藤先生がお話くださった「みいだす」というところです。最初のところで教養のひとつの定義として、専門を超えた向こうにあるものというのは同感で、もともと私もそう考えておりましたので、最初の段階から佐藤先生のお話、親近感を感じました。そのあといくつか気になった点があって、5ページの新しいアプローチを見いだすというところで、このアプローチという言葉の概念が人によってかなりイメージが違うと思うのです。漠然とアプローチというと、たしかにそれでもいいのですが、それが取り組み方なの

か解釈なのかということによって、次の学術フロンティア「超表象デジタル研究」というものの受け止め方が変わるのではないかと思います。実は私はこの報告書をいただいております、「超表象デジタル研究」プロジェクトというのを読んでいたのですが、そのときにこの新しいアプローチという言葉というのがどういう意味か少しわからなかったのです。そこでこのアプローチというものについて、佐藤先生もしくは教養研究センターがご考へになっていることをお聞かせいただければと思います。

**佐藤** 正直をいうと、それほど厳密な言葉の概念があるわけではありません。少し甘い言葉の使い方というお叱りはあるかと思いますが、いろいろな意味合いを含むためにあえてこの言葉を選びました。教養が目指すものが何であれ、それに進んで行くにはさまざまな道があると思います。アプローチというのは、その課題解決や目標に向う際に選ぶことのできるさまざまな道、方向のことです。教養研究センターで目指していたのは、さまざまな目標に向う際に、今までの方法ではないやり方で取り組むということでした。またここでいうアイデアというのは実現されていないけれども、それがこれから何か新しいものを生み出すかもしれない何かを指します。アプローチというのは他の方法がすでに存在しているけれども、その限界を感じたら別の方法で攻めていく。たとえばひとつの山があったら、こちら側から今までは攻めてきたけれども、こちら側からも攻めたほうがいいのではないかと考えて試みることです。つまり、いろいろな実験授業やいろいろな公開講座を生み出してきましたが、それは今までにないやり方で教養を伝えていくという試みでした。今までも本来目指したものというのは教養、知識を身につけて、考えられる人間を作りたいという目的があったとして、それをどうするのかというのはすごく難しいことです。「クリティカルに考えなさい」といくら学生に言っても、いろいろな既成の考え方で阻害されていることがあるから難しいこともあります。また、違うやり方でやろうとしたときに、むしろ学生を変えるのではなく、私たちが変わらなくてはいけないのではないかと考える場面も多々ありました。

横山 菊池先生どうもありがとうございました。実はこの「アプローチ」という言葉は佐藤副所長がいったように「あいまいじゃないか」と言われても押しきって使ってしまったというところではあるのですが（笑）。おそらくこれがディスカッションのキーワードになるのではないかという意図もあったのですが、まさにそこを菊池先生がついてくださったわけです。今、佐藤副所長がいったように、我々が変わらなくてはいけないという思いはすごくあると思います。たとえば先ほど、身体知プロジェクトの武藤コーディネーターからもご指摘がありました。文学というものが座学中心で教えらるゝとすれば、それをまったく違う方法で読み解くことができるか、そしてそれを経てもう1回言語化できるかという試みでは、我々教員こそが変わらなくてはいけないという一例ですし、「生命の教養学」を巡っては、どうして複数コーディネーター制をとったのかということ、生命ということを考えたときに、その生命への「アプローチ」がみんな違うからなのです。本年度の「生命の教養学」に関してはお配りした資料には詳細が入っていませんが、今回は体育から生命を見ている方、哲学から見ている方、生物から見ている方とまったく違う3名のコーディネーターを立てています。各自生命の見方が違っていて、そのコーディネーターの間での話し合いが授業の核になってくるということがあります。本日は2007年度に引き続き2008年度の「生命の教養学」のコーディネーターをお願いしている吉田先生がフロアにいらっしゃいます。「生命の教養学」を2年間コーディネーターとして関わってくださったことから、この講座を立ち上げる、またクラスを運営していくうえで、その「アプローチ」という点から何かご意見をいただければと思います。

吉田泰将 体育研究所の吉田と申します。昨年、今年と「生命の教養学」の内容を検討していろいろな全国の方に講師として声をかけて、おいでいただく手配をさせていただきました。いろいろな観点から生命について考えるのですが、まずテーマ作りを3人で、また先ほどの武藤先生のご意見をいただきながらテーマを作り上げていく作業を行います。このときには、自分たちの考えている生命についてのキーワード等をどんどん出して

いって、そのなかから絞込みを行っていくということで進めております。2007年度の「生命の教養学」は「誕生と死—その間にいる君たちへ」ということでテーマを作りました。この場合、慶應では今、BLS(Basic Life Support)の教育という活動を進めております。この中心のお話は医学部の堀先生にお願いしましたが、そこでその内容を実際に体験してみようということで、私が7月にダミーとなる人形を30体用意いたしました。学生2人に1体のダミーを準備し、本当に救急救命をその場で体験してもらいました。そのなかで学生が感想文に書いていたことというのは、「心臓を圧迫していく、リズムに合わせてやっていくのは大変なことだ」ということでした。汗だくになってやっていくような状況です。クーラーが効いているような部屋でも汗をかくような状況でした。その実習にたどり着く過程というのがなかなか難しく苦勞をしました。また、日野原先生のお話もありました。今、本を作っていますが、その原稿を読ませていただくと、学生に対していろいろな方々がいろいろな角度から考えていることを伝えていくと、学生自身が違った角度から生命について見ることができているのかなと感じております。体験型というのはたぶん初めてだったと思うのですが、それを私が担当させていただきました。



横山 こういった新しいアプローチというのはまったく違った分野の人間が集まることでできることです。そういったなかから教員同士が学びあうということもあると思います。それをまた自分の授業に持ち帰るということに意義があるのです。

それ以外でまたご意見をいただけたらと思います。

近藤伸郎 近藤と申します。外部評価委員の先生方に質問してもよろしいでしょうか。

横山 学生さんからの質問ですね。先生方よろしいでしょうか。

近藤 この質問が、後に外部評価委員の先生方からアドヴァイスなどがあるので適切な質問かはわからないのですが、ぜひともお聞かせ願いたいことというのは、今慶應で行われているいろいろな新しい試みは外部に具体的に評価されて取り入れられるという可能性がどれくらいまであるのかということです。特に評価委員の方に、文部科学省の方もいらっしゃるので、国公立の学校でこういう試みというのがどの程度まで進められているのか、もしくはこの慶應の試みというのがモデルとなってどれくらいまで影響を与えるか、参考にされるという可能性があるのかということをお伺いしたいのですが。もちろんコメントで予定されていたのであれば重複してしまう形になってしまうので申し訳ありませんが。

横山 質問を受けていただけるでしょうか。

川島啓二 先ほど文部科学省の方、というふうにおっしゃられましたので、説明をしておく必要があると思いますが、ここで文部科学省国立教育政策研究所となっていますが、堅苦しい役所的な説明をすると、うちの研究所は、施設等機関、というカテゴリーで、法人化される前の国立大学と同じなのです。その意味で評議員会という意思決定機関もあるので、組織的には一応独立しているのです。組織を名乗るときに文部科学省とつけるようになっていますが、これは別につけなくてもいいので、そういう組織だということをご理解ください。ご質問の

趣旨は慶應のこの試みが外に影響を与えることがあるかどうかというお話ですが、私はあまりないのではないかと思います、実態としては。ないほうがかえって慶應らしくていいのではないかなとも思います。後でコメントとしても申し上げますが、こちらのように教養研究センターというのは、私の知る限りのいろいろな大学の教育改善——教育改善という言葉を使っていないところがまた好ましいです——そういったもののなかで非常に異色のものだと思います。それはなぜかということ、位置づけも構えもやり方もそういうことがすべて異なっていることだと思います。もちろんこういう慶應のようなやり方を取り入れてプラスにできるような大学も日本にいくつかあるとは思いますが、それはあまり多くはないと思います。大学自体がいろいろな特色に応じて、個性化・分化していくということなので、それほどこだわらなくていいと思います、量的にはという話ですが、質的には非常に素晴らしいものを持っていると思います。マイクをもったついでに、単純な質問があったのですが、こういう話になると必ず授業評価はどうなっていますかという話になります。慶應さんの場合は、授業評価のことがあまり話題になっていないので、授業評価の成果を取り入れていかに次に生かすかという、あまりにも定番な質問で恥ずかしかったのですが、授業評価はやっていらっしゃるのか、やっていらっしゃるとしたらどうふうにこういう改革のなかに取り入れていらっしゃるのかということをお聞きしたいと思います。

横山 まず、慶應全体での共通授業評価というのはありません。学部ごとに行っております。基盤研究の慶應義塾大学カリキュラム研究の幹事をなさっている伊藤行雄先生もいらっしゃるなのでそちらからも意見をお伺いしたいのですが、統一FD評価を考えるべきかどうかというのは今のところ教養研究センターのプロジェクトには入っておりません。これから先の大きな課題として、大学側がどのような見解を表明するかということとはわかりませんが、私たちが授業評価に関して意見交換の場を作るということはこれから先に出てくるかもしれません。しかし今のところはプロジェクトのなかには入っていません。そしてもうひとつは教養研究センターの授

業評価に関してですが、これは先ほど資料の4-2で紹介しました通り、今のところ、正規授業化しているものは極東証券寄附講座の「アカデミック・スキルズ」、「生命の教養学」の2つですが、「アカデミック・スキルズ」に関しては、プレ・フォローアップ調査をやってみました。正規授業として単位化される以前の実験授業のときから2006年度までの履修者に対して評価をお願いしてみました。そうすると資料でもわかるように、かなりの対象者がきっちり書いてくれて、なかには細かく図式化して書いてきた学生もいました。このようにやっただけというモデルの提案です。このように実に詳しく評価を書いてきてくれたということだけでも、アカデミック・スキルズの成果が出ているのではないかと思ったわけです。そこで次は今年度のプロジェクトになりますけれども、実際に数字データを出せるような形でのフォローアップ調査をもう少し大々的にやりたいと思っています。そして「生命の教養学」に関しての授業評価はひとつユニークな方法をとっていますので紹介します。これは中島副所長が武藤先生や吉田先生と同じようにコーディネーターを務めてくださっていましたので、そちらからお話をいただきたいと思いますが、この授業では各授業のあとに必ず簡単なレポートを書かせますびっしりと書く学生もいます。そしてそれを必ずコピーして講師の先生方にお渡しする形をとっています。それぞれの授業評価がその場で出るという形です。履修者は100名ほどいます。そのことに関しまして中島先生のほうから何かコメント

はございますでしょうか。

中島 私はコーディネーターとしては06年と07年に務めまして、講師としては05年にも担当としてやっております。毎回講師の先生に課題を出していただくか、特別の課題がない場合はその授業の感想ということをしてもらっています。それぞれの分野の方が精魂を込めて話をしてくださるので、その場ではみなかなり感激して一生懸命「よかった」ということをいってきます。だいたい学生は、そこで「だめだ」とか「わからなかった」とかいうことはなかなか学生はいいません。それは正直に感動するのだと思います。たとえば07年に波平恵美子先生の死体をどう扱うかというお話があったのですが、学生たちにとってそういう分野の話というのは、とても新鮮だったらしく、とても素直にその感動を書いてくれますが、それが本当にそのまま授業評価になるかということ、学生たちの素直さに甘えているところがあるのではないかと感じもしています。みんな「いい」といってしまうから、本当にクリティカルな評価になっていくということは、学生の評価を考えたときには常にあるものだと思います。特に普通の学生の評価ですと、その先に彼らがもらう評価があります。それからだいたい先生方は学期の終わりに自主的に学生たちのコメントをとるという形、SFCは制度としてやっているのですが、こちらでは大部分の先生方がそういう形で学生の評価をパーソナルに得ているけれど、それは学生たちにとってはいくら無記名で



書くといっても、その先に自分たちの評価があると思うと、本当にクリティカルな評価ができるか、もっといえば、教師のほうからいわせてもらおうと、学生たちは教師を評価するほど本気でそこに座ってくれていたかということがあります。慶應の学生はそこは非常にシャープだなと思ひまして、自分は評価できる立場にはないという学生もいます。そういうようなことを経験すると、学生の授業評価というものは、そうすんなりとそれをやればいい、といえるものではないと私は考えています。

**川島** もちろん私も授業評価をやればいい、というわけではなくて、単なる事実関係として知りたかったということでした。

**横山** 実は基盤研究の慶應義塾大学カリキュラム研究のなかでは、学生に対しての大々的なアンケートも行っています。そのことも踏まえて、研究会の座長の伊藤行雄先生もいらっしゃっておりますので、FD、授業評価、学生の反応ということを含めましてコメントをいただけますでしょうか。

**伊藤行雄** 評価に関する詳細は、佐藤先生に後でこの点に触れていただきます。今回は、学生が授業をどのように評価するかということよりもむしろ、先生方が彼らをどう評価するかということをかなり調べました。先生方が成績をどのようにつけるかということです。大学でどのような授業を展開して、それに対して学生がどのように反応するのかという点に絞って見たいと思ひました。アンケートを見ていただければおわかりになりますが、学事センターに協力していただき、大掛かりな調査を約5000名の学生を対象にお送りした結果、全キャンパスで1200名以上の学生からの回答を得ています。アンケートの回答結果はグラフ化され、すでに冊子体として発表されていますし、グラフ化できない個人の意見などはすべてファイル化してあります。

**佐藤** 報告書が発行されております。本当におもしろいアンケート結果ですのでぜひご覧になってください。おもしろかったのは、自由記述の部分です。本当に学生

の気持ちというのが非常によく表れています。なかには「何だこれ」といった無責任な意見もあるのですが、学生の思いというのが非常によく出ていました。それをそのまま印刷物にしてしまうと問題もありますので、データベース化して、教員には公開をしています。授業評価に関しては、ついに各学部、各研究科にFDの担当者を出して委員会を立ち上げるということで、今慶應義塾全体で動いているようです。FDイコール授業評価という短絡的な考えがかなり広がってしまっています。たしかにめちゃくちゃな先生もときたまいます。たとえば休講が極端に多いとか、かなりいい加減な授業をやっているとかいうことは、かつてはかなり普通でした。「自分で学べ」というような雰囲気のある大学というのはあって、その反動として教員もきちんと評価されるべきだということも自然なことだと思います。しかし一方で授業評価の問題点といったものもきちんと検証しないでとにかく政策として授業評価を推し進めていくという現在のやり方に対して多くの教員がやや疑問を持っています。慶應はある程度こうした動きから超然とやってきたところがありますが、評価の問題点をもう少し検証しなくてはいけないのではないかという気持ちを持っている教員が多いからだと思います。慶應の教員というのは、良心を持ってやらなくてはいけないことはきちんとやるという姿勢を持っている教員が非常に多いので、授業評価に抵抗的な慶應大学だからといって、教育改革に抵抗的だとは私はあまり思いません。むしろ教養研究センターがやっているような評価のアプローチのほうが、つまり教員の良心をもっと利用していくというほうがもっと効果が高いのではないかというのが我々の現在の到達地点です。

**川島** こんなに長くなるとは思っていなかったので非常に申し訳ないと(笑)。意図としては慶應の学生さんをどういう学生さんだということに判断しているのかというところの、授業評価というのはもちろん授業を評価するのですが、その評価のカラーによって実は学生さんがどんな学生さんかというのがよくわかるのです。だからそういうところ、学生調査そのものをしていないのですが、そういった慶應の学生さんはどうやって授業を判断しているのかということを知りたかったというこ

とで授業評価のことを聞いてみたかっただけでしたので。

横山 いえ、それはとても大事なことだと思います。先ほども出しましたが、「学びの場」プロジェクトというのは、今の慶應の学生がどのような学生たちなのかというアプローチです。これがFDに強くつながっていくと私たちも強く信じていますので、川島先生のご発言などもこれからそこに反映させていきたいと思っています。

川島 プレゼンコンペなどを拝見しているとやはりすごくカラーがあると思いますね。いい意味でも悪い意味でも（笑）。

横山 「アカデミック・スキルズ」をとっている学生というのは資料でも出しましたが、本当にごくわずかです。なので、彼らが慶應の代表とはいえないということがあります。それよりもむしろそこにあがってこない学生たちをどうやって見いだすかだと思います。彼らがどういうことに困っているのかということ、本当に隠れてしまっていて見えないのです。精神的な病を抱える学生は他大学同様、慶應のなかでもかなり増えているということは事実ですが、なかなか教員には実態が見えないわけです。そういったところから勉強しなくてはいけないという意識はすごく強く持っていて、それがFDにつながっていくだろうとは強く思っています。川島先生ありがとうございました。

では、ここからは外部評価委員の方々からコメントとアドバイスをいただきたいと思っています。それでは金子

先生の方からよろしくお願いいたします。

## 外部評価委員からのコメント、アドバイス

### 金子郁容

興味深く、発表を聞かせていただきました。日吉が置かれている現状の中で、とても活発なよい研究教育活動が行われているという印象を持ちました。

これはどの大学にもあることだと思いますけど、いわゆる教養の先生と専門の先生がいて、日吉で最初の1、2年教養教育をやり専門性の高いものは他のところでやるという体制にはいろいろな課題がある。それについて慶應の場合には、これまで、あまり本格的な変更には手をつけていません。SFCのように学部4年間ずっと同じ場所で行うのがベストかどうかは別にして、広い意味での教養教育については、1、2年生のときより上級生になったときの方が関心が深まるのではないかと思います。

私が日吉で授業を受けたのは、ずっと昔のことですが、大学に入ってすぐ、自分が何に興味があるかまったくわからない内に社会学とか文学とか教えられても、あまり、ぴんとこない。学生にやる気がないと先生もあまりはりきって授業できないというようなことも、昔は、ありました。しかし3年、4年になってくると、いろいろなことに関心が出てくる。語学もそうだと思います。英語は誰でもやるにしても、3年生、4年生になってアジアに関心が出てきて中国語は絶対にやりたいとか、芸術や踊りに関心をもってスペイン語をやりたい、イタリア語を





やりたいといったときに、日吉に帰ってくることはできない。SFCの場合には、3、4年になって、自分の専門以外の教養科目を履修するというケースも多いです。

センターのみなさんがたいへんポジティブな姿勢で研究をされているのがよく分かりました。その上で、少し、辛めコメントになりますが、今日発表があった全体像として、何をするのか、その目標がよく見えない。HAPPやFDなどの活動や「生命の教養学」といった個々の活動は大変いいと思います。地域の方々と交流を図るというのもいいと思います。大学の活動としてすごく意義はあると思います。しかしそれが「リベラル・アーツ」ということに、どのくらい直接関連があるのか。日吉には高校もあるし、大学院もいくつか新設される。保育所もできるし、地域とのつながりもつよくなるのでしょう。そのような状況の変化の中で、教養研究がどうなるか。たとえば「FDだったらあそこがノウハウをもっているので聞こう」ということを目指すのか。初任者研修も全学部で重要なことだけど、たぶん、どこも、きちんとした方法があるわけではない。そのようなことに、ひとつの専門性を発揮させるのか。それとも、やはり、リベラル・アーツに専門性を置くのか。そのあたりの見通しも伺いたかった。つまり、ビジネス的な言い方をすると、より戦略的に研究教育活動を編成していただくことよりよいのではないかということです。

私は理工学部を卒業してからアメリカにいったのですが、はずかしながら、アメリカで初めて三島由紀夫や太宰治の本を読んだのです。アメリカの大学の図書館には日本の本が揃っていました。授業外のいろいろな講座もあった。はじめて、日本ってけっこういいなとか思ったりしたわけです。これは、特殊な例かもしれませんが、いつでも、学生の専門以外の広い教養を与える場があることが、大学として大事ではないかと思います。

今日の発表で、みなさまの努力、思いというのは伝わってきました。その上で、これから、方向性をもうすこし決めて、戦略的に活動していただきたいということです。

横山 審査表を読むのが楽しみであり、怖くもあるという感じです。まさにリベラル・アーツというのは何かというのは永遠の課題ですから、先生のお言葉をいただいてまた私たちが話し合わなくてはいけません。何をやっているところかというのをもっと打ち出していきたいと思います。続きまして川島先生よろしくお願ひいたします。

#### 川島啓二

私は先ほど時間を延ばしてしまう失敗をしたので短くしたほうがいいかと（笑）。金子先生がおっしゃったのは少し違う考えを私は持っていて、同じ外部評価委員に対してのつけから反論のようになってしまうのですが、初任者研修というようなお話がありましたけれども、ぼくはこちらのセンターはそういうことをしないほうがいいのではないかなと思います。というのは、それは一種のサービスで、こちらが取り組まれておられるのは私が見る限り、正面から教育とは何かということやっておられると。ただ手法が全然違う。そこのおところにおもしろさとユニークさがあると思うので、下手なサービス精神は持たないほうがいいと思います。やっていておもしろくもないし、ノウハウを持っておられるともそれほど思えない（笑）。そんなうまくいかない確率が高いことはしないほうがいいと思います。

先ほど申し上げましたように、こちらのセンターは異色だと思います。普通であれば国立大学の何とかセンターというのであれば、ミッションがあって、組織デザインがあって、それに対してどのような方法でやって、それ

に評価を受けてそれをさらにどういうふうにかしていくかという、PDCA サイクルという言葉があって、雛形にいかに乗っかっているか、どれだけ効果をあげているかということを論証して自分たちの活動がいかに関に大学に貢献しているかということを見せていくというやり方をします。ところがこちらは、先ほど授業評価はどうやってやっていますかと聞いたのはそういうところであって、そういった何かある論理的な筋道のうえでこうやってこのような効果があがりました、という手法をとっておられず、いきなりコンテンツというところから入っていく。それはいくらか手直しをしていくところはあるだろうと思いますが、今、国の政策レベルでいうと、学士課程教育がいわれて、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーをそれぞれ大学は明らかにしなさいというなかで大学はどういうふうに関組織やシステムを揃えていって、その成果というもの、ラーニングアウトというものをどういうふうに関身についたかというものをアセスメントとしてやりなさいという、私は大きな方向はそれでいいと思うのですが、具体的な場面ではそれほどシナリオ通りにいくはずがないというところは必ずあります。ラーニングアウトカムとアセスメントという話で、結局アウトカムばかりに話がいきすぎているというような反省も少しずつ出だしています。もう少しプロセスそのものの価値のようなものが教育の場である限りは、確固としたものにするということが大学にとっては大事なことであるのではないかなという言い方がされたりもします。そうなったときに、私はこちらのセンターがやっておられることはそれなりに意味のあることだと思っています。それは慶應の学生にあったやり方という前提条件があるわけですが、その意味で私はヨイショをするわけではありませんが、肯定的に評価させていただきます。むしろ責任があるのはこのセンターではなくて、そもそもこの大学のカリキュラムガバナンスが一体どうなっているのかということに、私は非常に大きな疑問を持ちました。つまり大学をさらにいい方向に持っていこうとするのであれば、組織戦略みたいなものが上のほうできちっと立てられていなければいけない。それはおそらく慶應という大きな所帯では非常にしにくいのだろうとは思いますが、それをブレイクスルー



するようないい方法はないかということで、こちらは調べてみれば威力偵察みたいなことをしている、させられているのではないかなと思いました。ですからそのことはこのセンターが上に対して物申すということをしてもいいのかなと思います。最後にもうひとつ、これも本日の評価だと思いますが、教員をどうおだてるかということだと思います。おだてるというかファカルティの関心をそれぞれプラスにもっていくような形での活動をどうするかということがとても大事なのではないかなと思います。最後に HAPP もとてもおもしろいと思うのですが、もう少し分析的にするためには学生がどういった能力を身につけたのかという調査をなさると外向けには説得力が出てくるだろうし、その能力をいくつか分類的に考えてみるということは教育を構築するためには有意義なことではないかなと思う次第です。以上です。

横山 ありがとうございます。まさにいいたいことをおっしゃってくださったという感じです。カリキュラム・ガバナンスに関しては、それこそ地道な努力ですが、少しずつ上に声が届いている実感はあります。先ほどの基盤研究もそうです。HAPP に関しては、いろいろとり溜めていた記録を学術フロンティアのなかでひとつまとめて、そこから学生がどのようなことを学んだかという

ことを分析できる場を作ったところであります。また結果が出たときに報告できると思います。的を射たご指摘ありがとうございます。続きまして菊池重雄先生よりしくお願いいたします。

#### 菊池重雄

本日はどうもありがとうございました。先ほど佐藤先生に質問をしたときに、前置きでいった、専門を越えたその向こうにある「教養」と佐藤先生が提示された点ですが、私もずっとその方向でやってきました。そして今日お話しくださった方たちはみな教育の専門家ではないわけです。そういった形でやってくださったということに私はものすごく親しみを感じます。私自身も非常にマイナーな分野を研究していますので、それぞれの先生とは専門は違いますが、大変、それぞれアプローチが違うだけで同じことをしているのではないかと考えています(笑)。そうした観点から見たとき、まず最初に横山先生をはじめ、発表された方が言葉や使われた概念がきちんと一致、揃っていたというのはすばらしいことだと思います。これは基本的にはコミュニケーションがしっかりととれているということだと。今日いらっしゃっていない先生方もおそらくそれはとれているのではないかと考えています。また後ほどいいことをたくさんいいたいと思いますが、先に少し批判的なことをいわせてもらうと「みいだす」「つなげる」「ひろげる」というコンセプトで今回は報告をしてくださったのですが、実を言いますと、このコンセプトはどこから出てきたのかということが私にはよくわかりませんでした。それぞれ歴史を伝えて広げていくという観点からすると、一体どういうプロセスでこの「みいだす」「つなげる」「ひろげる」というものが登場してきたのだろうか。いただいた資料がありましたので、それから逆に私は想像したのですが、その部分をどこかでご説明していただければありがたかったと思います。

それからこれが一番気になった点なのですが、FDのお話が出てきたと思いますが、FDが問題だという形になって、成果として教員サポートを行ったとお話されましたが、これは私の解釈からすれば基本的には変わらないじゃないかと思っています。つまり、FDも強制的にやっている

ところはあると思いますが、ほとんどのところ自由参加的なFDのほうが圧倒的多いと思います。ということは結果的には賛同してくださる方が集まって行こうという形になります。そうすると今おやりになっている教員サポートとそれほど変わらない形態のFDになっているのではないかと考えています。もしかしたら私が聞き流してしまったのかもしれないのですが、その部分ももう少し詳しく知りたいと思いました。

その次の問題ですが、私は問題というよりもむしろ川島先生が今おっしゃられたこととむしろ近い形の、アプローチはまったく違うのですが、先ほど、学生がこれによって変わるかわからないかという話とも関連してくるのですが、慶應大学はどういうふうな学生を社会に送り出したいのかと考えたときに、社会を引っ張っていくエリートを育てたいのか、それともユニバーサル社会にきちんと適合するような力を持った学生を育てたいのかという考え方があるとするならば、慶應大学ははっきりとエリートを育てるといっていいのではないかと私は思っています。ただお話のなかでは社会を意識したとか、時代にフレキシブルに対応したとか何回か出てきましたので、その場合の教えている学生と社会とのスタンスというのが私のなかで少し曖昧になりました。たしかにユニバーサル社会のなかで生きて



いくうえで必要なことを身につけた学生を育てるというのは、審議会報告としては非常にいいことだと思うのですが、逆に今までやってきた慶應大学の教養研究センターでやってきた延長線上におくと、学生をスケールダウンさせてしまうのではないかという気がします。そういう意味では、のびのびとした形の教育をお続けになったほうがむしろいいのではないかという気がしています。それと先ほどの、他の大学にどれほど影響が与えられるのかという質問があったと思いますが、むしろそういう形で教養の可能性というものを示すことで他の大学に対して、もしくは日本に対して大きな影響が与えられるのではないかと思います。佐藤先生のお話のなかに、山登りでこちら側とあちら側、というお話があったと思いますが、むしろそこに教養のフロンティアという空間が本当はあるはずなのですが、それが見えていないという状況があって、それを発見できるのがこのセンターの役割といったところがあるのではないのでしょうか。それがさっきのアプローチという言葉になったのではないかと思います。ですから予想されるアプローチ方法があるわけではなくて、新たな空間に知の体系を立ち上げるといっても、このセンターならば可能だと思います。

それからもうひとつ。これは私が川島先生といっしょにFDを研究している研究会があるのですが、そこで私が主張していることなのですが、FDの技術とかFDの考え方というのは各大学ばらばらという状態なのです。FDを課題として研究している方がいろいろ書いていることにしても、FDの考え方というのはばらばらです。ですからFDについていえば、各大学で行われているFDの手法なり概念というのを一箇所に集積してリソースセンターのように集めてそれを各大学が活用することができないかと考えています。それと同じように教養ということに関しても教養リソースセンターのような発想が必要で、それは今まで培ってきた教養の考え方でも可能なのですが、先ほどの新たな教養のフロンティア空間のような形でのリソースも作り出していかないと、おそらく慶應大学に先頭を切ってやっていただけるといいのですが、多くの大学がそういうことを必要としていると思います。ですから、そういう観点ではものすごく可能性をたくさん持ったセンターだという気がしました。

最後に、これは先ほどドキュメンテーションという言葉で金子先生がおっしゃいましたが、最大の評価というのは研究したことや自分たちが話し合ったことが、きちんと成果物になっている点です。私はすごいことだと思っています。これが実はニューズレターでもこういった報告書でも、受け取ったほうは気楽に受け取ってしまうのですが、私も作る立場の人間なのでよくわかるのですが、ものすごく労力を伴うところだと思います。なおかつ先生方がご自分の署名入りで書くわけで、さらにそれが外に出るわけですから。そういった状況にあってもこれだけのものがこの5年間に出了たというのは、これだけでもある意味では外部評価をしないでも済むぐらいのレベルではないかと思いました。以上です。

横山 ありがとうございます。痛いところもついていたいただきましたし、いくつかの課題もいただきました。後ほどゆっくりメンバーの中で「みいだす」「つなげる」「ひろげる」の考えを、内部FD、外部とどういうふうに関連し、連結していくかということをお話し合っていきたいと思っています。ありがとうございます。では続きまして榊原様からコメントをいただきたいと思っています。

榊原一

私はジャーナリズム、マスコミに籍を置き、どちらかと言うとアカデミズムの世界には疎いのですが、今日は非常に刺激を受けました。また、私が学んでいた30年以上も前の大学の状況とは、大変な様変わりをしているなと思いました。大学の雰囲気やいろいろ皆さまからお伺いしたこともそうですし、社会のなかでの大学の位置、役割というものも非常に変化していると感じました。伝統的な研究の枠組みが比較的安定しており、研究者も学生も、ある程度自己完結的に考えられた時代とは異なり、常に社会性を意識せざるを得ない状況だと思います。

少しポイントが絞れないかもしれませんが、ひとつはやはり研究の質というか、テーマ設定というか、学問のレベル、研究のレベルということがあろうかと思います。今日は「生命の教養学」というものを見て、これは研究のレベルにつながると思うのですが、私はここには非常

に共感できました。これはやはり、いかに現実のなかでテーマ設定があって、現在の時代状況のなかで新しい領域をきちんと開こうとしているか、開いているかということです。これは大いに問われることだと思います。先生のレベル、研究のレベル、先ほども佐藤先生もタコツボというお話をしていましたが、個別専門的にやっているとどんどん細分化されてしまうということになると思います。大学の研究のレベル、スケールということを考えたときに、常に新しい領域、スケールでそれを打ち出すことができるか、また創造性、可能性に挑戦し続けるか、ということが求められていると思います。そういうなかで、研究センターが「生命の教養学」という魅力的でスケール感のあるテーマをひとつ打ち出したということは、この5年間の目に見える成果ではないでしょうか。ですからぜひ、こういったものをさらに次の5年間でもぜひ発展させていただければと思います。

それから、研究のレベルというときに、研究者とは別に、学生のレベルでこれをどういうふうに可能性を広げていけるのか、という視点があると思います。今日は大学の側からの改革、変革あるいは横断的に可能性を広げるという取り組みは非常によくわかりました。それから学生による評価というものも、アンケートとか一部を見せていただいたのですが、私が大事だと思うのは、慶應大学を卒業してこれから社会に出て、非常に難しい社



会、世界を切り開いていくのは、最終的には学生ひとりひとりがどういうふうにか、こういう活動を受け止め、大学で学んだことをどういうふうにか、実社会に生かしていくのかということが一番大切だと思います。ここが実は、お2人の話にもありましたが、慶應の学生が一体何を目指して実社会のなかでどういうふうにか、生きて、社会に影響を与えていくのか、これはリーダーシップであったりエリートの役割だったりしますが、そういうところには私は少し疑問を抱きました。学生が何を求めて、慶應に入ってきて、4年間でどういうふうにか、自己変革あるいはレベルアップをして、最終的に社会のなかに出て自己実現をし、社会変革をしていくのか。いわば、彼らの成長過程のなかで、研究センターの今回の取り組みが存在感を持ち、影響力を持ち始めると、慶應がやろうとしていることの意味がもっと見えてくると思います。少し抽象的かもしれませんが、大学・研究者のレベルと学生自身の主体性がもう少し積極的にからまってくるといいと思います。

私はNHKにいますが、社会のなかで、NHKは公共的な役割を担っていると思って私はやってきたのですが、これが時代状況のなかでいつの間にか垢がたまっていたとか、組織の硬直化が起こり、社会の変化に遅れているのではないかと、問われています。それはやはり、組織の縦割りの弊害だったり、あるいは社会に対する独善性といったものが問われています。それは大学と共通していると思います。そのときに一番必要なものは組織の枠組みを変えるというエネルギーだと思います。慶應はこういう新しい枠組みを作ったことで、大きなエネルギーが生まれていると今日思いました。これが全学的に共有されている動きなのかどうか。日吉のなかだけではなく三田などを含めて共通の理解が得られているかどうか。ぜひ次の5年に向けて、慶應全体の目標設定と共有できるようなエネルギーにしていきたいと願っています。ぜひ外部のメディアや地域など外との連携は大切にしていきたい。見えるようにしていきたいと思います。メディアは大事なものですのでぜひ有効に使っていただきたい。以上です。

横山 今日、外部評価委員としてお願いした幸子さんに

最初にお会いしたときに、「メディア関係者は今日来て  
るんですか」といわれまして、そうか、と思ったので  
す。「ひろげる」という意味ではメディアに対して自分  
たちを開いていくことを考えなくてはいけないと思いま  
した。それでは菅原さまお願いいたします。

### 菅原幸子

今回の評価に臨むにあたり、報告書やニューズレター  
をお送りいただき、それからホームページなども見せて  
いただき、非常に多彩な活動を行っている研究機関だ  
なということはわかりました。しかし、何度も出ましたが、  
少しわかりにくい部分がありました。センターの目的と  
いうのはこの資料にも書いてあるのでわかりますし、個  
別のプログラムに関しては、これも先ほどから何度もお  
話にあります通り、非常にアーカイブがしっかりしてい  
て、見ようと思えば具体的な、どういったことをどうな  
さっているのかということが外部の人間にもわかって非  
常に素晴らしいのですが、その間の部分あいだが少しわかりま  
せんでした。先ほど菊池先生から3つのキーワードに対  
してご指摘がありました。私はその3つのキーワード  
を本日うかがって、また4人の先生方のお話を直接うか  
がうことによって、目的と個別の実践プログラムをつな  
ぐところがわかりやすい言葉で3つ提示されたので、だ  
いぶ理解ができたかなと思っております。このようにイ  
メージを共有するためには、このようなわかりやすさが  
必要なのではないかと思えます。ですので外部に発信さ  
れる場合にはそういうことを意識されてはいかかなと  
思いました。

それから、私が行っています仕事の関係から、アート  
に関する部分と地域に公開されているもの、地域との関  
わりという3つの点で個別のプロジェクトについて感想  
と意見を言わせていただきたいと思えます。

まずは身体知プロジェクトですが、ホームページなど  
で2005年に研究がスタートして昨年度に実験授業、今  
年も実験授業ですが、かなり具体的なことをなさってい  
るということに着実に進展しているのではないかと思  
います。たとえば、オルタナティブ・スペースとかフィー  
ルドワーク、ボランティアワーク、読み聞かせといった



分野も大学の教養として捉えているというのが非常に新  
鮮な思いで、こういったことに関わっているものとして  
はとてもうれしく思いました。特にアートに関わる部分  
に関しては単に鑑賞ではなくて、コミュニケーション能  
力や自分を理解したり他人を理解したり、それから問題  
解決のための創造性への気づきといったことで考えてい  
らっしゃるのではないかという気がしたのですが、こう  
いったことを大学の教養課程の研究センターがこれほど  
多彩に展開されているのは大変素晴らしいと思えます。  
特に、たとえば教職員の方が学生とともにワークショップ  
に出ている例などもありまして、その際の振り返りな  
ども非常に参考になりました。

そういったものをどのように発信していくかというこ  
とに関しては、近々出版されるご予約だと先ほどうかが  
いましたが、ぜひ外部、大学の外への発信もお願いした  
いと思えます。横浜ですと住んでいるアーティストも多  
いので、ぜひそういう人たちに対して発信をしていくこ  
とを考えていただいて、新しい人材の発見やコラボレー  
ションの機会を増やしていただければと思いました。ぜ  
ひそういうものを慶應の教養研究センターモデルとして  
世界に発信していただければと思えます。

サイエンス・カフェという事業についてですが、これ  
はドリンクを飲みながら気軽な雰囲気の中で科学を学ぶとい  
う事業だと思いますが、このカフェという発想が新しい

ものだと思います。敷居の低さというか参加のしやすさという点からとてもいいアイデアだと思います。また、親子で参加できる催し物ですので、子育て世代が求めているということでは公共性の高さも感じますし、中島先生もおっしゃったように、専門家の方にとってそれ以外の方にわかりやすく伝えるための研修の機会として捉えていらっしゃるということで、そういった目的が2つ出されているのはすばらしいと思いました。ただ、ホームページのなかまで入っていかないと、親子で参加できる企画だということがなかなかわからないので、たとえば目でそういうことがわかるようなアイコンなどを工夫されたらいいかなと思いました。あとはHAPPで学生からの公募もされていて、さらにお金の助成もされているということで、とてもいい企画だと思います、ただ応募自体が少し少ないような気がしますので、これは募集の情報受信が低いのかあまり知られていないのかわかりませんが、もう少したくさん応募してもらって選考するというようなことでスキルアップしていったらいいかなと思います。採用された企画を実行するまでの間、教員の方たちがつくというのも非常におもしろいと思いました。

情報発信に関しては、主軸となるのはやはりホームページになると思いますが、先ほども少々申し上げましたが、アーカイブは非常に充実していると思いました。ですからたとえば予備的知識があれば、私のような外部のものであってもこういったパンフレットを持っているとかいった多少の知識があればどんどん中に入っていくって貴重な情報を手に入れることができるのですが、そうでないとホームページをぱっと見ても教養研究センターの活動がどういうものかということもわかりにくいですし、イベント情報もたくさんありますが、それが誰に対して発信されているものなのかも少しわかりづらいなと感じました。大学のなかの研究機関ですので主に教員の方に向けた情報発信になると思いますが、公開講座など学外の方への情報発信もあるので少し工夫をされて、一般の方が見ても自分たちが参加できるものなのかそうでないのかというのがわかるような形の情報発信になればいいかなと思いました。

最後に地域への広がりということに関しては、日吉にとっての慶應の存在の大きさというのは、私も10年ほ

ど日吉に住んでいましたので、住民としては強く意識しておりました。慶應にとっても日吉というのは駅前に商店街があり、その奥に大きな住宅街があるというように実社会という意味での街をもっていますので、いろいろな形で連携がとれるような事業が展開できるといいと思います。いくつかのフィールドワーク事業として日吉の街に出て行くような事業もなさっていますが、それをより発展させて地域の方たちのよりどころのひとつにキャンパスがなっていければすばらしいのではないかなと思いました。

それからこちらのセンターなのですが、非常にユニークな建物で管理も大変だと思いますが、これを見たら何かをしたいと思う人もいると思います。ここの場を使って何か新しいものを作りたいというアーティストもいると思うので、ぜひこのスペースを外部の人たちにも、ここで何かを発信してもらおう場としていただければすばらしいと思います。

横山 社会連携は慶應義塾大学のひとつのキーワードです。これから教養研究センターも大いに関わっていかないといけないと思いますし、そういったときにはまず横浜市とのパートナーシップが第一であると思いますので今後ともよろしく願いいたします。それでは最後ですが、日比谷潤子先生からよろしく願いいたします。

#### 日比谷潤子

最初からいらした方はお聞きになったと思いますが、横山先生ご紹介くださったように、私はかつて慶應義塾に勤めておりました。2002年の3月末日に慶應を去りました。このセンターはその数カ月後に発足したということで、今日は特別な感慨をもって話を聞きました。今日お声をかけてくださったのは、去年の12月にあるところで学士課程教育についてのシンポジウムがありまして、そこで横山先生と久しぶりにお会いしまして、それからしばらくしたらメールをいただきました。かくかくしかじかのものがあって外部評価をしてほしい。特に金子先生は内にいらっしゃる方ですが、かつて内において今は外にいるという目で忌憚のない意見を言ってほしい

というご要望がありましたので、そのご要望にお応えできればと思います。

今日は先生方のご発表またフロアからもご発言がありましたけれども、多くの方がおっしゃったのが、縦割り、閉鎖性、分断、タコツボという言葉です。これらが繰り返し出てきたかと思います。私はまさにこれが理由で慶應をやめました。実は事前にいろいろな資料をお送りいただいたときに、ニューズレターの11号に座談会がありまして、村井常任理事のご発言のなかに、「融合、複合といった視点」という文言が出てきています。これはおっしゃることとしては大変にすばらしいと思いましたが、本当にそういうことができるのかなと思って今日はいかがしていました。本日のご発表を聞いていますと、どなたもこのことは非常に大きな問題である、打開をしないといけない、何とかしないといけないという熱いお気持ちをお持ちであるということがよくわかりましたので、そのことは非常に高く評価したいと感じました。しかしながら実際にそれを目指しているセンターがどういう活動をしているかというお話になりましたときに、ボランティアだというお話が出てきました。ボランティアには大変いい面があると思うのは、やはりボランティアにやるということは、自分にやりたいという気持ちがあるし、ここで自分が何かをやることに生きがいを見いだせるわけですから、押し付けてやると中途半端な気持ちや言われてるから嫌だけどやるというのがどうしても出ます。しかし本当にボランティアベースにしておけば、やる気のある人が集まってその範囲のなかでは有意義な活動ができると思います。ただそのことを全体に広げるのは大変に難しいのではないかなという気もしました。それは教員の方ばかりでなく、たとえばこちらに参りましてからいただいた資料のなかにスタディ・スキルズを実際に履修した履修者のアンケートと数が出ていました。履修者は年によってばらつきはありますが、30名から50名ぐらいですし、少しだけですが個別のコメントを読みましたら「やる気のある人ばかりだったのでとてもよかった」ということを学生も書いています。それはいいのですが、これだけの人数を抱えている大学にあって、先ほど横山先生ご自身もごくわずかとおっしゃっていましたが、本当に少数の学生が、そして履修



者自身もやる気のある人だけ集まっているからここはうまくいっているというのは、全体のこのセンターの目的とも関わりますが、そこであらためてミッションを見てみると、4つありますが、研究活動を展開します、研究を募集しその推進をサポートをします、積極的な提言を行います、研究活動の質の向上・改善をはかります、とみんなすばらしいミッションではあると思いますが、やはり大学はカリキュラムガバナンスという言葉も出しましたが、教育機関であるという面も非常に重要ですので、ごくわずかの学生しか参加していないものを、全体に広げていくということはこれからの大きな課題だと思います。特にこれも教養を超えたその向こうにある教養とか、4年間を見越した教養教育というのは本当に重要なことだと思いますし、もしリベラル・アーツということであれば、最初の2年だけではなくて、4年を通じた全体的なカリキュラムのなかで考えられることと思いますけれども、三田、矢上、信濃町、SFCは少し構造は違いますが、そのなかで教養専門の先生という言い方を金子先生はなさいましたが、どうやったら全学的な試みになるかということは考えていかなければいけないことだと思います。

学部共通カリキュラム検討委員会できて、今日これはこれから今読もうと思ったのですが、『改革への処方

箋』というような全体の教育カリキュラム研究についての基盤研究報告書も出していらっしゃいますのでいろいろとお考えかと思えますけれども、やはりここで研究なさっていることが出発点となって、正規の授業に組み込まれていくための方策というのはよく考えなくてはいけないことなのではないかと思えます。そうでないとコアにはなりえないと思えます。少し変な例ですが、9月に関東大震災が起こったのでこの地域でもあると思えますが、毎年9月に地震の訓練というのが私の地域では行われます。たまたま学校が休みだったので、炊き出しの係りをやったのです。それでどこか近所の非常に広い校庭に集まって炊き出しをしている班もあるし、実際に消火器を使って訓練をしている班もあって、全体として地震があったらこうやって対応しようということを、1日限りではありますがやりました。それでたとえば変ですが、そういうものになってはいけないなと思うのです。何もしないよりは1回でも炊き出しをしたりホースで火を消したりするというのは、少しでも役には立つと思うので、たまたま「アカデミック・スキルズ」をとった学生は非常にいい経験になるし、技術も身につきますからその後にも役立つということになります。何もしないよりはましかもしれないけれど、あれをやっても地震が来たら何もできないだろうと思えます。そう考えると全体のごく一部の人がやっているということでは、本当の意味での改善にはならないので、これをどのように全体に広めていくかというその道筋をつけていくのがこの先の5年の課題になるのかなと思えます。

最後に今日見せていただいた資料で、『改革への処方箋』という厚い本を見ますと、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジのカリキュラム調査をよくやっていることもわかりましたし、ニューズレターから、スタンフォードの先生を招いて講演会をなさったということもわかったのですが、日本では教養教育というもののイメージはあまりプラスでないところがあるかと思えます。リベラル・アーツというのは何？という感じです。最近はそのようなところもたくさんできましたので、多少は名前も知られてきましたが、まだまだ浸透していないというのが実情です。やはりいただいた資料の中の62ページで、どうやって調査をなさったかというところ、『USA ニュース』

誌によりアメリカの大学のリベラル・アーツ・カレッジ部門の上位50校から選択して調査したということですが、やはりリベラル・アーツ大学というのがひとつの部門になっているような国の大学と比較をすることは非常に難しいと思えます。それはリベラル・アーツ大学としてやっているところはもちろんですが、ちょうどスタンフォードから先生をお呼びになったように、慶應のような総合大学のなかにそういった部門があるというのはすごく大事なところだと思いますので、それはぜひこの次の5年間にこのセンターで研究なさっていることが、大学全体の教育プログラムにどのように結びついていくのか、あるいはここから声が上にあがっていくのかということをお話の課題になさってほしいと思えます。

横山 日比谷先生ありがとうございました。そして外部評価委員の皆様方本当にありがとうございました。いろいろな宿題をいただきました。最後になりますが、日比谷先生の言葉をそのままここではいただきたいと思っています。ボランティアというのは私は決していい言葉ではないと思っています。実際に私たちの活動に参加してくださっている先生から出た言葉は、ここでやっていることは自分たちの学部の教育や運営に生かせるのかどうか、それから私たちがこれだけ努力したことが反応として大学側に受け取られるかどうか、そのことがはっきりしないと活動の意義はないといわれました。それはその通りだと思います。関わってくださった方たちが学部を持ち帰りあるいは各機関に持ち帰り、どう広げていくのかという道筋をまずつけなくてははいけません。そして何とんでも大学に少しでも成果のみならず成果を大学全体で応用していくアピールをしていかなくてははいけません。大学側が聞き入れないときはメディアにうって出るということもある程度は必要なのではないかと思っています。いずれにしろこれから先、教養研究センターにとって最も大切なことは内部でのつながり、そして外とつながっていくことだと思っています。ですので、1回限りの報告会に終わらせることなく、みなさま方もこれから密につながっていきたくと思っていますし、教養研究センターに関わってくださった学生さんたちとは、今後のおつき合いこそ大切です。ここでの経験が社会に出た

ときにどう影響を及ぼしていくのかいかなのかという  
ことを将来ぜひ私たちに報告していただきたいと思っ  
ています。本当に長くなってしまいましたが、みなさま方  
どうもありがとうございました。

# 慶應義塾大学教養研究センター活動報告会 外部評価審査シート

1. 「教養研究センターの活動を振り返って—みいだす・つなげる・ひろげる—」をお聴きになり、次の各項目について、適切であるかなど評価・ご意見を記載してください。

- (1) 教養研究センターの目的・ミッションについて
- (2) 教養研究センターのこれまでの研究・教育活動の取り組み（姿勢）について
- (3) 総合所見 5段階評価（A、A<sup>-</sup>、B、B<sup>-</sup>、C）をつけてください。また、コメントがございましたら、ご自由にお書きください。

2. 「教養研究センターの活動を振り返って—みいだす—」をお聴きになり、次の各項目について、その意義、成果についてなど評価・ご意見を記載してください。

- (1) 「みいだす」というセンターの機能・役割について
- (2) 「みいだす」の代表として提示された事業について
- (3) 総合所見 5段階評価（A、A<sup>-</sup>、B、B<sup>-</sup>、C）をつけてください。また、コメントがございましたら、ご自由にお書きください。
- (4) 「みいだす」という機能や各事業についてアドバイスをお願いいたします。

3. 「教養研究センターの活動を振り返って—つなげる—」をお聴きになり、次の各項目について、その意義、成果についてなど評価・ご意見を記載してください。

- (1) 「つなげる」というセンターの機能・役割について
- (2) 「つなげる」の代表として提示された事業について
- (3) 総合所見 5段階評価（A、A<sup>-</sup>、B、B<sup>-</sup>、C）をつけてください。また、コメントがございましたら、ご自由にお書きください。
- (4) 「つなげる」という機能や各事業についてアドバイスをお願いいたします。

4. 「教養研究センターの活動を振り返って—ひろげる—」をお聴きになり、次の各項目について、その意義、成果についてなど評価・ご意見を記載してください。

- (1) 「ひろげる」というセンターの機能・役割について
- (2) 「ひろげる」の代表として提示された事業について
- (3) 総合所見 5段階評価（A、A<sup>-</sup>、B、B<sup>-</sup>、C）をつけてください。また、コメントがございましたら、ご自由にお書きください。
- (4) 「ひろげる」という機能や各事業についてアドバイスをお願いいたします。

5. 「まとめ—教養研究センターのこれから—10年目に向けて」をお聴きになり、次の各項目について、適切であるかなど評価・ご意見を記載してください。

- (1) 組織のあり方とその見直しについて
- (2) 新たな事業（案）について
- (3) センターの考える「教養」について
- (4) 総合所見 5段階評価（A、A<sup>-</sup>、B、B<sup>-</sup>、C）をつけてください。また、コメントがございましたら、ご自由にお書きください。

6. みいだす・つなげる・ひろげる—教養研究センターの過去・現在・未来—本日の活動報告会をお聴きになり、次の項目について、評価・ご意見を記載してください。

- (1) 本日の報告会において、「みいだす」「つなげる」「ひろげる」の3つの観点（キーワード）から、センターの活動を振り返った点について
- (2) 総合評価 本日の活動報告会全体について、5段階評価（A、A<sup>-</sup>、B、B<sup>-</sup>、C）をつけてください。また、コメントがございましたら、ご自由にお書きください。
- (3) 本日の活動報告会の内容や配布資料を踏まえて、センターに対する総合的な評価・ご意見や今後の活動へのアドバイス等をご自由にお書きください。

## 金子郁容（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科委員長）

1.

(1) 「教養」と、英語でいう liberal arts とは、ちょっと違う印象がある。センターの目的、ミッションは、大学にとってとても重要なものだと思う。ただし、目的／ミッションと具体的な活動とのギャップがあるように思う。慶應の場合、特に、大学として教養教育研究をどうするのかについて考えないといけないだろう。

(2) いろいろな行事や活動があるのはすばらしい。が、全体として、このセンターが何をしようとしているかが、一見しただけでは分かりにくい。学部でしていること、いわゆる大学の extension 部署でしようとしていることなどどう違うかなど、より明確になるとよいだろう。

(3) 対象者をどう想定するかが難しい。

評価

活動 A

インパクト B

2.

(1) 「気持ち」としては、発表にあったことが大事であることはよく分かる。具体的観点からすると、センターの機能として進めることか、個々の教員の研究活動なのか、仕分けが難しいかもしれない。

(2) 「みいだす」の代表として提示された事業についてセンターの現在の組織的な制約を考えると、塾内に一定（特定の）機能を付与されているというより、各教員のボランティアな研究、教養活動であるような印象を受ける。全体としては、よい活動がなされているといえる。

(3) 評価

活動 A

インパクト B

(4) 「大学の改革」そのものより、「そのための“実験”をする」という位置づけはよいと思う。

3.

(1) 日吉の「学部共通カリキュラム」の検討や改善などは、とても重要な活動であると思う。

(2) 一般的に言って、大学の教員が「教える」ことについて、大学としての統一的な方針がない。新任の教員も、どう教えるべきかについて訓練を受けない。その点、FD 活動は重要だと思う。たとえば最近、教育経験がない社会人（官僚、企業人、自営の人）がいきなり大学教授になり、授業を担当することが少なくない。そのような人に、ある一定のトレーニングを提供するパッケージがあればよいだろう。

(3) 評価

活動 A

インパクト B

4.

(1) これも気持ちはよく分かるが、各々の活動についてサービス提供の対象者として誰が想定され、どんな効果を期待するかを明確化すると、より分かりやすくなるでしょう。

(2) HAPP は大変、面白いと思う。大学の強い関与ではなく、学部を越え、地域とのつながりをつける目的があるかと思うが、本センターらしい活動として、よいと思う。サイエンスカフェもよい活動だと思います。

(3) 評価

活動 A

インパクト B

(4) ひとつの参考として、大学によっては、地域に学生が“経営”する店を出すことを推進しているところもある。本センターが担当すべきことか分からないが、そのようなこともあるかもしれない。

5.

(1) 全体として何を目的とするか、活動の方向性が、より明確に打ち出されるなら、対外的に、より見えやすくなると思う。

(2) FD、鶴岡セミナー、未来先導基金のプロジェクトなどは、とてもよいと思う。

(3) 抽象レベルではいろいろと議論することは意味がある。その一方で、それと本センターの活動目的との直接の関連が見えにくい。

(4) 評価

活動 A

インパクト B

6. 感想—いろいろとご苦労があると思いますが、大変、意味のある、また、元気が出そうな活動が多いという印象をもちました。

(1) (a) 日吉のいろいろな学部の教員の自主的活動の場として見ると、とてもよいものだと思う。

(b) 対外的（慶應全体、他の大学、社会一般など）なインパクトとしていうと、活動がいろいろありすぎて、本センターが何を特徴として何を達成する所が見えにくい。

(2) 評価

(a) A

(b) B

日吉がもつ、いろいろな制約の下で、とても活発な活動が行われていると思います。

## 川島啓二（文部科学省国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官）

1.

(1) 概ね適切であると考えますが、「2. 教養および教養教育にかかわる研究を募集し、その推進をサポートします」は、慶應義塾の教員の教育活動と有機的につながるための、具体的な方法を述べているに過ぎないのではないか。個々の教員の教育活動とどのような関わりをめざすのか、その点に今少し踏み込んでみるべきではないか。また、「4」に評価を受けることが記されているが、評価はミッションを果たすための方法であって、ミッションそのものではないのでは？

(2) 限られた条件のもとで、これだけの活動を展開しておられることは高く評価されるべきと考える。あえて、課題を申し述べさせてもらうならば、一般研究への支援が、教養研究センターの研究活動の中でどう位置づけるのか、慶應義塾の教養教育の充実と進展にどう貢献しているのか、検討がなされるべきではないか。

(3) A-

目先のノウハウに走ることなく、現在の骨太の姿勢を

堅持されたい。

2.

(1) 現在の教育体制や観念の枠組みからは、課題として発見・定位できないような創造的で革新的な価値や方法を見つけ出していくという機能・役割であると理解するならば、それこそが学部横断的な役割を期待されているセンターの機能・役割として適切であると考えられる。

(2) 説明されたようなFD事業は、どこまで「発見的」であったのであろうか。「大学カリキュラム研究」はきわめて重要なプロジェクトであると思われるが、「みいだす」よりもむしろ学部間を「つなげる」あるいは3つの機能の基礎となる調査研究なのではないか。「問題をストレートに解決する機関ではなく、新しい考え方を示し、実験をし、規範を示すことに徹する」とのセンター役割像に同感する。実際の改革責任がセンターにあるわけではないと思う。

(3) A-

FDについての立ち位置をどうするか。難しいが…。

(4) FD関連プロジェクトについて、試行錯誤があるようだが、新しい教養教育のあり方について、常に問いを投げかけている教養研究センターの活動全体が実はFDそのものであるという認識に立つべきではないだろうか。他大学で行われている既存のFDイメージにとらわれる必要はあまりない。ただ、センターの活動が、どのような意味で教員の教育能力向上に貢献し、どのような効果があったのか、検証と説明が不可欠と思われる。評価の際に問われるので。

3.

(1) 伝統私学における、牢固として抜きがたい縦割り構造を突き抜けるような、教養知の発見と発信がセンターの役割であるとすれば、さまざまな組織や人を「つないで」化学反応を促すことをセンターの役割・機能として掲げることは極めて至当であると考えられる。

(2) 「アカデミック・スキルズ」：慶應義塾の学生の特徴にあった構成になっていると思う。レポートの作成やプレゼンテーションといったゴールを常に意識させているところも効果的だと思われる。履修者が少ないことが惜

しまれる。

「身体知プロジェクト」：現代社会の知の在り方に再考を迫るという意味において、意義深いプロジェクトであるが、今後は、情報化社会やバーチャル社会における身体知の意味も探ってほしい。実験授業から次の段階への飛躍を期待したい。

「生命の教養学」：オムニバス風の構成なので、問題を幅広く拾っていくことが目標になるのだと思われる。オムニバス構成の長短を見極めた上での内容や目的の設定が望まれる。

「教員サポート」：センターがサービス機関になってしまう恐れはないのだろうか。

(3) A-

客観的な教育効果の測定を実施するとあるが、方法論は詰められているのか？

(4) 上述 (2) を参照されたい。

4.

(1) 重要な機能であることはもちろん、「ひろげ方」にも工夫があればベターか。

特に、教職員にひろげることには、課題が多いのだろうが、センターの活動に参画することが、自らの職能開発につながるのだという好循環を形成することがポイントになると思う。

(2) HAPP には可能性が秘められているのではないか。新入生歓迎行事にとどまるのではなく、初年次教育プログラムの一環としての位置づけはできないか。イベントとしての性格を残しつつも、慶應の学生となるためのオリエンテーション機能も考えられるのでは？

出版物、広報物は十分だと思う。

(3) A-

(4) HAPP の活動に中心的な役割を果たす学生（上級生）たちにとっても、その参画・貢献がエビデンスとして残るような工夫がなされても良いのではないか。いきなりポートフォリオは無理としても、（例えば就職活動の際の）自己アピールの材料として、資料等を整理しておくことへの注意喚起がなされてもしかるべきかと思われる。

5.

(1) 組織改革のポイントとして、「セクション」から各「事業（プロジェクト）」へ、ということがあげられているが、教養研究センターは、コンテンツ中心に回っているので、広報や発信までを、各プロジェクトが責任をもつ体制構築は妥当な方向性であると考ええる。機能分化が常に効率的な組織運営をもたらしてくれるとは限らないので。

(2) 「学びの場」プロジェクトについて：

組織間連携による教員サポート事業が成功を収めたということから、さまざまな組織をつなげるものとして期待されているようだが、具体的な内容とゴールのイメージがやや判然としない。（事業のゴールイメージがクリアでないことは、センターの事業全般に言えることかもしれない。それは、センターのミッションそのものが、達成的というよりもむしろ探求的な性格を持つからであろう。であれば、そのことに自覚的であり、プロセス重視型の制度設計がなされるべきなのでは？）

FD について：率直に言って、訴えかけてくるものが弱い感が否めない。コンテンツ中心のセンターにあって、FD という枠組み先行で事業を企画しても得られるところは少ないのではないか。

(3) 「つながる」というキーワードから、自己と他者、さらには社会との関係性のあり方を切り口に「教養」を考えていこうとする姿勢は評価されるべきであろう。課題とされるべきは、つながり方やつながりを阻んでいるものの諸相、さらにはつながることによる変化（プラスばかりとは限らない）など、より丁寧で多面的な考察に学生をどのように導いていくのか、その方法論であると思われるので、その方面への展開も期待したい。

(4) A-

6.

(1) 「みいだす」「つなげる」「ひろげる」は、教養教育のあり方を考究していく上での機能であって、例えば「みいだす」機能を担当するプロジェクトが特定の存在するといったものではないと思う。このセンターは、とことんコンテンツのインパクトを前面に押し出すことによって、存在意義が発揮されると思われる。すべての活動が上記の3つの機能を持っているのであって、機能的

な枠組みを先行的に理解するのではなく、コンテンツ単位で振り返ったほうが良かったのではないか。

(2) B-

評価者にとってもとても刺激的な機会だったが、如何せん、準備期間が短すぎる。その一点に尽きる。もう少し前から依頼を受けていれば、じっくりと観察したり、他大学のセンターとの比較をすることができたと思う。

(3) 非常にユニークな活動をしているセンターである。また、わが国高等教育の現状を考えてみれば、広範な影響力を持つというわけではないが、きわめて重要な役割、もしくはモデルケースを提示できるのではないかと期待したい。

## 菊池重雄（玉川大学コア・FYE 教育センター センター長）

1.

(1) 教養研究センターの〈目的〉と〈ミッション〉についてそれぞれを個別にみれば、意図するところがたいへん明確に述べられている。一方、（設立の）目的に関しては“教養教育”がその前提であるのに対し、ミッションは“教養”の新しいありかたを問うものとなっている。こうしたフェーズの違いは組織名が「教養研究センター」であり、「教養教育研究センター」ではないことによるものと考えられるが、外部から教養研究センターの社会的役割と研究の方向性を問う際に、若干の混乱が生じる。“教養教育”にせよ“教養”にせよ、それらの概念の（そして意義の）根源にある目的が21世紀社会における人類の生存であるとするれば、それをキーワードにすることで、（設立の）目的とミッションを連動させることが可能となる。

(2) 教養研究センター（以下、センターと記す）の“教養”についての定義付けおよび意義付けについてはきわめて高い評価が与えられる。「人として『ヒト』として共によりよく生きるための知の連関（2頁、スライド7）」の図表を通して説明された21世紀社会の教養の方向性についての報告は、センターの基盤研究の方向性の正しさと堅牢さを十分に充たすものであると同時に、今後の教養研究のありかたを広く世界に教示するものである。

とりわけ基盤研究における身体知プロジェクトは（複数の大学の個別研究・教育としての取り組み事例はあるものの）、センターほどの規模で組織的に展開されているものは国内には例をみない。身体知研究は21世紀社会における人類の生存の問題と緊密な関係をもつこともあり、そうした研究がもうひとつの基盤研究である教育カリキュラム研究と連動して展開され、時宜を得て学生の教育に還元されていることは賞賛に値する。

(3) A-

センターの5年間の取り組みが「シンポジウム報告書」「ニューズレター」「選書」「書籍」等の刊行物となって発信されている点を高く評価する。Culture of Evidenceが尊ばれる時代にあつて、また、ポートフォリオ社会と呼ばれる時代にあつて研究活動と交流活動のひとつひとつを具体的な記録として体系的にアーカイブ化することは当然のこととはいえ、実現にあたっては幾多の困難がともなう。こうしたことが継続してなされた背景に、歴代のセンター長のリーダーシップとセンター組織の協働的取り組みがあることは容易に想像しうる。

2.

(1) 「みいだす」という概念を用いて報告されたセンターの機能・役割はいずれも妥当性があり、センターの主要な役割のひとつとして賛同しうるものである。とりわけ、超表象デジタル研究に代表される研究フェーズ、FD関連プロジェクトに代表される教員としての職能フェーズ、さらに、身体知プロジェクト等の学生も巻き込んだ教育フェーズ（社会・教育フェーズ）の3側面を有機的に連動させて取り組んでいる点は高く評価できる。

一方で、「みいだす」の主要3項目である〈(新しい)アプローチ〉〈(新しい)課題〉〈(新しい)アイデア〉については〈アプローチ〉〈課題〉〈アイデア〉の3概念の差異が不明確である。おそらくこれらは感性的な背景から選択された概念ではないかと想像される。具体的にいえば、超表象デジタル研究が新しいアプローチとしてとりあげられているが、これは新しい課題やアイデアであってもよいのではないか。同様のことがFD関連のプロジェクトや海外大学の調査・交流にもあてはまる。

(2) いずれも重要であり、組織的に展開する意義が十分

に認められるが、若干の疑問が残るのは韓国他海外の大学の調査・交流についてである。日本の学生が諸外国の大学や学生と接することは「多文化・異文化にかんする知識の理解（審議経過報告：学士課程教育の再構築に向けて16頁）」の観点からも重要ではあるが、たんにそのことのみが目的であるならば、自国と異なる文化の概念の活用（応用）程度の表層的な意味しかもたない。そこに〈新しいアイデア〉をみいだそうとするならば、多元的な文化理解と学生の個の発達が結びつくようなプログラムの開発をめざしてこそ、優れた基盤研究である身体知プロジェクトと並列しうるものになると想像される。

### (3) B

FD 関連プロジェクト、特に、FD を教員サポートへと転換したことに関しての評価は「つなげる」の項で扱う。

(4) センターの機能と役割についての報告においてこの「みいだす (Input)」という概念がもっとも言説の困難さを生むように思われる。「みいだす」という日本語から容易に想像されるのは英語の“find”であるが、“find”は“finding”を想起させる。今回の報告では“dig up”の意で用いられていたが、「おわりに」の部分は“finding”の意で用いられ、若干の混乱をきたしている。「みいだす」のように聞き手によって自由に解釈されうる（幅のある）表現は報告者によってあらかじめ定義づけられることが望ましい。

## 3.

(1) センターにおける「つなげる」という機能・役割は、さきの「みいだす」に比較して、センター自体の機能・役割と合致する部分が多々あるため展開が容易である。「みいだす」ことの困難さは「みいだす」立場にあるものもまた（発表で用いられた表現を使えば、）タコツボのなかにいることが前提となっているため、はたしてタコツボのなかにいる者にそのような行為は可能かという命題が存在するが、「つなげる」場合には、最悪でもタコツボのなかを整理することだけは実現可能だからである（もっともそれはすでにタコツボではないが）。そうした整理という観点に立つとき、センターは極めて有効な方法で学生と教員、学生と社会、教員と社会をつなげ

ることに貢献している。特に、2つの基盤研究と2つの極東証券寄附講座は多くの大学にモデルとして提供しうるものとして、高く評価できる。

一方で、「つなげる」にあたって困難があるとすれば、教職員（組織）相互を「つなげる」という行為である。報告を通して「つなげる」意図は十分に伝えられたが、どのような方法で「つなげる」かについてはその方向性が示されなかった。なお、考えられる方法としては、米国のアルバーノ・カレッジ（ウィスコンシン州）のような学問分野組織と担当科目のラーニング・アウトカムに基づく新たな組織体を組み合わせたマトリクス方式などがあげられる。

(2) 上記にも述べたように、2つの基盤研究と2つの極東証券寄附講座は他大学の範となる優れた取り組みである。こうした取り組みの優位性は事業のいずれもが「つなげる」という要素を内包していることにある。2つの基盤研究にしても、2つの寄附講座にしても「つなげる」こと自体がそのプロジェクトの本質でもある。こうした事業を計画的に実施し、学びの場の中核的プロジェクトに据えたことがセンターの研究・教育組織としての信頼性を生んでいる。

事業としての教員サポートについては疑問が残る。「みいだす」の項とも関連するが、評者にはFDと教員サポートの違いがわからない。たんなる用語の読み替えではないか。強制ではFDは成功しないという意見には同意するが、教員サポートは自由参加のFDであるとみることもまた可能である。教員サポートの目的にある「よりよい教育と適切な学生とのコミュニケーション（9頁、スライド2）」との表現も解釈の余地がある。さらにいえば、学部FDとセンターによる教員サポートをどのように「つなげる」のかが不明確である。

一方、教員サポートのワークショップに代表される取り組みについては今後より具体的な成果報告を求めたいが、肯定的評価の対象でもある。また、センターがレポートおよびアーカイブを刊行する予定であることも、「つなげる」ことの重要な成果証拠として望ましいものである。

### (3) A

(4) 学びの場ということから考えて、「つなげる」こと

はセンターの中核的概念と考える。そうした際に、報告書（活動の検証結果）等を刊行するにあたり定量的研究の成果をさらに盛り込むことが望まれる。2006年度の活動報告書および今回の報告会は全体に定性的研究の立場に重心が置かれている。

#### 4.

(1) センターにおける「ひろげる」という機能・役割は広報的側面からいえば、たいへん明確なものである。しかし、「ひろげる」行為が公共コミュニケーション的な意味合いを帯び、新たな知の創出をめざそうとする場合には、「つなげる」行為との区別化がきわめて困難になる。そのような前提をふまえ、ここではセンターの広報的側面を中心に評価したい。

「つなげる」ことが、その対象はともかくとして、センターにおいてはアカデミズムを強調する行為であるのに対し、「ひろげる」ことは、アカデミズムの成果を広く一般社会、とりわけ周辺地域に具体的に還元する行為である。センターがこうした活動を持続的に継続し、行事やHAPP企画に代表される多大な成果をあげていることを高く評価したい。ただし、さきにも述べたように「ひろげる」と「つなげる」には侵食しあう部分があるので、成果物を通してその効果を検証する場合には、前もって両者の定義づけを明確に行う必要がある。

(2) 「事業そのものが『ひろげる』という行為」（10ページ、スライド4・5）との考え方に大いに賛同する。そうした前提があるゆえに、センターが主体となって行っている事業については、そのいずれについても「ひろげる」という概念が正しく反映されているという信頼が成り立つ。問題があるとすれば、「知を伝えるだけでなく、事業を実施することが新たな知を獲得する機会となる（10ページ、スライド6）」と報告される項目である。ここでいう「新たな知」とはどのようなレベルの「知」であるのか。報告全体における文脈では「（人類にとっての）新たな知」と理解されるが、例としてのサイエンス・カフェから判断する限りでは「（個人にとっての）新しい知識」もしくは「新たな側面からの既成知識」の獲得のように見受けられる。「つなげる」ことで「新たな知」の獲得は可能であるが、「ひろげる」ことで同じことが

可能かどうかは今後の検討の課題である。

#### (3) A

(4) おそらくここでいう「ひろげる」という行為は「種をまく」「育てる」「知らせる」「支えあう」等のニュアンスを含んだ概念であると想像される。そうした複合的意味をもつ「ひろげる」という表現は、決して不適切なことばではないばかりか、むしろ有用であり、積極的に使用すべきものとさえいえる。「ひろげる」はいわば良質の文化的領土拡張主義でもある。そもそも社会において教養が評価されるのも、個々人の教養を高めることで、社会全体のレベルアップが可能となるからにほかならない。「ひろげる」という概念が社会に受容されるためにもことばの明確な定義づけが必要である。

#### 5.

(1) センターによる「『セクション』から各『事業（プロジェクト）』へ」（12ページ、スライド6）と発展させようとする方針には大いに賛成できる。そうすることにより各事業のより「時代に即したフレキシブルな対応」（12ページ、スライド5）が可能となると同時に、横山千晶センター長のいう「大海原に帆を進める『船』であると同時に人々の集まる『港』にもなりうる」（教養研究センターのリーフレット2ページ）とのことばにおける、各「事業（プロジェクト）」の「船」としての機能が高まると予想される。センターの各事業は知の大海を走る専門学問分野と呼ばれる巨大な戦艦とともに進み、戦艦をより効率よく動かす巡洋戦艦としての「船」の役割をも果たす。

こうした方針において、検討を要するのは「時代に即したフレキシブルな対応」（12ページ、スライド5）の実際的なありかたの問題である。いわゆる社会のデマンドを考察の際の条件とする場合に、必ず問題となるのは、大学が養成しようとする学生（卒業生）のイメージである。「慶應大学はどのような学生を育てたいのか?」「エリート養成大学としての矜持を保とうとするのか?」「ユニバーサル化時代の大学をめざすのか?」などの問いは、慶應大学の教育理念とも関連して、今後、解決すべき問題として立ちはだかる。

(2) FDについては、学内におけるFD知の集積も有益

だが、それ以上に効果的なのは外部との連携である。他大学と協同してFD活動を展開することで所属大学を対象化できるばかりか、他大学との比較を通して所属大学の問題点を明確化することが可能になる。より多くの大学との協働が望ましいが、それ以上に効果的なのが、慶應大学教養研究センターを基幹組織とし、周辺大学の参画を可とするFDリソース・センターの創設ではないだろうか。

(3) センターの「教養」についてのコンセプトおよび提案については全面的に賛成しうるものである。一方、ここで多少なりとも誤解が生じるのは「時代が必要とする『教養』」(13ページ、スライド6)という文言である。学問を、いわゆる「規範的学問」と「記述的学問」の2つに分けた場合、物事のありようを説明する「記述的学問」には「時代が必要とする『教養』」という概念があてはまるが、人間に必要な価値を指し示す倫理学や美学等の「規範的学問」にはあてはまらない。もちろん「なにが正しいのか」「なにが美しいのか」に代表される価値の探求はどのような時代にも必要であり、広義には「規範的学問」もその概念にあてはまるが、新たな知の創出をめざそうとすると、後者はルネサンス的な取り組みとならざるをえない。

(4) A

6.

(1) 報告会でこうした観点をを用いることは組織の構造を明確に説明するうえで有益であるが、導入の際に、どのような活動プロセスから3つの観点が抽出されるに至ったかについての説明も必要である。肯定的評価として、こうした観点を導入することにより、センター組織のありようだけでなく、センター設立の目的、ミッションに至るまで、外部評価のみならず、自己点検・調査の側面からも客観性をもって評価できるのではないかと想像される。

(2) A-

こうした報告会の場合、同じような用語や表現が用いられてはいても、報告者によって意図するところが異なることが多い。今回の報告会では報告者全員の語彙、表現、概念使用、言外の意味に至るまでが見事に調整され、

齟齬をきたすことがなかった。その結果、センターの全体像が評者に正しく映し出され、とりわけセンターの主張する「教養」のありかたとその展開方法が明確に伝えられた。報告会の準備段階において報告者同士の協働作業が適切な方法で、しかも十分な時間をかけて行われたことと推察される。横山千晶センター長のリーダーシップとメンバー教員各自の役割認識が外部からも明瞭にみてとれ、それがセンター運営の確実性にもつながっていると思われる。

(3) 資料を読む限りにおいて年を追うごとにセンターの方針が明確になり、同時に活動の積極性が強まってきている。特に、最近2～3年間の活動は賞賛に値する。こうしたセンターの取り組みは同様の活動をめざす多くの大学の優れた範となるものと確信している。

## 榊原 一 (NHK 放送文化研究所所長)

1.

(1) かつての教養学部、教養科目履修過程で自然に自覚されていた「教養」や「知」に対する欲求・意識が、学生のみならず、社会一般にも希薄化していると思われる。さらに、学部や教授・研究室が個別化細分化し、学際研究、学内連携が困難化する状況にあって、「知」の継承と発展のための再構築と創造をめざす志と、新たな時代の要請を的確に見極めた教養研究センターの目的・ミッションには大いに賛同できる。

(2) 評価できること：

①自己と他者をつなぐことの重視、身体と知を結合させての認識を深める姿勢

②研究、実践、フィードバックの意義と位置づけをはっきりさせようとする努力

③特別講演会、公開セミナーなど、外部・地域との連携、外部への発信の姿勢と努力

課題：

①日吉以外の学(塾)内の認知、理解、コンセンサスが十分ではないように見受けられる

(3) A-

2.

(1) 新しい組織がうまく機能し、活動していくための要件のひとつは、目的に合致した「企画」「方法」を如何に具体的に提示できるかだと考える。

その意味では、アプローチを含め、課題やアイデアを先ず「みいだす」＝「発見し」「引き出す」ことを重視する姿勢は納得できる。

しかし、新しい課題を「みいだす」ことは、その後、どう「つなげる」のか、どう「ひろげる」のかと既に無縁ではなく、そのため、センターの「状況認識」「課題意識」

についての議論、検討作業が最も重要だと思う。

(2) 超表象デジタル研究は予算規模も大きな重要プロジェクトとのことで、新しいシステムで、領域開拓を意欲的に進めて欲しい。今日の学生・研究者が興味をもって参加できることは、成功の条件だと思う。

FD 関連のプロジェクトは方法論自体を含め議論になっているようで、大変苦勞していることが伺える。しかし、教員サポートの方向性が見えてきたという成果も報告され、今後更に期待したい。

(3) A

(4) 「超表象デジタル研究」のデジタル化システムづくりには大きな予算・労力が必要と思われるが、今後のバリアフリーキャンパスの可能性を探るためにも頑張りたい。そして、鍵を握るのはコンテンツ研究ではないか。

3.

(1) 教員組織の閉鎖性、縦割りの弊害について説明を受け、先ず「つなげる」という機能・役割の重要性、切実さを実感できた。

しかし、組織や人をつなげ、専門と専門を結び、大学と社会を繋げていくことは、大学に限らず、最もやりがいのある仕事であり、創造的生産的な役割ではないかと思う。

(2) 基盤研究「身体知プロジェクト」は大変興味を持った。IT化、デジタル化で、社会や学術環境が生身の人間の生理やスピード感覚から距離を持ち始めている。また、反対に、さまざまな研究から人間の身体の未知の可能性が浮かび上がっている。若い学生、研究者が身体性

を通じて知の領域を深めていくことは大変有意義だと考える。

また、「生命の教養学」講座は、大変充実した教授陣で、学生は大変勉強になっていると思う。

(3) A

(4) 「アカデミックスキルズ」はいわゆるマニュアル的なものかも知れないが、高度な学問、研究のための基礎体力を高めるには欠かせない。ここでの成果、ノウハウはぜひ、広く周知公開して欲しい。

4.

(1) 実際には、「つなげる」活動や事業が、「ひろげる」とイコールになることが多いのではないかと思う。説明でもその趣旨が含まれていた。また、事業活動の結果や成果を幅広く学内外に伝えていく機能・役割はもちろん必要である。

特に、「つなげる」と「ひろげる」は十分連携し推進して欲しい。

(2) 事業そのもの、広報、活動結果の公開発信など、いずれも項目立てはよく考えられている。

課題は、説明にあったように、どう伝わっているのか、有効に伝わっているのかの検証につけるのではないか。特に、学生自身に対する効果はよく把握、検証を。

(3) A

(4) 学外への広報・アピールも大切。地域、他大学、マスコミ・メディアなどを積極的に“活用”して欲しい。さらに、受験生へのアピールも。

5.

(1) 初期の5年間は、学内外の関係者や協力者、ボランティアを動員して、意欲的な数々の試みが行われた。その推進には、現行のセクションを中核とした体制が力を発揮したと思う。

改革案は、企画・研究・実践・交流連携・批評というトータルなプロセスを俯瞰できる責任体制の構築と理解する。

時代状況や人的環境を考慮し、柔軟性、即応性に応えようとする見直しは妥当と考える。

(2) 事業案の中で、学びのコンテンツが特に重要ではな

いかと思う。

実施計画の「新しい文学教育」と「現代の危機」「鶴岡セミナー」は、いずれも大変興味深いもので、大いに期待したい。

(3) めまぐるしく変化し、グローバル化し、情報過剰で、様々な格差やストレスを生む現代社会の中にあって、その矛盾や課題を主体的に解決したり、よりよい方向性を導いていける「新たな教養」が求められている。

その基本に「他者や社会とつながる」というコンセプトを打ち出したことは大いに評価できる。

(4) A

6.

(1) 多岐にわたるセンターの理念や事業を短時間で概観し評価するためには、適切な視点だったと思う。研究内容は難しいものも多かったが、活動の全体像、課題のポイントは何とか理解できたように思う。

(2) A-

(3) 大変申し訳ないことですが、卒業生ながら、教養研究センターの存在や活動を迂闊にも知りませんでした。

今回の報告や頂いた資料、何よりも所長はじめセンターの方々の熱意を通して、素晴らしい取り組みをされていることを実感しました。

従来の枠組みや方法論では社会のあらゆる組織が機能しなくなっていますが、大学さえもこうした状況と無縁ではないことが、正直に言って驚きでした。しかし、いろいろ伺った感想は、慶応のこの取り組みは、外から見ると非常に先進的で果敢な試みだと思います。課題は全ての大学の研究・教育の状況に共通するものだと思いますが、そこから、大学教育の根本である「教養」「知」の再生、再構築を、学内の英知とパワーを結集し、外部の様々な力と連携しながら広げていく作業は、確実に大きな成果をもたらすことでしょう。

とりわけ、「世界」の現状をしかと見据え、最も未知なる宇宙「身体性」や「心」の領域を重視する姿勢には共感しました。「生きている社会」とどう関るかは根源的な課題です。

研究者や組織の縦割硬直化の問題や、デジタル化 IT 社会のもたらす人間性、身体性への負の側面は、今後、

社会全体が解決すべき大テーマです。

この挑戦のしがいのある課題・命題に教養センターは自信をもって進んでいってください。

日本の大学と教育界にも一石を投じることが出来ると信じています。ご健闘を祈ります。

## 菅原幸子（財団法人横浜市芸術文化振興財団支援協働グループグループ長）

1.

(1) 教養教育を専門教育の導入ではなく、新しい知の創出の場と捉え、多くの教職員が研究・調査活動を行い、新しい体系やプログラムを開発しようとしていること、またその中で社会との連携や交流を目指している点で、適切である。

(2) 出版物やホームページなどアーカイブが非常に充実していて、研究・教育活動の蓄積に力を入れている姿勢が感じられた。アーカイブの充実は、そのまま優れた発信性につながり、連携・交流を促進するものとなる。

(3) A-

アーカイブは充実しているものの、教養研究センターの設置目的といった根本的な事項に関しては、その説明の仕方（リーフレット、ホームページ等）に少々分かりにくい点があり、外部まで含めて十分な情報発信とその共有化が達成できているとはいえない感がある。

2.

(1) 報告会で「新しいアプローチ、新しい課題、新しいアイデアの発見の必要性」が示されていたが、そういったものや潜在的な人材への気づきのためには、大規模でかつ縦割り組織の場合、プラットフォーム的な場が必要になると考えられる。教養研究センターはそのような重要な機能・役割を果たしている。

(2) 国内外の大学の視察やヒアリングなど、また研究活動への取り組みと成果の発信など、精力的に取り組んでいる。

(3) B

(4) (1) で触れた「発見の場」としてのプラットフォーム

的機能については、教養研究センターに日常的に関わる教員や学生の人数の多寡や、使い方が大きく影響すると思われるので、そういった点も評価対象となると考えられる。

3.

(1) 「みいだす」項で述べたように大規模で専門化、縦割り化が定着している組織においては、教養研究センターにプラットフォーム機能が必要であり、そこが基盤研究プログラムを持っていることで、多くのつながりの創出に寄与している。

「教員サポート」については、プログラムが少ないように感じる。発達障害への対応や教員のメンタルヘルスの問題など新しい課題はどの社会・組織においても共通であり、そのための支援プログラムや日常的なサポート機能の必要性は高いように感じる。

(2) 基盤研究「身体知プロジェクト」について：

大学の教養課程がさまざまなアートの実体験の場を、正規の授業化を目指して研究の対象としていること、またそれを通して、学びの基礎ともいえるコミュニケーション力、課題解決のための創造力、自己との対話力の育成を目指している点が素晴らしい。

またこの実験事業実施までの間に、教職員と学生が共にワークショップを体験したことなどが記録に残っているが、その中でも細やかな振り返りを行っており、そういった積み重ねがその後のプログラムの充実につながっている。

「アカデミック・スキルズ」：

参加学生が少ないためか、報告会ではやや消極的な自己評価をされていたが、学生のアンケートの満足度および具体的な感想からも有効なプログラムであったことが伺える。初年次の学生にとっては、このようなプログラムを通して「学び方を学ぶ」ことも必要なのではないかと考える。

(3) A-

(4) 「身体知プロジェクト」については、これまでの活動記録を若いアーティストたちに広く発信し、新しい人材の発掘やコラボレーション機会の創出につなげ、教養研究センターモデルとして発展させていただきたい。

4.

(1) 一般公開型プログラムは、多くの大学が「地域貢献」や「開かれたキャンパス」を目指して取り組んでいるが、教養研究センター主催の公開講座も多彩なテーマや講師を取り上げ、地域にとって「街の文化拠点」的な機能を果たしている。

(2) 「サイエンス・カフェ」

大学の一般公開講座が社会人を対象にしたものが多い中、親子で参加できるプログラムであり、カフェ形式で敷居が低く、気軽に参加できる雰囲気を感じた。また、講師にとっては、自身の専門的な研究を子どもを対象に分かりやすく伝える工夫を通して「教え方のトレーニングになっている」という成果も伝えられ、「ひろげた」効果と言える。

(3) B

情報発信の軸となるホームページについては、教養研究センターのホームページの対象者をどのように捉えるかにもよるが、公開講座情報も掲載しているのであれば、学外の人が見ても分かりやすい工夫（教養研究センターやこのホームページの役割に関するコメント、タイトルとPDF間を橋渡しするような簡単なコメント、一般参加や子ども向けイベントであることがトップページでも分かるような表記など）が必要と考える。

(4) 地域にひろげることを推進していくのであれば、日吉キャンパスに一般の人を呼び入れるだけではなく、キャンパス外にも活動の場をつくることも有効ではないかと考える。日吉の商店街や区内の公共施設など、いくつかのフィールドワーク型の事業も行われているが、このような実社会とつながりを持てる事業を1、2年次の学生が経験できるのは貴重なことである。

5.

(1) 「新しい組織づくりの必要性」として挙げられている事項については、いずれも適切である。これらに適宜対応し、推進していくための運営体制の検討が必要。提案制度などは、フレキシブルな対応を取ることで、より多くの提案を集めることにつながる。機動性を伴った組織であってほしい。

(2) 報告会では実際のプログラムというよりは、新しい

システム案が提示されていたため、具体的なイメージを持つには至らなかった。

一貫校、複数のキャンパス、さまざまな研究機関、そして豊富な人材を抱える慶應義塾においては、学内の連携そのものが多くの可能性を持つと考える。教養研究センターの新しいシステム（事業）を通じて、その連携が実現し、強化されることが望ましい。

(3) 大学の教養教育は、現代社会の複合的な問題と向き合い、自ら課題を解決していくための基礎を培うものであると考える。そのためにアートや地域活動など様々なツールを利用したプログラムを展開すると共に、新たなテーマとして「他者とつながる、社会とつながる」を掲げることは適切である。

(4) B

6.

(1) 3つのキーワードを使って報告していただいたことで、教養研究センターの目的とその目標が理解しやすくなったと感じた。こういった分かりやすさは、「組織のミッション」といったようなやや抽象に傾きがちなものイメージを共有化するためには有効であると考えます。

(2) A-

(3) HAPP や公開講座、身体知プロジェクトなどに起用している外部人材も各界を代表する多彩なラインナップで、慶應義塾の豊富な人脈が反映されている。

アートの分野に限らず、研究機関、企業、行政そして地域など多くの外部組織が連携・交流のパートナーとして慶應義塾大学の日吉キャンパスに期待するところは非常に大きい。より多彩なパートナーをみいだし、連携による相乗効果につなげ、地域のよりどころとしての存在意義をひろげていただきたい。

## 日比谷 潤子（国際基督教大学教学改革本部長）

1.

(1) ミッション1～4を見ると、このセンターは「教養教育に関する研究を推進するところ」と理解される。ミッ

ション3には「教養教育について積極的な提言を行います。」という文言が含まれてはいるが、このセンターの活動が全学的な教養教育に真の意味で積極的な貢献をするためには、「教養教育のカリキュラムをいかに具体化するか」がミッションにおいて明確に打ち出される必要があるのではないかと。

(2) 種々の取り組みの根源に、学部・分野が分断されていることについての自覚が存在することは評価できる。

(3) B

教養教育カリキュラム構築との関係がもう少し明確であれば、A-としたいところだが・・・

2.

(1) 個別の専門を超えた、その向こうにある教養をみいだし、そうとする姿勢は評価される。

(2) FD 関連プロジェクトがあげられていたが、全学的なFD活動との関係が不明確である。

(3) B

基盤研究「大学カリキュラム研究」を通じて、個々の教員が具体的な教育改善に意欲をみせていること、縦割りの強い組織の中で多少の楔を打ってきたと自負していること、は肯定的な成果である。

(4) 新しいアプローチ、新しい課題、新しいアイデアを、単に「みいだし」だけでなく、それを全学に発信していく枠組みを構築すべきである。

3.

(1) 「なぜ、つなげるのか？」で示された問題意識は評価できる。

(2) 身体知プロジェクトで身体性を通して理解、思考することの重要性を求めている点は、非常に興味深い。

(3) B

最後に課題として挙げられた「カリキュラムの漸進的な改革の実現」は、「漸進的」ではなく急務ではないか？

(4) 「アカデミック・スキルズ」など、個々の事業には見るべきものがある。これをより一般化するための方策を検討すべきである。

4.

(1) 大学の内と外を結びつける機能をさらに強化すべきである。

(2) 「サイエンス・カフェ」は有意義な試みである。

(3) B

発信の成果がどの程度達成されているか、多角的な検討が必要である。

(4) 「サイエンス・カフェ」等を通じて大学に目を向けた人々（とりわけ、子ども）が、さらに深くセンターや大学と関わっていくための方策を講じられたい。

5.

(1) 何よりも、センターが大学全体の中で占める位置について、明確にすべきである。センターからの提言を大学が吸い上げることを可能にする組織づくりを目指してほしい。

(2) 予定されている事業はいずれも興味深いものだが、より多くの学生や教員が、これらに直接触れるにはどうしたらいいか、工夫が必要である。

(3) 4年間を見越した「教養」を模索している点は評価できる。それを実現する具体的な方策を検討することが今後の課題であろう。

(4) B

6.

(1) センターの活動と報告に一貫性があり、よい試みである。

(2) よく準備されており、また印刷物等も自由に見ることができてよかった。

(3) 活動報告会で繰り返し出てきたことばは、「縦割り」「閉鎖性」「分断」「タコソボ」であった。また、最新ニューズレター（11号）の巻頭言には「学部を越えて共通科目の内容を論じる場がないことは、新制大学以降、さらには大綱化以降も設置されず今日に至っています。この問題を議論できる場をつくり、各学部の垣根を低くすることで、学部間の共通単位認定、副専攻制などの新しい制度をつくり出すことが可能となってきます」と書かれている。このような問題意識を持ち、打開を目指そうとする姿勢は高く評価されるが、座談会にも出てくる「融

合・複合という視点」から、大学全体を動かす組織となりうるかは、依然として未知数だとの感を強く受けた。

冒頭の所長報告にもあったように、センターの活動は基本的にボランティア精神によって支えられている。意欲のある人々が、強制されることなく、自主的に活動することには、確かに多くのメリットがある。しかしながら、一部のボランティアによる活動を全体に広げていくのは、とりわけ大きい大学では至難の業であろう。今のままで、大学全体を動かすことが本当にできるのだろうか。

一部の人しか関わっていないという問題点は、学生の側から見ても同様である。例えば、アカデミック・スキルズの履修者は30～50名だが、これは全学生数を考えればごくごくわずかである。当日配布された学生アンケートにも、受講した学生自身が、少数のやる気のある人だけが履修していたからよかったと書いている。

報告会で提示された「教養→専門→教養」、「4年間を見越した教養教育」といった枠組みは、リベラルアーツの目指すべき姿を示している。その実現には、三田・矢上・信濃町・SFCとの有機的な連携が不可欠であろう。学部共通カリキュラム検討委員会が視野に入れるべきは、4年間全体、全キャンパスではないか。ニューズレター（4号）には、センターには権限がないと書かれている。この状況を打破し、センターの提案するカリキュラムを正規授業に組み入れる努力が必要である。慶應義塾大学において、リベラルアーツがコアの少なくともひとつになるかどうかは、この点にかかっているのではないかと



# 資料編

## 慶應義塾大学教養研究センター活動概要

学フ(2002～2004年度): 学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」 学フ(2005～2007年度): 学術フロンティア「超表象デジタル研究」

		2002年度		2003年度		2004年度	
		日付	内容	日付	内容	日付	内容
会 議	運営委員会	7/24 3/12		9/27 3/12		9/13 3/16	
	全体会議			4/8		4/7 9/27	
	研究企画ボード会議	隔週開催		原則として月2回開催(8月・9月・2月は1回)		原則として月2回開催(8月・9月・2月は1回)	
	調査・研究セッション会議	半年4回		8回		6回	
	交流・連携セッション会議	1回		年3～4回		年3～4回	
	広報・発信セッション会議	半年6回		年3～4回		1回	
行 事	セミナー			10/9	アメリカの授業運営・FD事例の報告	5/17	『大学評価』とFD活動
				10/30	『学生による授業評価』とFD活動-シラバスと授業評価・SFCにおける12年の推移	6/21	カリキュラム改革の今後の方向性とFDについて
				12/04	我が国の大学の欠陥-解消の一方法としてのG.P.A制度-	3/29	ヨーロッパの大学改革と日本の大学
	シンポジウム	9/30	教養教育をめぐって	7/4	自然科学系を核とした教養教育の将来	10/8	古典を核とした教養教育の将来
		2/5	外国語教育を核とした教養教育の将来	11/26	身体知を核とした教養教育の将来	12/8	少数セミナー形式授業の理念・目的とその手法
	ワークショップ					5/14-12/10 全5回	学フ「教養のための映画上映会2004」
						10/29	双方向授業を目指して-携帯電話によるアンケート・小テストの実施
						12/20	ことばにつばさを-ドラマクラスと教育の身体アプローチ
教員サポート							

資料1

2005年度		2006年度		2007年度	
日付	内容	日付	内容	日付	内容
10/14 3/16		9/19 3/14		10/23 3/12	
4/6		4/7			
原則として月2回開催(8月・9月・2月は1回)		原則として月2回開催(8月・9月・2月は1回)		原則として月2回開催(8月・9月・2月は1回)	
2回		2回		—	
2回		2回		—	
1回		1回		—	
11/1	ゲーテの『ファウスト』と脳内人口操作-21世紀における新人類「ホムンクルス」-	6/23	学フ 軽度発達障害の世界を知る <sup>1</sup>	6/15	学フ 軽度発達障害の世界を知る <sup>5</sup>
11/10	『構造的教授法』-テーマ発見と書く能力 ドイツケルン大学ライティングセンターの挑戦-	7/7	学フ 軽度発達障害の世界を知る <sup>2</sup>	10/12	学フ 軽度発達障害の世界を知る <sup>6</sup>
11/11	敵か見方か-ロボットをめぐる文化-	7/20	ミシェル・フーコー使用法		
3/17	学フ 導入教育の役割とコア・カリキュラムの構築	10/20 12/16	学フ 軽度発達障害の世界を知る <sup>3</sup>		
		1/12	学フ 軽度発達障害の世界を知る <sup>4</sup>		
		3/13	教養教育とは何か-スタンフォード大学の取り組み-		
7/16	日吉設置学部総合教育科目の現状と問題点			6/30	慶應義塾大学の教育カリキュラム研究-改革への処方箋-
1/7	学フ 専門教育から見た教養教育の現状と課題				
3/15	学フ 法の中の教養/教養の中の法				
10/11	ディスカッションをいかにファシリテートするか	9/21	学フ フィールドワークを考える		
		1/23	学フ 発達障害を抱える学生への関わり方	6/20 6/25	メディアリテラシー
				11/13・11/16	フィールドワーク
				11/27	メディアリテラシー
				12/12・12/17	Keio.jp活用法

		2002年度		2003年度		2004年度	
		日付	内容	日付	内容	日付	内容
行事	講演会						
	勉強会	10/10	科研費	10/2	科研費	10/6	科研費
	公開講座	10/4-12/13 全9回	『教養』とは何か-よりよく生きるために	9/20	実践講座 DNAとナイロンの実験をしてみよう	10/16-12/18 全10回	21世紀の私たち-思想・身体・表象・環境・社会・民族
		11/2 11/9 11/16	実践講座 ウォーキングの理論とその文化的背景	10/7-12/16 全10回	生命の魅惑と恐怖-生命にまつわる多彩な知をめぐって	10/22-12/22 全5回	学フ「心と体のウェルネス」
				10/16	H・アール・カオス公演	2/1	色と紋様の総合科学-異分野からのアプローチ
	サイエンス・カフェ						
	パネル展示			4/25-5/17	学フ「超表象デジタル研究センター」中間発表パネル展示会1	1/18	21世紀の商店街
				8/19	学フ「超表象デジタル研究センター」中間発表パネル展示会2	3/8-4/13	学術フロンティア
	報告会			1/24	学術フロンティア	12/6	学術フロンティア
	事業公募					4/5 5/28	<新しい教養授業の支援>公募
						7/14	採択
	開かれゆくキャンパス			12/12	国際学生懇談会in Hiyoshi-海外留学生から学んだこと	3/26	21世紀の商店街

資料1

2005年度		2006年度		2007年度	
日付	内容	日付	内容	日付	内容
7/4	安西塾長・遠山敦子「教養教育の将来を見据えて」	7/26	OpenSecret 公然の秘密	5/25	学フ フィールドワークの現状と課題
10/15	大学評価と質保証政策の国際的動向	10/17 10/20	クリスト・ジャンヌ＝クロードビデオ上映会	6/13	学フ 学塾としての慶應義塾2
		10/24	千住博氏 芸術とは何か？－クリスト・ジャンヌ＝クロードの魅力	7/6	学フ 学塾としての慶應義塾3
		10/26	学フ 学塾としての慶應義塾1	10/10	学フ 学塾としての慶應義塾4
		10/30	クリスト・ジャンヌ＝クロード講演会	12/13	学フ 学塾としての慶應義塾5
				12/18	学フ 学塾としての慶應義塾6
10/3	科研費				
10/1-12/3 全10回	創作とメディア	6/9	“生きている”を見つめ“生きる”を考える	9/29-12/8 全10回	モノを創る
		9/30-12/2 全10回	自然と科学と人間	11/14-1/16 全4回	アートで体をひらく、心をひらく
		9/29-1/12 全8回	体をひらく、心をひらく		
				6/23	クマシの世界
				9/1	小さなクラゲの世界
				11/10	コケを探して：フィールドサイエンスの愉しみ
12/20・21	HRP：2004センター活動報告	6/26-7/7	SWITCH展		
		8/3-31	“見る・観る・診る”の生命誌		
		10/17-10/30	クリスト・ジャンヌ＝クロード作品ポスター展		
			HRP：2005センター活動報告		
12/22	学フ「コミュニケーションキャンパス構築研究グループ」	4/22	学フ 成果報告会	4/28	学フ
4/12 6/3	公募	4/12 6/3	公募		
12/3	報告	12/2	報告		
12/17	学生フォーラム「感動する大学を作るために」	12/16	日吉キャンパス・タウンミーティング		
12/20	21世紀の商店街Ⅱ	2/4	一貫教育の冒険2「福澤諭吉の手紙朗読会」		
1/29	一貫教育の冒険1「福澤諭吉の手紙朗読会」				

		2002年度		2003年度		2004年度		
		日付	内容	日付	内容	日付	内容	
H A P P (日吉行事企画委員会)	コンサート	4/17	新入生歓迎コンサート「春の声」	4/15	春の声	4/8	二胡(胡弓)レクチャー・コンサート	
				5/28	シャンソンの贈り物			
		6/8	フルートとチェンバロ			4/14	春の声(オペラコンサート)	
		12/18	慶應コレギウム・ムジクム					
		1/14	マサラ					
	能・舞踏	5/8	清経	5/21	葵上	4/28	魂の旅	
				6/18	舞踊公演「野の婚礼ー新しき友へ」	5/26	善知鳥	
	学生企画	5/30-6/2	「衝 うずき」	11/13-11/14	「Weather map」天気をテーマにした音楽・映像の複合ライブ	10/22-10/23	SEASONS:空間・音楽とコンテンツボラリー・ダンスによる時間の表象	
		6/11	「ネクスト・エイジャー」音と映像	12/5-12/6	「色即是空」マジック・ジャグリング	10/23	大画面ハイビジョンで見る南極大紀行	
		6/27-30	「月はやっと止めることができた」	12/19-12/20	「Arai」イメージと現実・写真/映像をめぐるシンポジウム	11/5-11/6	幽庭ーかすかばー(学生のみによる総合芸術企画)	
		11/7-11/9	「DEJAVU」From B			11/12-11/13	弾めば、心も弾む！ートランポリン・エキジビションとトランポリン体験教室ー	
						12/3-12/4	色即是空2 CONTRAST(マジック、ジャグリング等のショー)	
		塾長と日吉で語ろう				4/21		
		塾長と森を歩こう	4/27		12/6		5/8	
	その他公募企画 行事・特別企画	4/18-4/27	デカルコマニ 展示とライブ	6/16-6/21	環境週間	5/11	環境問題を諸視点から考えよう	
		7/28	フットサル	6/20	小松原庸子講演会「スペイン・フラメンコ・わが人生」	6/4	「色眼鏡なしに世界は見えない」ー日高敏高氏と語ろうー	
				7/12-7/13	フットサル	6/21	環境週間(環境サークルECO共催)	
				12/1-12/6	「筆遊び彩書」			
				12/13	法学部・英語インテンシブコースドラマ公演			

資料1

2005年度		2006年度		2007年度	
日付	内容	日付	内容	日付	内容
5/10	ジョン・チャヌ「愛」のコンサート	4/21	春の音連れ——表象として「フランス流花鳥風月」	6/19	「インド音楽のタベ」
5/24-6/8(全4回)	ポジティブ・オルガンとチェンバロによる鍵盤音楽フェスティバル			6/25-7/4	「フランス音楽祭」～初夏の演奏会シリーズ～
4/26	天鼓 弄鼓之舞	5/10	舞踏公演「記憶の海」		
5/18	舞踏公演『幻容の道』	5/16	能「隅田川」		
10/7	ママ・カクマ——難民キャンプから聞こえる詩	10/25.26	“A Piece of Peace” by Project Smile in Cambodia	9/26-9/29	フォルモサ！
11/28	劇『夏の夜の夢』	11/9-11/11	シンキロード“THE WORLD OF CONTEMPORARY BELLY DANCE”	9/29-10/29 全5回	Media tooooo Real
11/28-12/1	展示・講演会「日吉図書館開館20年—建築家“榎 文彦”と慶應義塾の建築物」	11/13-11/18	プロジェクト・エフ ～映像におけるエフェクトの世界～	11/16	音の紡ぐ旅路 —勝井祐二×迫田悠Duo—
12/2	戯曲『異郷の恋』				
12/9-12/10	マジックの美術館 Act Museum				
4/13		4/19			
5/7		4/19		12/15	
5/12	講演会「ハリー・ポッターの魔法とは！？」	4/24	イタリア語通訳・翻訳者 田丸公美子講演会「言語でかける橋～グローバル社会における通訳という仕事～」	4/25	江戸古典奇術 手妻のタベ
6/20-6/25	環境週間	5/30	千住明講演会	5/10	林望氏講演会 「英語で暮らしてみました」
		6/21	小松原庸子講演会	6/18-6/22	環境週間
		6/22.30 7/7.12	モーツァルト・フェスティバル—モーツァルト生誕250年記念企画	10/12	小栗康平監督 最新作の上映と対談
		6/22-7/12	環境週間	11/10	来往舎・秋・空・響：入江要介(尺八)、鮎沢京吾(三味線)リサイタル
				11/8	狂言ブート・キャンプ～笑いの古典を体験～

2008. 3. 8

## 慶應義塾大学教養研究センター 刊行物

種類	号	表題	発行年月日
センター・パンフレット		慶應義塾大学教養研究センター Keio Research Center for the Liberal Arts	2002.8.1
		慶應義塾大学教養研究センター Keio Research Center for the Liberal Arts	2005.7.1
		Keio Research Center for the Liberal Arts (English)	2006.3.1

活動報告書		2002年度活動報告書	2003.7.31
		2003年度活動報告書	2004.7.15
		2004年度活動報告書	2005.8.31
		2005年度活動報告書	2006.7.31
		2006年度活動報告書	2007.7.31

“Newsletter”	1		2003.1.31
	2		2003.7.15
	3		2004.1.15
	4		2004.7.15
	5		2005.1.15
	6		2005.7.15
	7		2006.1.25
	8		2006.7.20
	9		2007.1.16
	10		2007.7.10
	11		2008.1.15

センター選書		モノが語る日本の近現代生活 —近現代考古学のすすめ—	2004.3.31
		ことばの生態系 —コミュニケーションは何でできているか—	2005.3.31
		「ドラキュラ」からブンガク —血、のみならず、口のすべて—	2006.3.31
		アンクル・トムとメロドラマ —19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会—	2007.3.30
		(該当なし)	(2007年度)

種 類	号	表 題	発行年月日
その他の書籍		「教養」を考える ―現代を読みとくために	2003.9.30
		スタディ・スキルズ Teacher's Manual	2005.3.31
		アカデミック・スキルズ ―大学生のための知的技法入門	2006.10.20

CLA-アーカイブズ	1	ヨーロッパの大学改革と日本の大学<M. ヴァーラス>	2005.3.31
	2	2005年度基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」 講演記録集1 <遠山敦子、安西祐一郎ほか>	2006.1.31
		3	
	4	FDを考える6 構造的教授法 ――テーマ発見と書く能力 ドイツ・ケルン大学ライティング・センターの挑戦―― <H. エッセル ホルン・クムビーク>	2006.3.31
	5	敵か味方か ――ロボットをめぐる文化―― <H. エッセルホルン>	2006.3.31
	6	2005年度基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」 講演記録集2 <米澤彰純、高橋義人>	2006.3.31
	7	2005年度基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」 講演記録集3 <境 一三、小尾晋之介>	2006.3.31
	8	2006年度公開セミナー ミシェル・フォーコー使用法 <F. アルティエールほか>	2006.12.15
	9	(編集中)	
	10	FDを考える7 大学の人文学に未来はあるか <H. U. ゲンブレヒト>	2007.3.30

生命の教養学シリーズ		生命の教養学へ	2005.2.28
		生命の教養学 ―ぼくらはみんな進化する？	2006.10.30
		生命と自己 ―生命の教養学Ⅱ	2007.4.10
		生命を見る・観る・診る ―生命の教養学Ⅲ	2007.9.20

学術フロンティア推進事業 研究成果報告書	1	表象文化に関する融合研究 総括	2005.3
	2	表象文化に関する融合研究 総合研究	2005.3
	3	表象文化に関する融合研究 総合研究	2005.3

種 類	号	表 題	発行年月日
	4	表象文化に関する融合研究 融合研究	2005.3
	5	表象文化に関する融合研究 言語知重点研究	2005.3
	6	表象文化に関する融合研究 文化知重点研究	2005.3
	7	表象文化に関する融合研究 身体知・科学知重点研究	2005.3
学術フロンティア関係		「温故知新」型「日本の教養」研究グループ 法の中の教養／教養の中の法	2006.3.31
		「温故知新」型「日本の教養」研究グループ 専門教育から見た教養教育の現状と課題	2006.3.31
		「温故知新」型「日本の教養」研究グループ ワークショップ フィールドワークを考える——今後の授業展開に向けて	2007.3.1
		「温故知新」型「日本の教養」研究グループ 学塾としての慶應義塾1 慶應義塾入門—SFCの試み	2007.3.31

基盤研究報告書		2004年度報告書 日吉設置学部共通総合科目の現状と問題点 ——将来への提言を含めて——	2005.3.31
		2005年度報告書 慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 中間報告書	——
		2005～2006年度報告書 慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 ——改革への処方箋——	2007.3.30
		2007年度報告書慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 勉強会中間報告書	2008.3.31(予定)

シンポジウム報告書	1	開所記念シンポジウム 教養教育をめぐって	2002.11.15
	2	外国語教育を核とした教養教育の将来	2003.3.31
	3	自然科学を核とした教養教育の将来	2003.9.30
	4	身体知を核とした教養教育の将来	2004.2.4
	5	古典を核とした教養教育の将来	2004.12.15
	6	少人数セミナー形式授業の理念・目的とその手法	2005.2.24
	7	日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 ——将来への提言を含めて——	2005.10.28
	8	シンポジウム8 慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 ——改革への処方箋——	2007.9.30

種 類	号	表 題	発行年月日
レポート FDを考える	1	アメリカの授業運営	2003.12.1
	2	「学生による授業評価」とFD活動	2003.12.25
	3	わが国の大学の欠陥	2004.3.15
	4	「大学評価」とFD活動	2004.6.15
	5	カリキュラム改革の今後の方向性とFDについて	2004.9.30
レポート FDワークショップ <sup>o</sup>	1	双方向授業を目指して	2005.1.21
	2	ことばにつばさを ドラマクラスと教育の身体アプローチ	2005.3.31
	3	教授法の学習方法としてのSGDの可能性	2005.12.21
レポート 開かれゆくキャンパス	1	国際学生懇談会 in Hiyoshi	2004.3.31
	2	21世紀の商店街	2005.3.31
	3	学生フォーラム「感動する大学を作るために」	2006.3.31
	4	21世紀の商店街Ⅱ	2006.3.31
	5	平家物語群読会	2006.3.31
	6	日吉キャンパスタウンミーティング	2007.3.30
	7	福澤諭吉の手紙 朗読会	2007.3.30
カタログ 来往舎現代藝術展	1	和田みつひと green/green	2005.3.31
	2	金沢健一 響きの庭—目で聴く音、耳で見る形—	2006.3.31
	3	SWITCH	2007.3.30
学生論文集		2004年度スタディ・スキルズ学生論文集	2005.3.31
		2005年度アカデミック・スキルズ学生論文集	2006.3.31
		2006年度アカデミック・スキルズ学生論文集	2007.3.30
		「21世紀の商店街」学生レポート集	2005.1.18
		「21世紀の商店街」学生レポート集	2005.12.20

(2008.3.8)

## 2002年度極東証券寄附講座「生命の教養学」

## 「教養」とは何か ―よりよく生きるために―

日 程	氏 名	所属・職名	演 題
10月4日	川勝 平太	国際日本文化研究センター教授	新しい国づくりに求められる教養とは何か
10月9日	椎名 武雄	日本IBM最高顧問	私にとって教養とは
10月15日	荻野アンナ	慶應義塾大学文学部教授・作家	耕す人になるために
10月21日	上野 健爾	京都大学教授	数学的思考と教養
10月28日	松永 信雄	外務省顧問	現下の国際情勢とこれからの日本
11月6日	立花 隆	ジャーナリスト	教養は何のために必要なんですか？
11月13日	坂上 弘	作家	「教養する」現代人像
11月27日	湯川 武	慶應義塾大学商学部教授	「教養」とは…歴史と文明の観点から
12月5日	H. J. クナウプ	慶應義塾大学経済学部教授	外国語教育は教養教育に貢献できるか ―ドイツとの比較考察を通して―
12月13日	羽田 功	慶應義塾大学経済学部教授	シンポジウム
	湯川 武	慶應義塾大学商学部教授	
	荻野アンナ	慶應義塾大学文学部教授・作家	
	坂上 弘 ほか	作家	

## 2003年度極東証券寄附講座「生命の教養学」

### 生命の魅惑と恐怖 —生命にまつわる多彩な知をめぐって—

日 程	氏 名	所属・職名	演 題
10月7日		ガイダンス	生命をさまざまに考えることから始めてみよう
10月14日	武藤 浩史	慶應義塾大学法学部教授	生きろって言われても—シニカルでリズムカルな私たちへ
10月21日	西村 由貴	慶應義塾大学保健管理センター助手	反抗前後の精神状態—正常か異常か？
10月28日	識名 章善	慶應義塾大学商学部教授	ナチズムと身体—優性学とユートピア？
11月4日	棚橋 訓	東京都立大学助教授	性の魅惑、性の恐怖—現代日本文化をめぐって
11月11日	井田 良	慶應義塾大学法学部教授	生命の法的保護をめぐる諸問題
11月18日	小泉 義之	立命館大学教授	二つの生権力——ホモ・サケルと怪物
12月2日	小松 美彦	東京水産大学教授	バイオエシックスは死生をどう捉えてきたのか
12月9日	竹内 勤	慶應義塾大学医学部教授	新興・再興感染症の今日的意味
12月16日	室井 尚	横浜国立大学教授	情報と生命——生き物として輝くために

## 2004年度極東証券寄附講座「生命の教養学」

### 僕らはみんな進化する？

日 程	氏 名	所属・職名	演 題
9月30日	金子 洋之	慶應義塾大学文学部助教授	イントロダクション（進化の俯瞰図）
10月7日	阿形 清和	理化学研究所 発生・再生科学 総合センター 進化再生研究 グループ長	脳・神経系の進化
10月14日	澤口 俊之	北海道大学大学院医学研究科 教授	脳の高次機能の進化
10月21日	団 まりな	階層生物学研究ラボ 責任研 究員	性の進化1
10月28日			性の進化2
11月4日	和合 治久	埼玉医科大学短期大学教授	免疫の進化1
11月11日			免疫の進化2
11月25日	武藤 浩史	慶應義塾大学法学部教授	文系的進化論（言語・進歩・進化）
12月2日	鈴木 晃仁	慶應義塾大学経済学部助教授	進化論と医学1
12月9日			進化論と医学2
12月16日	小川眞里子	三重大学人文学部教授	進化論とダーウィンの時代
1月6日			『種の起源』の科学史
1月13日	まとめ：コーディネーター4人と学生との質疑応答		

## 2005年度極東証券寄附講座「生命の教養学」

### 生命と自己——今、「自分」が、「生きている」、とは？

日 程	氏 名	所属・職名	演 題
4月21日	養老 孟司	北里大学教授	生命と脳と自己
4月28日	河本 英夫	東洋大学教授	生命の自己制作（オートポイエーシス）
5月12日	中島 陽子	慶應義塾大学文学部教授	生物学的自己—遺伝子/神経系・内分泌系・免疫系
5月19日	秋田 光彦	大連寺住職	アート・いのち・仏教
5月26日	斎藤 環	精神科医師	生命と表現—リアルとは何か—
6月2日	安藤 寿康	慶應義塾大学文学部教授	心も遺伝的である
6月9日	石原あえか	慶應義塾大学商学部助教授	自然研究者としてのゲーテ 近代ドイツ文学と科学
6月16日	椿 昇	京都造形芸術大学教授	アパルトヘイト・ウォールとパレスチナ—傍観者から当事者へ—
6月23日	安西祐一郎	慶應義塾長	生命と認知
6月30日	池内 了	早稲田大学教授	宇宙史における生命
7月7日	前野 隆司	慶應義塾大学理工学部助教授	ヒトとロボットの心
7月14日	まとめ		

## 2006年度極東証券寄附講座「生命の教養学」

### 生命を見る、観る、診る

日 程	氏 名	所属・職名	演 題
4月13日	オリエンテーション		
4月20日	蟻川謙太郎	総合研究大学院大学教授	動物の見る世界を探る
4月27日	岡 浩太郎	慶應義塾大学工学部教授	細胞の情報伝達を見る
5月11日	柳沢賢一郎	柳沢情報科学研究所所長	踊れば生命が見える
5月18日	黒岩 常祥	立教大学理学研究科教授	細胞誕生の謎を解く—ゲノムの完全解読から核の戦略を読む—
5月25日	中島 陽子	慶應義塾大学文学部教授	「見る」ことの生物学
6月1日	北岡 明佳	立命館大学文学部教授	錯視デザインと生命
6月8日	添田英津子	慶應義塾大学病院 移植コーディネーター	Gift of Life (「生命」の贈り物) —移植医療の現状—
6月9日	中村 桂子	JT生命誌研究館館長	【特別公開講座】“生きている”と“生きる”を考える——生命誌の視点から
6月15日	下村 裕	慶應義塾大学法学部教授	たまごを回して観ると？
6月22日	石原あえか	慶應義塾大学商学部助教授	人体情報の記録——近代ヨーロッパおよび日本における解剖図・標本・立体模型
6月29日	堀 由紀子	新江ノ島水族館館長	命のつながり ～海と命～
7月6日	大野 裕	慶應義塾大学保健管理センター教授	自殺対策プロジェクトについて
7月13日	総 括		

## 2007年度極東証券寄附講座「生命の教養学」

### 誕生と死——その間にいる君たちへ

日 程	氏 名	所属・職名	演 題
4月19日	波平 恵美子	御茶ノ水女子大学名誉教授	命の文化人類学
4月26日	日野原 重明	聖路加国際病院理事長	子どもへのいのちの教育
5月10日	松原 洋子	立命館大学大学院先端総合学術研究科教授	優生学と生命倫理
5月17日	对本 宗訓	帝京大学医学部附属溝口病院研修医	僧医という視座より
5月24日	吉村 泰典	医学部教授（産婦人科学）	生殖医療と生命倫理
5月31日		（休講）	
6月7日	堀 進悟	医学部救急部准教授	Basic Life Support と 塾BLS教育について
6月14日	松本 緑	理工学部生命情報学科准教授	生物たちの生殖戦略
6月21日	鈴木 忠	医学部専任講師（生物学）	クマムシの生き方
6月28日	田沼 靖一	東京理科大学薬学部教授	死の遺伝子からの問いかけ
7月5日	吉田 泰将	体育研究所准教授	体験！ 救命救急・CPR+AEDの実際
7月12日	武藤 浩史	法学部教授	井戸の中から—村上春樹と『ピーターパン』

## 2003年度 スタディ・スキルズ I 履修者数

		文学部	経済学部	法学部(法)	法学部(政)	商学部	理工学部	環境情報学部	合 計
秋学期	火・6 スタディ・スキルズ I (「身体/感覚 文化」とのセット)	10	3	0	0	1	0	0	14
	火・6 スタディ・スキルズ I (「生命の魅惑と恐怖」とのセット)	5	6	1	0	3	4	1	20
計		15	9	1	0	4	4	1	34

「火・6」は火曜日 6 時限

## 2004年度 スタディ・スキルズ I / II 履修者数

		文学部	経済学部	法学部(法)	法学部(政)	商学部	理工学部	看護医療学部	合 計
春学期	水・5 スタディ・スキルズ I	7	2	2	1	6	0	1	19
	木・5 スタディ・スキルズ I	5	1	1	1	6	0	2	16
	計	12	3	3	2	12	0	3	35
秋学期	水・5 スタディ・スキルズ II	7	2	2	1	6	0	1	19
	木・5 スタディ・スキルズ II	5	1	1	1	6	0	2	16
	計	12	3	3	2	12	0	3	35

「水・5」は水曜日 5 時限

## 2005年度 アカデミック・スキルズ I / II 履修者数

		文学部	経済学部	法学部(法)	法学部(政)	商学部	理工学部	看護医療学部	合 計
春学期	月・5 アカデミック・スキルズ I	4	3	4	2	6	0	0	19
	水・5 アカデミック・スキルズ I	7	3	1	1	2	0	0	14
	木・5 アカデミック・スキルズ I	3	7	4	2	4	0	0	20
	計	14	13	9	5	12	0	0	53
秋学期	月・5 アカデミック・スキルズ II	4	3	4	2	6	0	0	19
	水・5 アカデミック・スキルズ II	7	2	1	1	1	0	0	12
	木・5 アカデミック・スキルズ II	3	7	4	2	3	0	0	19
	計	14	12	9	5	10	0	0	50

「月・5」は月曜日 5 時限

2006年度 アカデミック・スキルズⅠ/Ⅱ 履修者数

		文学部	経済学部	法学部(法)	法学部(政)	商学部	理工学部	看護医療学部	合 計
春学期	火・5 アカデミック・スキルズⅠ	4	2	0	5	4	1	0	16
	水・5 アカデミック・スキルズⅠ	2	2	4	8	4	0	0	20
	金・5 アカデミック・スキルズⅠ	0	4	3	5	5	3	0	20
	計	6	8	7	18	13	4	0	56
秋学期	火・5 アカデミック・スキルズⅡ	4	2	0	5	4	1	0	16
	水・5 アカデミック・スキルズⅡ	2	2	4	8	3	0	0	19
	金・5 アカデミック・スキルズⅡ	0	4	3	4	6	2	0	19
	計	6	8	7	17	13	3	0	54

「火・5」は火曜日5時限の授業

2007年度 アカデミック・スキルズⅠⅡⅢⅣ 履修者数

		文学部	経済学部	法学部(法)	法学部(政)	商学部	医学部	理工学部	看護医療学部	合 計
春学期	月・5 アカデミック・スキルズⅠ	5	4	3	3	3	1	1	0	20
	火・5 アカデミック・スキルズⅢ テーマを究める	5	2	0	1	1	0	0	0	9
	水・5 アカデミック・スキルズⅢ 講義を究める	1	0	1	2	2	0	0	0	6
	計	11	6	4	6	6	1	1	0	35
秋学期	月・5 アカデミック・スキルズⅡ	5	4	3	3	3	1	1	0	20
	火・5 アカデミック・スキルズⅣ テーマを究める	5	2	0	1	1	0	0	0	9
	水・5 アカデミック・スキルズⅣ 講義を究める	1	0	1	2	2	0	0	0	6
	計	11	6	4	6	6	1	1	0	35

「月・5」は月曜日5時限の授業

## アカデミック・スキルズ(スタディ・スキルズ)

### アンケート質問事項

#### I

(1) アカデミック・スキルズ (スタディ・スキルズ) であなたが学んだことはその後、ゼミや職場などの活動で役立っていますか？ 該当項目に○をしてください。

- 1 全く役立っていない
- 2 あまり役立っていない
- 3 普通
- 4 まあ役立っている
- 5 大変役立っている

(2) (1) で答えた内容に関して具体的に述べて下さい。

(例：ゼミの報告会の時に ppt を使用し、印象深いプレゼンができた。営業先で自分のコミュニケーションがうまく取れたなど。)

#### II

(1) アカデミック・スキルズ (スタディ・スキルズ) の授業構成や進行の仕方について満足していますか？ 該当項目に○をしてください。

- 1 全く不満
- 2 やや不満
- 3 普通
- 4 まあまあ満足
- 5 大いに満足

(2) (1) で答えた内容について、具体的に良かった点、悪かった点、改善すべき点などを述べて下さい。

III 社会、ゼミ、授業の場に臨んで、もう少し学んでおけば良かったと思うスキルは何ですか？（「アカデミック・スキルズ」で学んだこと以外でもかまいません。）社会人の方は大学の授業で学んでおけば良かったと思うことはなんですか？

IV. アカデミック・スキルズでは、2007年度から、応用編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」を設け、具体的な講義からどのように問題を発見するか、そしてひとつのテーマをどのように複眼的に捉えるか、という点から「Ⅰ・Ⅱ」で身につけたスキルの応用を目指しました。今後アカデミック・スキルズをよりよいクラスにするために、皆さん方はどのようなクラスが展開できれば良いと考えますか？ご意見・アイデアをお寄せください。

履修年度 \_\_\_\_\_ 年度 そのときの学年 \_\_\_\_\_ 年

慶應義塾大学教養研究センター外部評価  
活動報告会

「みいだす・つなげる・ひろげる」—教養研究センターの過去・現在・未来—

---

2008年10月31日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1  
TEL 045-563-1111 (代表)  
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp  
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

©2008 Keio Research Center for the Liberal Arts  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。